

第2部

大宰府と古代山城の年代論



特別史跡 大宰府跡・大野城跡・水城跡

第2部 大宰府と古代山城の年代論

第1章 大宰府と古代山城の誕生	赤司 善彦	85
第2章 大宰府造営の年代論	杉原 敏之	97
第3章 日韓古代山城の年代論	向井 一雄	105
第4章 有明海沿岸における古代山城の年代論	矢野 裕介	129
第5章 瀬戸内海沿岸における古代山城の築城年代	南 健太郎	139

第2部では、律令国家形成における古代史像と直結する、大宰府と古代山城の年代論を検討する。第1部「大宰府の器と編年」で議論した内容をふまえ、大宰府と各古代山城の築造年代を示す資料を網羅的に整理した上で、築造の上限年代と下限年代の絞り込みを図る。

なお、第1章～第5章の掲載論考は、いずれも平成29年（2017年）2月18・19日に九州国立博物館・福岡県・熊本県教育委員会が合同で開催したシンポジウム『徹底追究！大宰府と古代山城の誕生』の当日配布資料を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。

九州国立博物館「大宰府学研究」事業・熊本県「古代山城に関する研究会」事業合同シンポジウム

徹底追究！ 大宰府と古代山城の誕生

日時 平成29年2月18日(土)13:00～16:00
2月19日(日)10:00～15:40

会場 九州国立博物館1Fミュージアムホール
〒818-0118 太宰府市右坂4-7-2 (太宰府天満宮横)

(定員) 280名 (参加申し込み不要・入場無料)
(主催) 九州国立博物館・福岡県・熊本県教育委員会

NTTホールディングス
050-5542-8600
(平日9時～17時/土日祝・年末年始)

2/18 基調講演 『大宰府と古代山城の誕生』
13:10～14:10 赤司善彦 (九州国立博物館学芸研究部学芸調査課長)

座談会 第1部 大宰府の器

14:25～14:55 座談1 「西海道の上層編年研究」 赤 善彦
14:55～15:25 座談2 「西海道北部の土器生産」 杉原 敏之
15:25～15:55 座談3 「西海道南部の土器生産」 南 健太郎

2/19 基調講演 第2部 古代山城の築城
10:00～10:30 座談4 「古代山城の年代論—朝鮮半島と日本列島—」
10:30～11:00 座談5 「大宰府造営の年代論」
11:15～11:45 座談6 「有明海沿岸における古代山城の年代論」
11:45～12:15 座談7 「瀬戸内海沿岸における古代山城の年代論」

2/14・2/19 パネル展示「九州の文化財」
8:30～17:00 (会場:九州国立博物館1Fエントランス)

シンポジウム『徹底追究！大宰府と古代山城の誕生』
13:30～15:30 シンポジウム・座談会
パネラー:赤司善彦、杉原敏之、向井一雄、矢野裕介、南健太郎

午膳後登壇資料
出土調査報告の整理

402号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
409号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
418号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
420号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
431号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
445号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
450号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
455号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
460号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
465号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
470号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
475号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
480号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
485号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
490号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
495号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
500号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
505号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
510号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
515号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
520号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
525号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
530号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
535号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
540号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
545号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
550号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
555号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
560号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
565号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
570号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
575号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
580号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
585号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
590号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
595号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
600号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
605号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
610号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
615号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
620号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
625号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
630号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
635号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
640号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
645号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
650号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
655号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
660号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
665号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
670号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
675号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
680号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
685号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
690号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
695号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
700号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
705号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
710号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
715号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
720号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
725号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
730号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
735号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
740号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
745号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
750号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
755号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
760号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
765号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
770号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
775号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
780号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
785号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
790号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
795号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
800号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
805号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
810号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
815号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
820号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
825号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
830号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
835号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
840号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
845号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
850号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
855号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
860号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
865号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
870号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
875号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
880号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
885号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
890号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
895号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
900号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
905号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
910号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
915号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
920号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
925号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
930号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
935号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
940号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
945号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
950号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
955号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
960号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
965号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
970号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
975号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
980号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
985号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
990号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究
995号 西海道南部の土器生産の調査報告と研究
1000号 西海道北部の土器生産の調査報告と研究

『徹底追究！大宰府と古代山城の誕生』ポスター

第1章

大宰府と古代山城の誕生

赤司 善彦

はじめに

大宰府とは「おおみこともちのつかさ」とも読み、大君の御言（命令）を捧持して地方を支配する行政官の役所という意味である。大宰府の組織や役割が確立したのは7世紀末頃とされ、8世紀初頭の大宝律令施行後に本格的に整備された。これを律令制大宰府とも称し、古代を通じて西海道諸国を統括し、外交と対外防衛の前線を担った。この律令制大宰府の官司は現在の太宰府市を中心に、約9百ヘクタールの広大な面積が特別史跡や史跡として保存されている。この大宰府が展開された地域を、便宜的に大宰府地域と呼ぶことにする。ここは博多湾沿岸より10kmほど南に入った地点である。まわりを山並みによって囲まれた盆地状の地形となっている。

今回のテーマのもう1つの柱である古代山城は、白村江敗戦後この大宰府地域を護るよう築城されているのが特徴的である。大宰府地域の盆地状をなす平地部分には福岡平野と南に広がる筑後平野を結んだ、幅1.2～1.5kmのくびれのような低地が形成されている。このくびれ部分を一文字に塞ぐようにして長大な水城が築かれ、その東側の四王寺山には大野城が、盆地状地形の真南には基肄城が位置する。

これら7世紀後半に築城された古代山城によって囲まれた大宰府地域とは、8世紀以降に内外の関門を管轄し、さらには西海道を統轄した大宰府（政庁Ⅱ期）が造営された場所である。課題は、大宰府政庁跡下層で確認された7世紀後半の官衙遺構（政庁Ⅰ期）の位置づけである。史料に見える筑紫大宰との関わりや、古代山城の成立とは密接なつながりがある。また、白村江敗戦に至る百済救援のために筑紫に行幸した斉明天皇の朝倉橘朝倉橘広庭宮と筑紫大宰はどのような関係にあったのかも考えたい。

ここでは近年の新しい発掘調査による知見を交えて大宰府と古代山城の成立から見えてくるものについて問題提起したい。

1. 白村江敗戦と筑紫大宰

今から1300年前の7世紀は、朝鮮半島の百済・新羅・高句麗による領土争いが激化した時代である。三国のみならず中国の隋・唐もこの抗争に介入し東アジアの緊張が高まった。百済との長年にわたる友好関係にあった倭国も、決して対岸の火事では済まず、その渦中に投げ込まれることになる。そのきっかけとなった大事件は、660年の百済滅亡であ

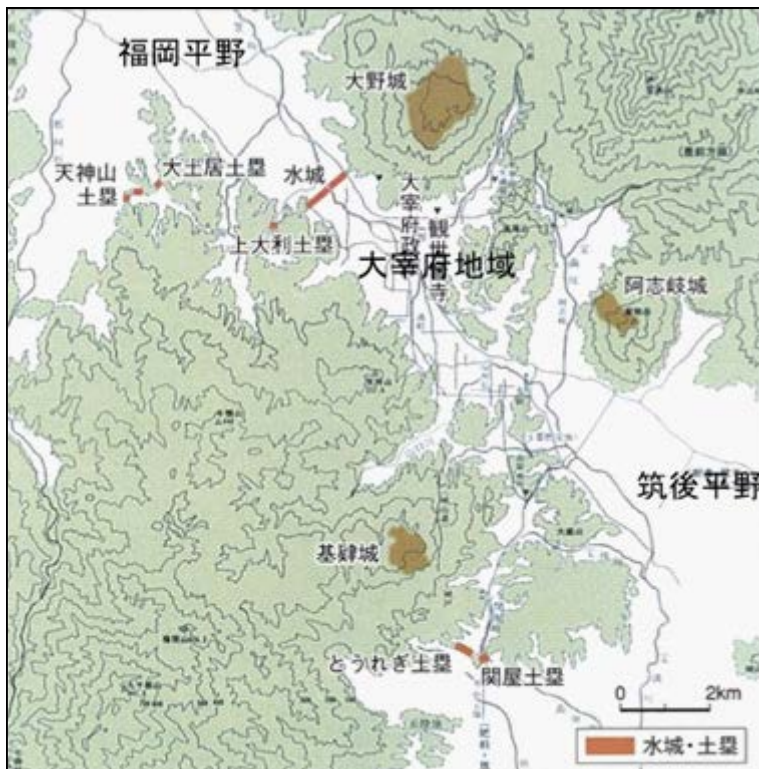


図1 大宰府地域周辺古代山城配置図

る。

百濟再興運動の支援を求められた倭国は、直ちに応諾し、天皇は全朝廷を引き連れて筑紫に行幸、併せて支援軍の派遣を決定した。ヤマト王権は、中核をなす中央豪族を主体に地方豪族との軍勢の派兵を開始した。663年、朝鮮半島南西部の白村江で唐の水軍と対峙した。兵力や作戦など全てにおいてその差は歴然であった。統制の取れた唐軍の前で、豪族軍の編成による倭国軍は壊滅したのであった。

この敗戦によってヤマト王権は、旧来の国造軍に頼ることなく統一した軍制や徴兵基盤を整えるなどのあらたな国家体制を構築する必要に迫られた。また併せて防御態勢を整備することも大きな課題であった。こうして筑紫と呼ばれた九州北部は、防御の最前線に立たされることとなった。

筑紫は白村江敗戦で最も疲弊していただけでなく、筑紫磐井の乱の例を出すまでもなく、ヤマト王権の在地勢力への不信感も根強い地域であったことから最前線を担った防人は東日本で徴兵された。701年の大宝律令によって律令制が整備される中で、こうした筑紫の地域支配を担ったのが大宰府と呼ばれた官司である。大宰府は、西海道の内政や出入国管理などの外交のみならず軍事機能も付与されていた。それは古代山城の大野城・基肄城・水城という7世紀後半に築造された軍事施設によって護られた、いわば大本営としての役割が期待されたからである。

このように筑紫の古代山城と大宰府は、密接な関係が認められるが、これまでの文献史学では、663年の白村江での敗戦後にとられた天智朝の防御戦略の一環として、博多湾沿岸から大宰府地域への筑紫大宰の移駐と、これを母体にして大宰府が成立したと位置づけられ、考古学的な調査もこうした通説に従ってきた。しかし、その前提となる筑紫大宰が掌握していた地域支配や軍事権、外交権の実態は明らかではない。これまでの議論は、大宝律令に規定された大宰府に対するイメージが前提となって、前代の筑紫大宰への史的接近が試みられてきたと言える。

白村江以後の緊張関係(天智朝期)

白村江敗戦後の倭国と東アジア地域的外交関係は、664年より唐使の来日、668年にも新羅との使節往来が再開されるなど、高句麗との間も含めて実際には活発な外交が展開されていた。一見平和へのプロセスのようでもあるが、実際には唐の高句麗征伐、668年の高句麗滅亡、670年の唐と新羅の旧百済領をめぐる戦争で、唐と新羅は連合せずに対立関係にあり、東アジア情勢はさらに混迷を深めていた。



図2 白村江海戦への道

敗戦後に想定された唐と新羅の倭国への直接の侵攻という最悪の事態は当面回避されたようにみえるが、天智朝は唐・新羅の侵攻を想定した防御体制の強化に乗り出していることから、戦後ではなく戦争中という認識だったと思われる。

敗戦の翌年に、朝鮮半島に通じる対馬・壱岐両島と北部九州の沿岸部を中心に防と烽を配置。まずは海浜防備と通信手段を整えた。同じ年に水城を築造し、翌年には瀬戸内への関門である長門国と筑紫に大野城・椽（基肄）城を築城している。そして2年後に畿内の宮都防衛の要地である生駒山系に高安城、そして瀬戸内の海上交通の要衝である四国の讃岐に屋嶋城、さらには領海の最前線である対馬に金田城

を築いている。戦略的には、律令官制として成立することとなる大宰府の周辺（大宰府地域）に水城・大野城・基肄城を配置し、ここに前線での集中防御態勢を構築。次に、金田城・屋嶋城・高安城などの多重の防御線を構えたものと推察できる。

ところで防人は主に対馬・壱岐・筑紫の沿岸部で国境警備のために配備された兵士で、8世紀中頃以降に西海道が負担するまで、東国の出身者を中心に3千人ほどが徴発されていた。その配備地は、「防」という施設で、「さきもり」の読みからして岬などの沿岸部とみられる。佐賀県唐津市中原遺跡出土の「甲斐国」・「戊」銘木簡は、防人が肥前国の沿岸にも配置されていたことを示すだけでなく、8世紀末に、東国防人廃止後も現地に留まっていた東国防人の実在を示す資料である。これら防人が配備された「防」や「戊」の遺跡はまだ明らかではないが、内陸の古代山城だけではなく、中世の元寇防塁にみられるように海辺での防衛ラインが想定されているのかは不明である。

筑紫大宰府の成立と緊張関係（天武・持統朝期） 672年、郭務悰の対新羅戦への出兵要請に対して、天智朝（近江朝廷）は大量の武器や武具を供与するなど、親唐寄りの姿勢へと変化する。直後に勃発した壬申の乱を経て皇位を手にした天武朝は、新羅との関係を強化する。朝鮮半島では、670年に始まった羅唐戦争が676年に新羅の勝利に終わり、翌年、唐は朝鮮半島から撤退した。こうして新羅が朝鮮半島の三国統一を果たしたことで、40数年に及ぶ朝鮮半島の争乱は終わった。倭国と唐との往来は全くおこなわれず、新羅からはほぼ毎年、倭国からは2・3年毎に使節の交流が行われるなど、大陸の制度や文化は、新羅を通じて摂取された。

天武朝後半以降には、東アジア情勢も落ち着きを見せたことから、律令制による地方支配の強化に比重が置かれるようになったとみられる。

ところで、朝鮮半島との間の国境が意識され、領土を護ることが重視された。その関門の府が後の律令制の大宰府である。大宰については筑紫大宰の官職名が推古朝期には出現するが、実在性は定かでない。実質的には天智朝期以降に徐々に整備されたとみられる。

筑紫大宰について 筑紫大宰に関しては、609年の『日

『日本書紀』・『続日本紀』の用例の変化

1 推古朝期	筑紫大宰
2 大化～斉明	筑紫大宰帥
3 天智朝期	筑紫率（帥）
4 天武～持統朝期	筑紫大宰
5 持統～文武朝期	筑紫大宰（帥・率）
6 文武期	筑紫総領
7 大宝～	大宰帥

本書紀』の記事が初見である。さらに宣化元年(536)に外国使節が去来する関門である筑紫にあって、(飢饉等の)非常に備えて那津官家を設置したとする記事も重要である。通説的理解ではこの那津官家が、大宰府の起源と考えられているからである。それは翌二年の記事を関連事項と捉えられているからである。その内容は、新羅による任那侵略に際して、大連大伴金村に任那救援を命じて、その子の磐と狭手彦を筑紫に派遣したとされ、狭手彦は渡海したが、磐はその地に留まり国政を執って三韓に備えたと記されている。こうした半島情勢を睨んだ筑紫の地域支配が、おそらくは那津官家で執行されたと思われることから、軍事・外交を視野に置いた大宰府の内政機能と通底すると考えられている。

このように大宰府の前身官衙を那津官家に位置付け、その長官は筑紫大宰と考えられている。筑紫大宰の名称は7世紀を通じて登場する。頻繁に登場するのは白村江敗戦以後のことである。筑紫大宰に対する外国使節の応接機能や防衛機能の強化と考えられる。また、大宰という地方官の制度は筑紫だけでなく7世紀末頃には、吉備・周防・伊予にも設置されていた。これが大宝律令施行後は、筑紫大宰府のみ存続したと考えられる。

さて、筑紫大宰は官司あるいは職名であろうが、後には筑紫総領とも呼称される。この総領は天武・持統朝期を通じて、筑紫以外に東国や吉備・周防・伊予・播磨の地方にも登場する。筑紫とともに総領と大宰が設置されたのは吉備である。唐や朝鮮半島との外交では、第一線の筑紫だけでなく、畿内から筑紫へと通じる瀬戸内地域の安定確保が重要であったことはまちがいない。筑紫・吉備大宰は広域行政だけでなく軍事的な権限も付与されていたと考えられている。

この吉備大宰・吉備・周防・伊予総領が置かれた地域と古代山城の関わりも近年クローズアップされてきた。このうち岡山県鬼ノ城山城は発掘調査の結果、7世紀後半～8世紀初頭の存続が確実となってきた。また、鬼ノ城で完成した角柱の掘立柱式門礎が同じ瀬戸内の山口県石城山城・香川県讃岐城山城・兵庫県播磨城山城でも出土し、寸法も一致するなど城門構造で設計と築城時期が関連していることを示唆する。

一方で九州北部の神籠石式山城もその多くが立地条件や城壁構造などで一致し、その配置が大宰府を中心にして四方に延びる官道沿いに配置されていることは、筑紫大宰との関連性が窺われる。この吉備と筑紫の大宰そして総領制は、律令制の国司制度が整備される中で廃止され、筑紫大宰のみが律令制の大宰府へと引き継がれていった。古代山城の役割も、築城当初の対外的な緊張関係だけでなく、地域支配や律令的な支配としての拠点形成も考慮に入れる必要がある。

2. 大宰府政庁の構造と変遷

次に大宰府の成立をこれまでの調査成果から考えてみたい。大宰府諸官衙の中核である大宰府政庁跡の発掘調査は、1968年に開始された。これまでの数次にわたる調査の結果、政庁の規模と構造が明らかになった。調査開始前に地表に現れていた礎石の建物は、10世紀中頃に建て替えられていたこと、また奈良時代以前には掘立柱建物が先行して存在することなどが明らかとなった。その結果、政庁の建物群はⅠ～Ⅲ期の時期区分がなされ、Ⅰ期は7世紀後半を中心とする掘立柱建物、Ⅱ期は8世紀前半の祠堂院様式の礎石建物、Ⅲ期はⅡ期を踏襲した建物配置の礎石建物であることが理解されるようになった。

さて1998年からは政庁正殿跡の発掘調査が実施された。調査は正殿基壇とその周囲を対象に実施され、基壇の東半分のみ掘り下げて本来の基壇を露出させた。その結果、正殿の基壇もⅡ期のプランをそのままにⅢ期には積土が嵩上げされ、礎石もこれに伴って据え直されていたことが判明した。また基壇の周辺からは政庁Ⅱ期以前の掘立柱建物や溝状遺構、柵を検出した。これらは重複関係や層位から大きく3つの小期に分けることができる。ここでは便宜的にⅠ-1～3の小期と呼ぶことにする。

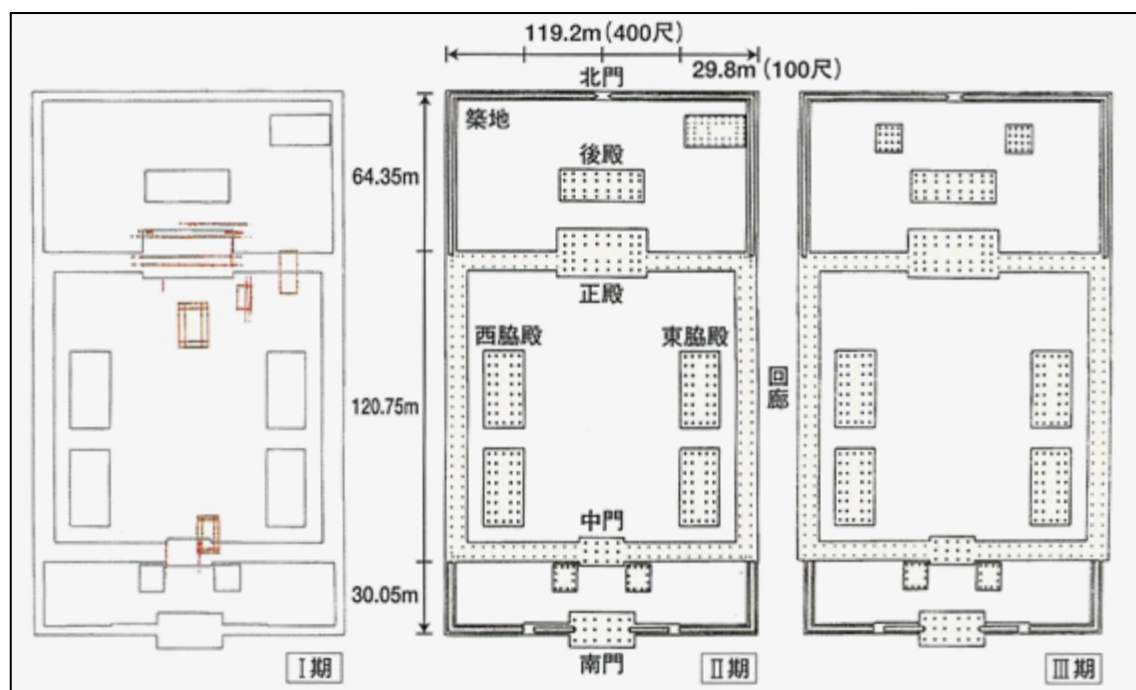


図3 大宰府政庁変遷図

注目すべきことはすべての建物と柵・溝状遺構が真北の方位線に拠って設計され、しかも整然とした配置を予測させることである。ここでは小時期ごとに調査成果のうち注目される点をいくつか取り上げてみる。

図4のように、I-1期の遺構は、II期政庁の北門にあたる位置から、柵と建物と考えられる遺構が検出されている。正殿地区では調査区の北側を東西に伸びる柵と南北棟建物2棟がある。この柵SA111の柱穴は1m以上と規模は大きいが柱間寸法は1.8～2.0mとばらつきがある。なにより柱間寸法が短いことが特徴的である。この東西方向の柵と関連が強いのが、中門地区で検出した柵SA044である。同じく真北方位で東西方向に伸びる。出土土器は6世紀後半の返りのある須恵器蓋が1点出土している。I-2期の柵SA045と重複し先行する。柱間寸法がSA111と同じく1.8～2.0mとばらつきがある。このことから東西に伸びる南北の柵は同時期に存続したとみてよい。

次にI-2期の遺構群では、II期正殿基壇と重複するような大型の東西棟とその南側前面でも同時に存在した大型南北棟を検出している。ただし、正殿下層の東西棟は上部の礎石を避けながら、しかも基壇の破壊を最小限度に留めた調査であったことから確実な平面プランを明らかにできなかった。図5に示したように南側に庇がつくことは間違いないが北側柱列には柵が連続して延びる変則的な長舎構造が推定可能である。また、前面の南北棟は5間×7間の4面に庇を有した大型建物である。

一般的に四面庇構造の建物は中心的な建物に採用されることが多いが、柱の痕跡からすると用材は25cm前後とそれほど立派なものではなく、また柱間も9尺(270cm)と長尺が採用されていないため、中心建物とするには躊躇せざるをえない。I-3期は基壇の整地を行った段階で建てられた総柱建物を主体とする。柱間寸法にばらつきがあり倉庫というよりは板張り構造の建物ではないかと推測できる。II期政庁の造営に伴う仮説的な建物と考えている。

以上が正殿跡で得られた政庁I期の遺構群である。それぞれの存続時期は、出土土器からI-1期が7世紀第三4半期～第四4半期、I-2期が7世紀第四4半期～8世紀第一4半期、I-3期が8世紀第一4半期の存続が考えられる。

3. 政庁I-2期の施設と筑紫の新城

政庁I期の建物群の中でも、とりわけ注目されるのが政庁I-2期である。特に建物を囲む外郭施設の存在である。これは礎石建物となったII期政庁域とそれほど変化のない範囲をすでにI期段階から占地していたことになる。言い換えるとII期政庁は、政庁I-2期の施設の配置計画を基本的にはほぼそのまま踏襲して造営されたものと理解できる。現段階ではII期政庁のように正殿前面に脇殿を配置し、内庭部を設け、そこでの儀礼空間を重視した配置ではないようである。しかし、柵や区画溝の存在はすでに周辺とは独立した一郭が形成されていたことを物語っている。正殿下層の東西棟がII期の前身にあたる正殿もしくは主要殿舎であった可能性否定されないように思われる。

ところで、この政庁I-2期の施設造営は、持統3年(689)6月の飛鳥浄御原令施行と翌年の「大宰・国司皆選任」によって筑紫大宰の官制が飛躍的に整備されたことと関連している。小田富士雄氏も「新令によるこれらの動向は筑紫大宰府の正式発足とみるべき」として、この政庁I-2期を政庁II期の整備へと繋がる大きな画期としてとらえられている。まさしく政庁I-2期施設は政庁II期の前身官衙としても重要な意味を持っていたとみられる。なにより制度の整備がなされたということは組織もこれに付随するため、前提に建物等のハードの整備が終わったかもしくは同時進行されたと考えられる。

政庁I-2期施設と周辺整備は、持統3年の「遣直広参石上朝臣麻呂・直広肆石川朝臣虫名等於筑紫給送位記、監新城」の解釈とも関わる。飛鳥浄御原令制によって位階制度が導入され、その最初の授与が筑紫の官人たちであった。この筑紫の新城については新規の都城とする考え方がある。

都城はその概念からすれば農村地帯とは全く異なる景観が成立していなければならない。道路や宅地

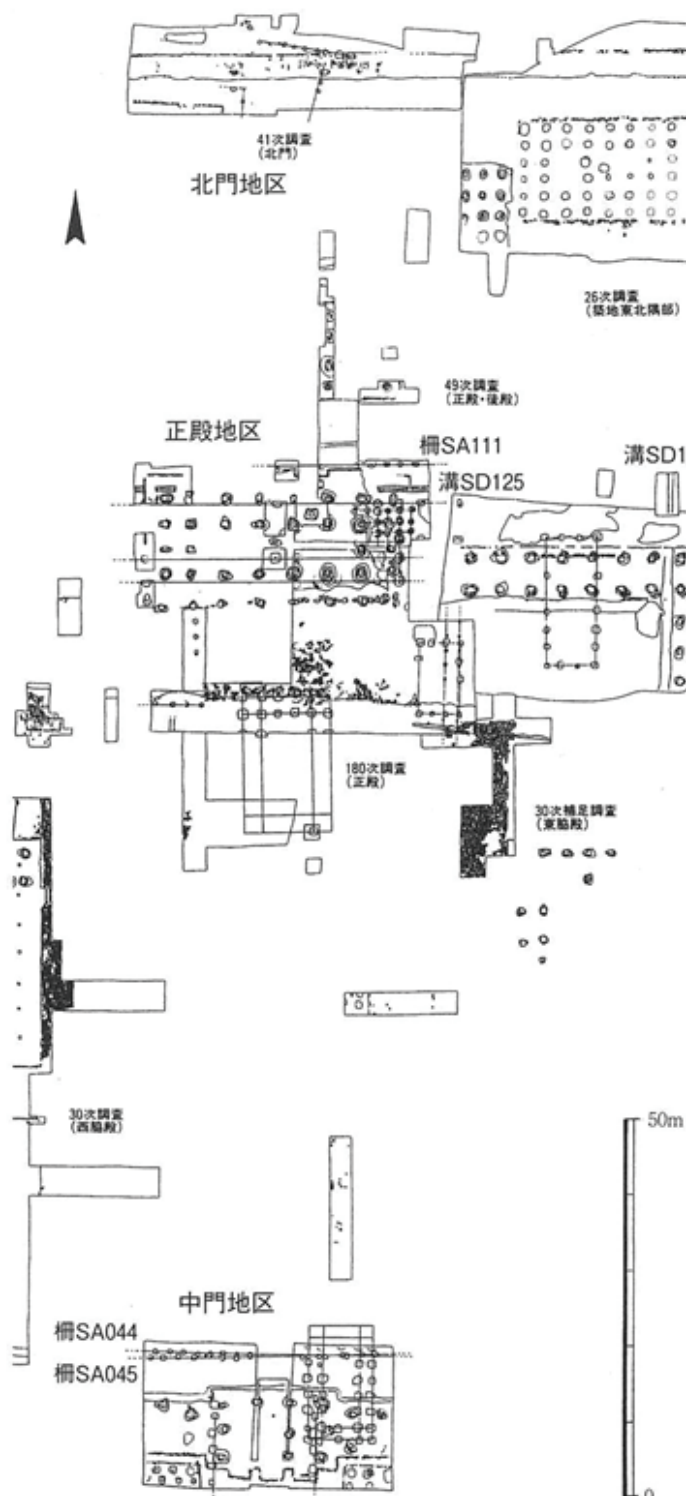


図4 大宰府政庁発掘調査図

大路は合致せず、異なる設計基準が採用されたと太宰府市教育委員会の井上信正氏はみている。続けて、条坊痕跡の一部で7世紀第4四半期に開削された区画溝があることから、大宰府の街区は、Ⅱ期政庁・観世音寺に先行して設計・施工された可能性をも考えている。

これは持統3年の筑紫の「新城」を考古学的に裏付けることになる。この新城の用例は王都が最初である。天武5年(676)に、飛鳥宮の北方で造営が開始された「新城」は、後の藤原京の条坊制に継承される方格地割であり、その段階では藤原宮は存在していなかったと考えられている。中枢施設の建設

割りなどの都市計画である条坊の施行が条件となる。持統三年の位階を受けた筑紫の官人とは、筑紫大宰府の官人と考えられる。この浄御原令によって位置付けられた新しい官司制では、筑紫大宰が律令制の大宰府の職掌である「番客」・「饗宴」に繋がる対外機能を付与されていたとみられる。そのため外交使節を応接する荘厳された空間整備が必要であるだろうし、また、官人の具体的な執務空間としての官衙建物群の整備が必要である。さらには位階に応じた官人達の居宅を供給する土地利用の基盤整備も重要となる。

大宰府の地割制については鏡山猛氏によって方1町の条坊復元案が提示されて以来、新たな条坊復元案が想定されるとともに、太宰府市教育委員会を中心に発掘調査で得られた区割り痕跡を基にした検証や新しい条坊復元の研究が進展してきている。

これまでの知見では、政庁Ⅱ期に政庁前面域で大尺250尺の区割りの存在が明らかになると、この基準尺が条坊全体に及んでいたとする条坊復元案が考えられ、条坊呼称も成立は10世紀であるとしても、7世紀末から8世紀初期に条坊制の方格地割りが施行されたと解釈されるようになった。その後も政庁Ⅱ期の段階で大尺250尺(90m)を基準尺とした方格地割が、条坊痕跡の精査で整合性のあることが追認された。しかし、政庁と観世音寺の建物と、その両者の前面から南に延びる大路の設計は和銅6年(613)に採用された小尺を基準にしていることが明らかとなった。そのため、街区とこれら南北

と街区の条坊制導入の時期にズレがあったということである。王都と大宰府の場合を直接比較することには慎重でなければならない。さらに大宰府の場合は、Ⅱ期政庁の建設に先行するわけであるが、Ⅰ-Ⅱ期政庁の段階であれば、政庁と街区の建設はほぼ同時期とみることもできよう。

Ⅰ-Ⅱ期政庁の実態は、対外機能の強化に伴う筑紫大宰への役割の付与を体現したものと考えられ、ここに律令制の大宰府成立の大きな画期を認めることができよう。正殿とおぼしき建物を中核に儀礼空間を重視した配置が、Ⅱ期政庁にそのまま重なって踏襲されていることから指摘できるのではないだろうか。

4. 政庁Ⅰ-Ⅰ期の歴史的位置付け

では、政庁Ⅰ-Ⅰ期の施設は、どのような性格を考えるべきだろうか。前述したように正殿域の東西の柵SA111とSA044は区画施設の可能性が高い。この区画内では規模の異なる南北棟の建物が検出されているが、その配置からは残念ながら建物の性格を類推することはできない。また、上層はⅡ・Ⅲ期政庁の回廊によって囲まれた内庭部にあたり、玉石が敷き詰められていたことから、下層の発掘には慎重にならざるを得ず下層の発掘調査は実施されていない。またこの2条の柵がどのように折れ曲がって区画されていたのかも不明である。両柵は柱間の間隔が短くバラツキもある。複廊のように荘厳された様子もなく、木柵だったと考えられる。現段階では門が想定されるような柱間が広く開けられた部分も見あたらない。

興味深いのはこの2条の東西柵の間隔は約118mで、小尺の単位が不明ながら仮に0.295mとすると、400尺の完数となる。これらが一体の区画施設として接続するものか、確認できていないが、完数尺を採用していることから一連の区画施設の可能性を考えておきたい。この区画がどのような空間であったのか、現状では手がかりがないが、Ⅰ-Ⅰ期の段階で一郭を構成した可能性があり、とりわけ真北方位を採用していたことは重要である。

王都では飛鳥宮Ⅱ期（飛鳥板蓋宮）から真北方位が採用され、その周辺への波及は天武朝頃には始まったという。北極星の方向を正南北線とした東西南北の中心点から、旭日方位を測り冬至を暦の始まりとして、政をおこなう考え方は、古来よりの信仰に大陸からもたらされた宗教が影響を与えてのこととみられる。『日本書紀』では、天武4年（676）に占星台が創設されたことを伝えている。このころ天文観測に基づいた祥瑞思想が定着したと考えられるが、それ以前の斉明4年（658）に沙門智諭が指南車を造り、天智5年（666）にも指南車を献じた記事がある。構造は不明だが、常に一定の方位を指し示すような構造と考えられる。後の和銅元年（708）の平城京遷都の詔勅で、四神思想を背景に都の位置選定を実施していることからわかるように、この頃から為政者層にとっては豊穡を祈願し、農耕暦に沿った政が明確に意識され、そのための真北方位が採用されたのであろう。

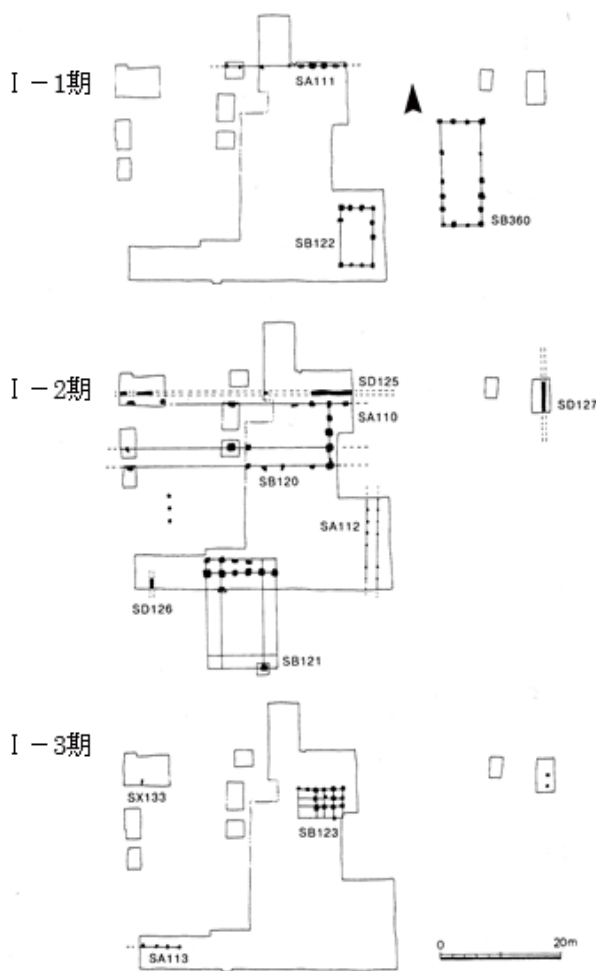


図5 政庁正殿地区Ⅰ期の遺構変遷図

このように7世紀第3四半期に位置付けられる政庁Ⅰ-1期の建物群は、王都に倣った位置選定と周辺地域を含めた造営計画が、新しい思想を基盤に生み出されたのである。この点からも政庁Ⅰ-1期がいかに重要な施設であったのかが推測される。

では、この政庁Ⅰ-1期の建物は、どのような性格のものであったのか。白村江での敗戦を契機に、水城や大野城等防衛体制の整備に伴って那津官家に駐在していた筑紫大宰が現在地へ移動してきたとする考え方が定着している。特に1968年の大宰府政庁の発掘調査で、7世紀後半の掘立柱遺構が、礎石建物の下層から確認されたことによって、通説となったのである。しかし、大野城の築造が白村江敗戦前に着手されたとすれば、これまでの一般的な見方の再検討にもつながることになる。大野城や基肆城の築城は、これらの外郭施設によって守護されるにふさわしい重要施設が中心に存在することを前提としている。その要石ともいえるべき、中核施設を担っていたのは筑紫大宰とその属領組織と断定してよいのだろうか。

5. 大野城の築城年代について

今回、大野城太宰府口城門から出土した木柱の年輪について、X線CTによる再評価を行った。その結果、650年の伐採年代という知見が得られたが、665年の築城記事との15年の年代差について考えてみたい。

『日本書紀』天智朝期に記載された白村江敗戦後の文脈をたどると、白村江敗戦後の緊迫した情勢の中で、山城が初めて構想されたと理解されてきた。そのため、築城開始が白村江敗戦を溯ることはあり得ないということになる。ここで、築城史料について検討してみたい。

築城史料 『日本書紀』は、663年の白村江敗戦後の国防策について次のように記す。

「664年 於對馬嶋壱岐嶋筑紫國等置防與烽 又於筑紫築大堤名曰水城」

「665年秋8月 遣達率答本春初築城長門国、遣達率憶礼福留達率四比福夫於筑紫国大野及椽二城」

敗戦の翌年に、対馬・壱岐・筑紫へ防人や烽を置き、最前線の防備と通信手段を整える。併せて九州本土（筑紫）へ上陸した場合に備え、その主要な交通路を遮断するために水城を築き、翌年に、百済の兵法や築城技術を活用した大野城・基肆城を築いて侵攻に備えた。つまり、唐羅の侵攻に怯えわずか数年の短期間で集中的に築城しれたと理解されてきた。史料の記載を疑うものではないが、築城時期は溯る余地はないのであろうか。今回の伐採年代の扱いには慎重であるべきだが、築城開始の問題について



図5 出土木柱（囲みは刻銘）



図6 大野城太宰府口城門跡

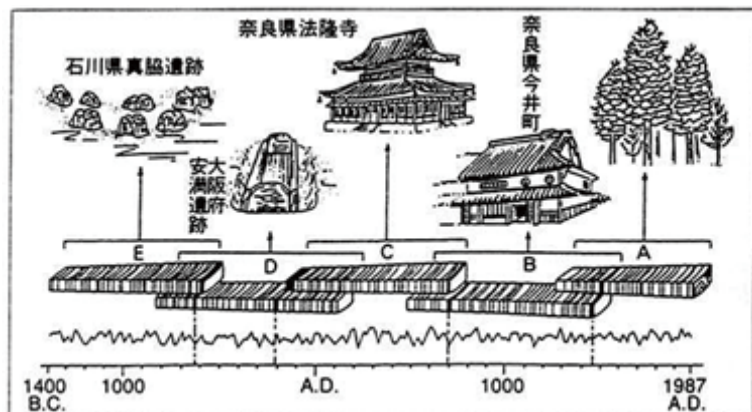


図7 年輪年代測定概念図（池上曾根遺跡シンポジウム資料集）

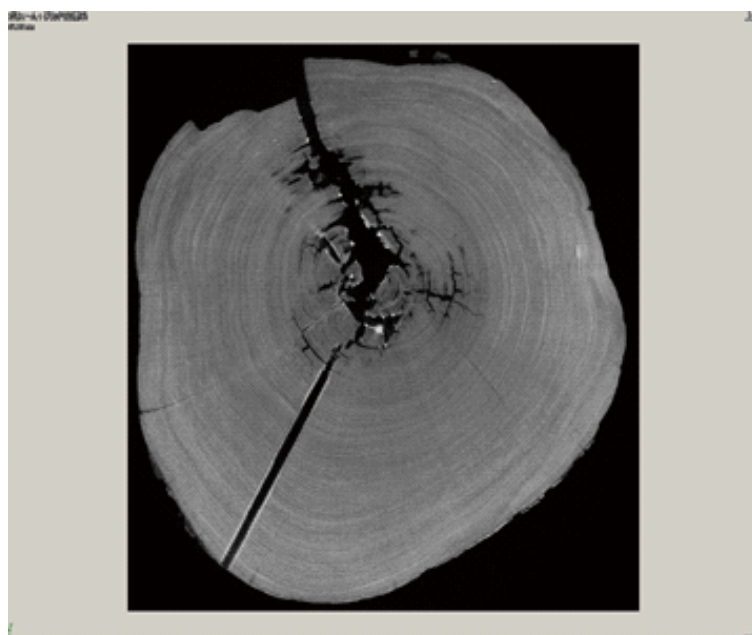


図8 木柱のCTスキャン断面画像

課題を整理したい。

木材の調達について 最初に検討しておかねばならないのが、この木柱が大野城の築城のために伐採された材木であるが否かである。大野城築城のために伐採がなされたとすると、築城計画はそれ以前に立てられたということになる。現代の建築に即して考えれば、基本・実施設計（選地・施設内容・動員計画など）が固まった段階を経て、工事のスケジュールに入り、さまざまな材料と一緒に、木材の調達もなされただろうと推測されるからである。

大野城のために調達された木材ではないケースを考えてみたい。建築材が当初の建築物から別の建築物に転用される例が少なくない。例えば同じ時期に築造された水城の遺跡のなかで、春日市大土居水城跡の調査で発見された木樋には、木樋の構造と関わりのないさまざまな加工痕があり転用材が用いられていた。今回の木材については、表面に仕口などの柄や柄穴、建築材としての加工痕は残されていない。そのため、現存する部分では転用材と考える積極的な根拠はない。

では、別の建築用に長期間寝かせていた材を使用したことも考えられないだろうか。調達期間では、伐採・集積・運搬の工程が考えられる。それだけなら最大でも半年あれば充分であろう。これに枯らしによる自然乾燥の期間も必要である。建築材として寸法のくずれや割れを防ぐための事前の乾燥は、樹種や材の大きさによって期間は異なる。樹齢二百年の杉材では2～3年であるとのこと。しかし含水率の低いコウヤマキの場合は、一般には枯らしは必要ないという。この木柱は大野城築城のために伐採され、それほど時間をかけずに現地へ運び込まれたと考えてよい。

築城記事は開始か完成か 次に、大野城の築城と記された665年記事が、完成なのか開始なのかも留意しておかねばならない課題である。『日本書紀』の場合、各種の原史料にある過去の情報を整理したうえで編年体による記述がなされている。そのため一般的な解釈として、編者の意図は完成記録にあると考えるのが妥当であろう。

確実に築城の始まりを記述した記録が残されている。福岡県前原市に所在する怡土城は、『続日本紀』の天平勝宝八年（756）条に「始築怡土城」と記されている。このように築城開始年の事例があることからすると、築城と記されている場合には完成の年と考えてよいのではないだろうか。

築城開始の時期について では、いつ頃まで築城開始時期は、溯るのであるだろうか。先述したようにこ

れまでの定説では『日本書紀』の記述の流れから、663年の白村江敗戦を契機に築城が開始されたと考えられてきた。古代山城は緊迫した状況の中で、百済からの亡命してきた武將を登用することで初めて本格的な城塞が築かれたとする理解である。大野城の築城に遣わされた憶礼福留については、『日本書紀』663年9月条に、日本へと向かうことになった経緯が記されている。憶礼福留の来日後からとなると、665年8月築城の大野城はわずか2カ年という短期間で築城されたことになる。この時、筑紫国の10km圏内で、大野城、水城、基肄城も築造されていたことになる。

古代山城の施工期間を知り得る史料は、怡土城についての記事がある。天平勝宝8年(756)に、大宰大貳の職にあった吉備真備が専断して築城が始まり、765年には吉備真備に替えて佐伯宿祢今毛人を「築怡土城専知官」に任命して神護景雲2年(768)完成した。この佐伯今毛人も東大寺の造営責任者であった建築の実務に長けた人物のようで、後には造長岡宮使に補されて都の造営にも手腕を発揮した。この怡土城の築城期間は実に13年の歳月を要している。

怡土城は大野城などの7世紀の山城とは城壁の選地の仕方や構造に違いがあるが同規模なので、そのまま当てはめられないとしてもおおよその目安にすることはできる。この13年を単純に適用し大野城の665年から溯らせると、650年の伐採年代に近づくことになる。

白村江敗戦以前の築城に関する史料 このように施工期間は長期に及んだと考えて、大野城の築城開始を溯らせる推論に史料的な根拠を与えることはできるだろうか。

650年頃にはどのような対外的な動きがあったのだろうか。対新羅との関係では『日本書紀』白雉2年(651)条に「于時巨瀬大臣奏請之曰、方今不伐新羅 於後必当有悔。其伐之状不須挙力、自難波津至筑紫海裏、相接浮盈艫舳、召新羅問其罪者、可易得焉。」の記事が注目される。新羅は648年に唐との間で軍事同盟を結んでからは、礼服の制度など各種の唐の制度や文化を取り入れ、650年にはついに自国の年号をあらためて永徽の年号を採用するなど、唐風化政策を推進した。そして651年に新羅使が来朝したおりに唐服を着用していたことを不快として追い返し、先のような新羅に対する軍事的存在感を示して、新羅を詰問しようと考えたのである。軍事的プレゼンスが実行されたかどうかはわからないが、この記事は、新羅を仮想敵国として意識し、この頃から新羅征討の機運が高まったことの徴候とみることができる。唐と新羅との軍事的対立が650年段階で決断されたとするのは早計であろうが、645年以降、毎年来朝した新羅使節に対して、なんらかの武威を示す動きがヤマト王権内にあったことも考えられる。山城の築城がこのような朝鮮半島での唐の介入を避けるために、新羅への対抗措置としてとられ、大野城をはじめ水城・基肄城という軍事拠点の造営計画を進めたと考えられないであろうか。

ところで、665年以前に城塞築城の史料として、『日本書紀』斉明4年(658)是歳条の分注にある「繕修城柵断塞山川之兆也」の記事がある。これは神籠石の築城説の根拠とされていたが、大野城や水城の造営を指し示すとする見方もある。

くりかえすと、その根拠として古代山城の築城期間が長くなることを考えてみた。築城には土や石材・木材など用材の調達・運搬・加工、そして土木・建築・鉄器生産・瓦生産など各種の技術力とこれを支える労働力を集約させる必要があり、水城・基肄城を含めた大工事であったことや、怡土城の築城期間を参照にしても、少なくとも二・三年での築城は困難ではないかと考えたからである。

これまで、大野城の築城が白村江以前に計画された可能性について述べたことはあったが、650年まで溯ることの当否は、私自身まだ疑問に思うところもある。これまでの築城年代に対する史料との関連付けは、まだ慎重を期す必要がある。

おわりに

大宰府と古代山城の成立について、考古学の知見から述べてみた。昨年、筑紫野市の前畑遺跡が羅城の土塁ではないかという見方がだされた。羅城とは都城の外城である。仮にその羅城が大宰府地域に囲

続されていたとすると、水城から大野城・基肄城などを取り込んだ都城の構想が664年段階ですでに実現されていたことになる。そのようなマスタープランはいつ構想されたことになるのだろうか。また、その羅城で守護される主体はどのような人たちであったのかという興味がますます沸いてくる。

大宰府は百済の泗沘東羅城の敷葉工法が水城土塁の工法に共通することからも、強い関連性が指摘される。一方で新羅の王都である慶州にもその山城の配置など類似点を指摘でき、羅城は設けられていないことを以前に指摘した（『古代山城研究の現状と課題』『古代山城の世界』月刊文化631 2016）。今後も構想だけではなく明瞭な羅城遺構の存在によって議論は深めなければならないと思う次第である。

※本稿は主に下記の記事等より再構成した。

赤司善彦 「筑紫の古代山城と大宰府の成立について－朝倉橘廣庭宮の記憶－」『古代文化』61－4 （財）古代学協会 2010

赤司善彦・光谷拓美 「大野城の築城年代再考－大宰府口城門出土木柱の年輪年代の測定から－」『東風西声』7 九州国立博物館 2011

大宰府政庁跡は、一年を通じて市民が集う遺跡である。遠方から大宰府の旧跡を訪ね来る見学者に加えて、散歩やジョギング等で散策する市民も多い。政庁跡を含む大宰府史跡の特色は、日々の生活に溶け込む形で存在することにある。復元建物等で視界を遮らずに、里山としての景観を残していることも、大宰府史跡の魅力の一つと言えよう。政庁跡の周囲では、桜や梅、紅葉などの広葉樹に加え、区画溝には菖蒲が植樹されており、四季の移り変わりを身近に感じられる。

なお、今日の「大宰府」表記は、古代の役所やその遺跡に対して用い、中世以降の地名や天満宮については、「太宰府」の表記を用いることを原則としている。本論集における大宰府・太宰府の表記も本原則に沿っている。

(小嶋 篤)



桜花が巡る政庁跡



緑に覆われた政庁跡



秋空の下政庁跡



雪化粧をした政庁跡

第2章

大宰府造営の年代論

杉原 敏之

はじめに

令制大宰府は、外交儀礼や辺境防備、管内支配という独自の政治機能を有していたが、その機能を実現するためにも多様な施設を造営した。この大宰府の造営時期を捉えるためには、中枢施設である大宰府政庁を中心とする官衙、軍事施設として大宰府外郭を構成する水城や大野城など諸施設総体として検討する必要がある。当然ながら、年代論の基準となるのは遺構と遺物の対比から積み上げた相対的な時間軸であり、特に重層的な調査事例が重要になるのは言うまでもない。本論では、筆者自身が直接関わった大宰府政庁跡の調査成果を基にして、水城跡や大野城跡を含めた大宰府造営の年代論について考えてみたい。

1. 大宰府政庁と周辺官衙の造営時期

(1) 大宰府政庁の造営

大宰府における大きな画期はⅡ期大宰府政庁の造営である。西海道の官衙では最初の瓦葺殿舎の礎石建物であり、都宮の朝堂院形式を採用した南北215.45m、東西119.2mの規模で、内庭部の東西に脇殿を、中央奥には宮の大極殿に相当する正殿を配している。政庁の平面配置は、政庁中軸線を折り返した東西幅119.2mの四等分が29.9mで天平小尺(=29.8m)の100尺に相当する。小尺採用は和銅6年(713)の改定以後で、Ⅱ期政庁造営はこの時期以降に本格化し、霊亀・養老年間に成立したと考えられている(狭川1991他)。

Ⅱ期政庁以前のⅠ期政庁には掘立柱建物が置かれた。正殿地区では、Ⅰ期政庁が古・新段階に分かれることが確認されている(杉原2007他)。Ⅰ期新段階の政庁には、正殿下位に重複する南面廂を持つ長舎状の大型掘立柱建物SB120があり、掘立柱の板塀(柵)が接続して溝が巡る。また、前面には南北棟の四面廂建物SB121が配されている。さらに遡って最下層には、Ⅰ期古段階の掘立柱建物の一群がある。限定的な検出状況だが、正殿地区では7×3間の南北棟建物

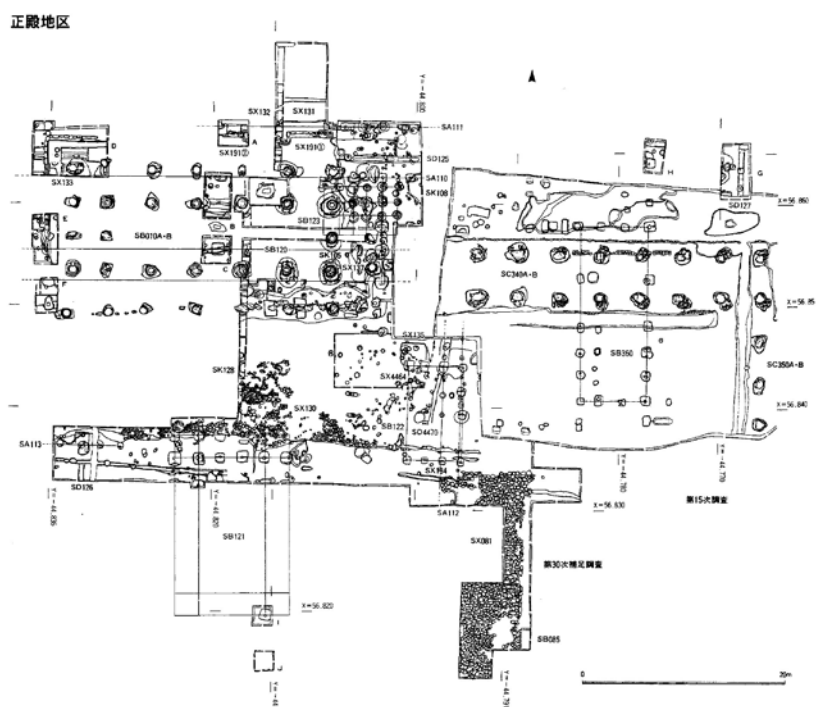


図1 大宰府政庁跡正殿地区調査図

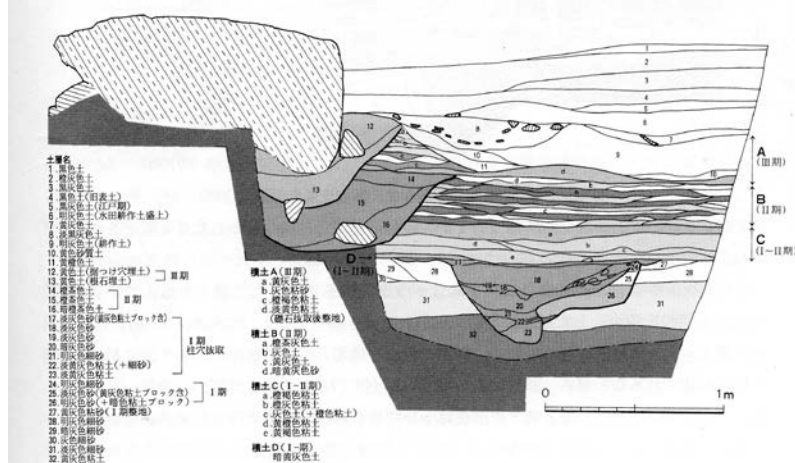


図2 大宰府政庁跡土層図

SB360、5×3間のSB112、北側に柵SA111がある。

Ⅱ期政庁へと繋がるⅠ期遺構の廃絶に関わる土器は、Ⅱ期正殿基壇やその下位の積土、掘立柱建物の柱の抜き取りや痕跡から出土している。須恵器坏蓋にはボタン状に潰れた撮みと口縁を三角形に肥厚させるものがあり、また中門鎮壇具に使用した長頸壺片や回転台使用の土師器が含まれる。土器群を総体として見ると、概ね8世紀第1四半期を下限とし、政庁Ⅰ期新段階

の遺構はこの時期まで継続したことが分かる。この土器群の一部にはⅠ期新段階の上限を示す一群も含まれるが、須恵器では擬宝珠状の撮みを持ちながら口縁に返しを持つ坏蓋や、高台をハの字に踏ん張るものや無高台の坏身が該当しよう。概ね7世紀第4四半期を示しており、特に近接する回廊東北隅部ではまとまって出土している。

なお、この前段階に比定されるⅠ期古段階から新段階の土器は極めて限定的な出土である。北門地区築地積土下位の第1整地層で出土している。須恵器では天井部が高く、口縁端部に返しを持つ蓋や体部に丸みを持ちながら高台をハの字に

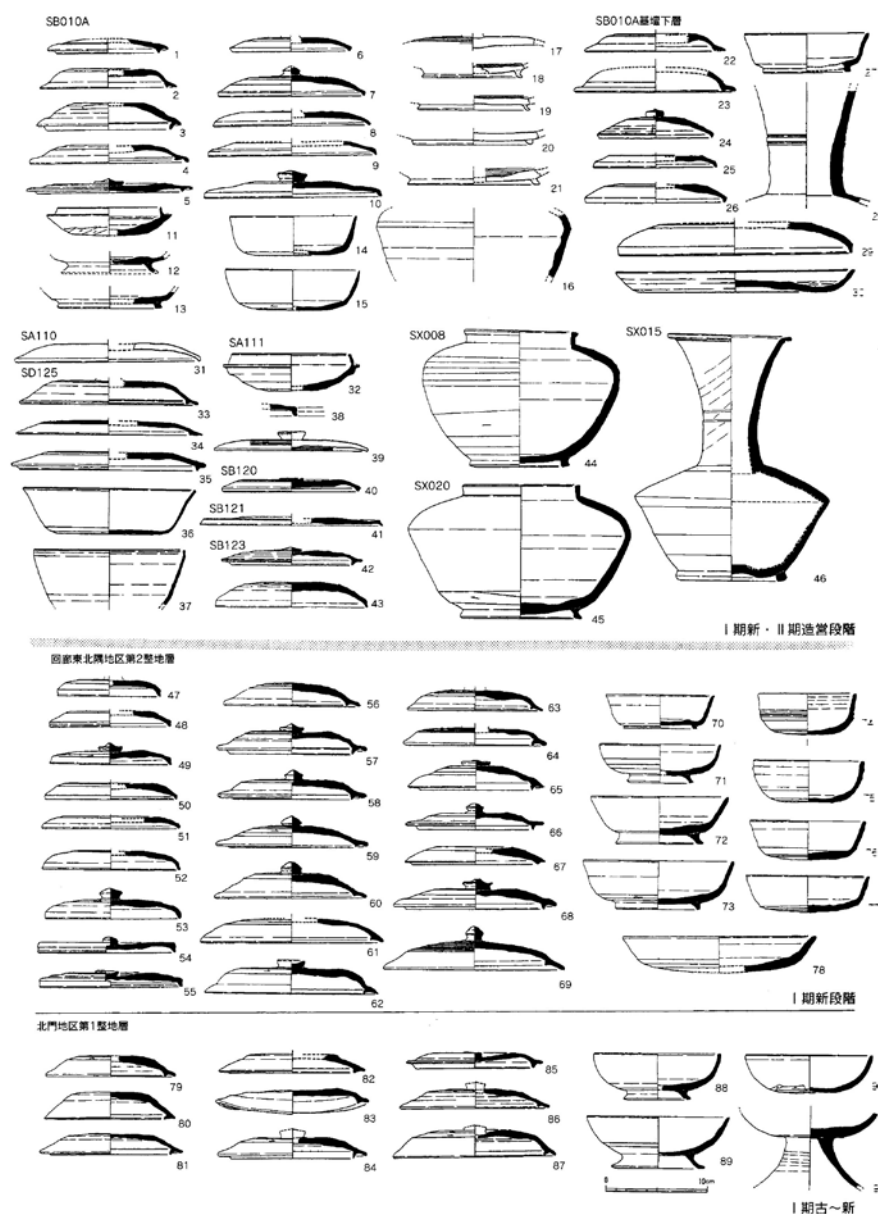


図3 大宰府政庁跡出土土器

踏ん張る一群がある。

（2）周辺官衙の造営

政庁前面では、Ⅱ期政庁に併せて大規模な官衙群が整備された。まず、政庁正面には広場、東に日吉地区官衙、西に不丁地区官衙と大楠地区官衙がそれぞれ位置し、南北の溝によってそれぞれ区画されている。各地区の境界溝の割付をみると、正面広場を挟んで東西に位置する日吉地区官衙の西境界溝SD4660と不丁地区官衙の東境界溝SD2340の溝心々距離が184.4m、SD2340と不丁地区官衙の西境界溝SD320の距離が溝心々87.3m、さらにSD320と西側の大楠地区官衙の区画溝SD2680の溝心々距離が89.2mで割り振られている。これらの溝は、小尺（=0.296m）換算で、SD4660とSD320間 が 約620尺、SD2340とSD320、SD320とSD2680の距離がそれぞれ約300尺となる（九州歴史資料館1986）。そして政庁中軸線からSD2340までの心々距離は、102.4mになる。

官衙の区画溝の配置は御笠川以北の官衙域では妥当だが、以南の条坊域との関係からみ

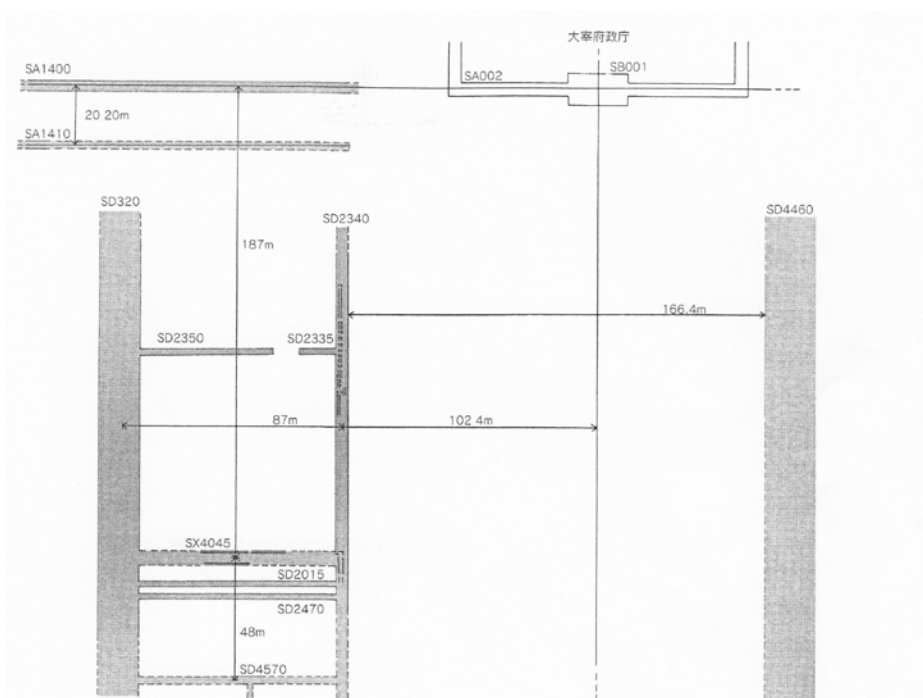


図4 政庁と周辺官衙の区画

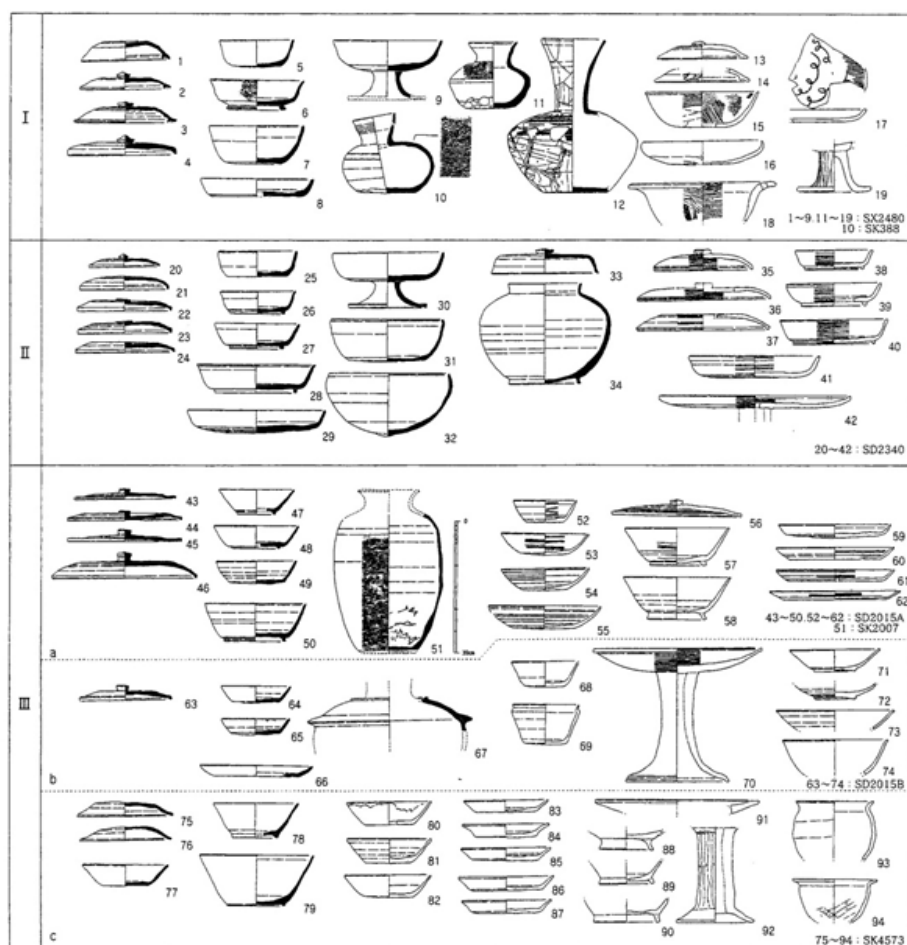


図5 不丁地区官衙出土土器

ると齟齬がある。大宰府政庁と幅36m（120小尺）の朱雀大路中軸線の一致に対して、一辺約90mの条坊区画の左右郭1坊の溝とに約5mのズレが生じる。この状況から、政庁の小尺（=0.296m）に対する大尺（=0.35m）施工の結果とみて、主要官衙施設造営以前の7世紀末から8世紀初め頃に街区の大宰府条坊が先行したとみる意見がある（井上2011）。

あらためて大尺換算で政庁前面域の区画溝をみると、SD4660とSD2340間が520尺、SD2340とSD320、SD320とSD2690間は約250尺となる。官衙の境界溝の開削時期については、不丁地区官衙のSD2340が98次調査で確認された7世紀第3～4四半期の流路SX2480を切ることや溝最下層出土土器を踏まえれば8世紀前後とみられる。そして、この境界溝に規制される形で8世紀前半に官衙施設の本格的な造営が開始される。この状況から、条坊区画の施工が官衙の造営に先だつことは確かである。

さらに、政庁前面に配置された官衙群の展開を考える上で重要になるのは、不丁地区官衙の境界溝SD2340である。堆積状況に粗密の差はあるが、最下層に流水を示す砂層堆積があり、その上位に滞水を示す粘質土層がある。85次調査区では下層より「天平6年（734）」銘木簡が出土しており、上層堆積層の埋没年代は8世紀中頃までであろう。

2. 水城・大野城の築造時期

（1）水城

水城は、平野を遮断する約1.2kmの長大な土塁と幅60mの外濠に水貯えた城壁である。上成土塁の高さ7～10m、下成土塁の幅は80m程度ある。上成土塁の積土の技術は山城の「版築工法」にも通じるが、下成土塁下部は厚い単位の砂質や粘質土で、最下層付近には基礎強化のための敷粗朶が埋設されている。また、下成土塁の下部には内濠から取水して外濠へ吐水する「導水管」の機能を持つ木樋が設置されている。また、西門地区では大きく3時期に亘る門の変遷が明らかになっている。Ⅰ期は掘立柱式で一間となる門の柱間は4.22m、切り通しの両壁は積石で補強されている。8世紀初め頃に礎石式となるⅡ期は、三間一戸の八脚門が想定され、大宰府政庁と同じく律令制成立による整備のためと考えられる。さらに9世紀以降には、Ⅲ期門の周辺には暗渠や石列等を埋設し、土塁を改修している。この水城跡において遺構と遺物を直接対比できる資料は限られるが、対象と成りうるのは西門地区の門、東門地区の木樋である。

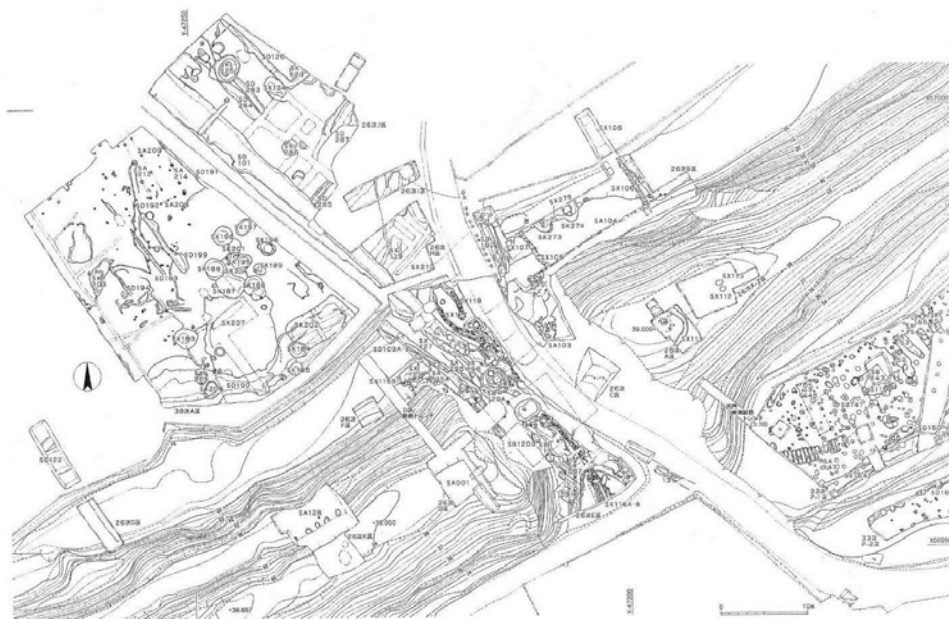


図6 水城跡西門地区

西門地区ではⅠ期掘立柱式の城門SB120A柱穴の埋土上位より須恵器杯が出土している。体部が直線的に開き返しは内傾しながら立ち上がる。7世紀前半頃に比定される。さらにⅡ期城門SB120Bの礎石据付穴と考えられる遺構から須恵器蓋が出土している。摘みの径は大きいが潰れており、口縁端部を三角形に肥

厚する。8世紀第1四半期頃に位置づけられる。この他、II期城門SB120B以前でI期城門SB120Aの柱穴を切るSD109Aから土器類が出土している。このうち須恵器の高台付坏は体部と外底部の境を鋭くナデ、体部は直線的に開いて高台は高くハの字に開く。7世紀第4四半期から8世紀第1四半期に位置づけられる。この時期は、『続日本紀』にみられる文武天皇2年(698)の大野城・基肄城・鞠智城の「繕治」に該当するが、水城でも何らかの改修が行われた可能性がある。

東門地区木樋掘方SX051埋土上層の茶褐色粘質土からは、須恵器蓋坏片がまとめて出土している。蓋の外天井部は回転ヘラケズリ、坏は受部を持ち、口縁は内傾気味に立ち上がって体部下位に回転ヘラケズリ調整がみられる。蓋口径13～15cm、坏口径11.4～13cmで器高が高い一群と、蓋口径10～11cm、坏口径9～10cmの大小に分かれる。後者でみれば、概ね7世紀前半に比定される。木樋埋設との何らかの関係を想定しても、土器編年との整合性に課題を残している。

(2) 大野城

大野城は大宰府政庁後背に位置し、北側に深い谷を持つ独立的山塊の四王寺山(標高410m)に約8kmの土塁や石塁からなる城壁を築いている。土塁は版築工法と呼ばれる堰板を使用して土を固く付き固めながら積み上げ、地形に併せた土塁の高さは一定でないが5～6m程度ある。一方、谷部には粗割りした石を積み上げた石塁が見られる。城門は、水の手石塁と繋がる太宰府口城門、百間石垣と繋がる宇美口城門など、計9箇所確認されている。南の主門となる太宰府口城門では大きく3時期に亘る門の変遷が明らかになっている。I期は掘立柱式で正面三間の門の中央柱間は5.25m、II・III期は礎石式で1×1間の正面5.25mの規模になる。II期礎石式への建替えは律令制成立による整備のためと考えられている。城内には8世紀以降の倉庫とみられる礎石建物が70棟以上確認されている。

大野城跡の調査では、築造年代を直接示すような土器類の出土は確認されていない。比較的古い土器類が採集されているのは、太宰府口城門地区、鮎返り地区、大石垣上方内周土塁周辺、猫坂地区、北石垣城門、主城原地区などがある。須恵器蓋は宝珠状の撮みと返しを持ち天井部は高く、坏についてはハの字に開いて高台が踏ん張るもので、7世紀第4四半期前後の特徴を持つものが多い。

一方、主城原地区では掘立柱建物SB064(9間×3間側柱建物)と掘立柱建物SB065の柱痕跡より単弁八弁軒丸瓦が出土している。前者は1+8の蓮子を持ち弁の稜が通り間弁も鋭い(単弁I類)。丸瓦を瓦当部にのせて接合する。後者は1+6の蓮子を持ち弁は短く平面的で二重の圏線がめぐる。行基の

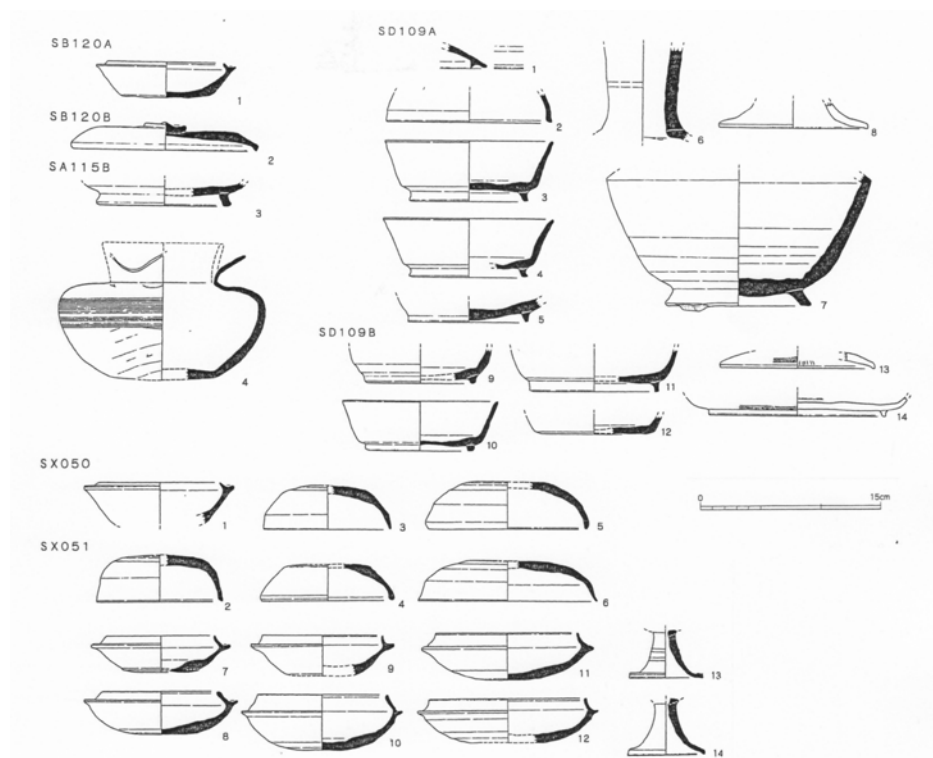


図7 水城跡出土土器

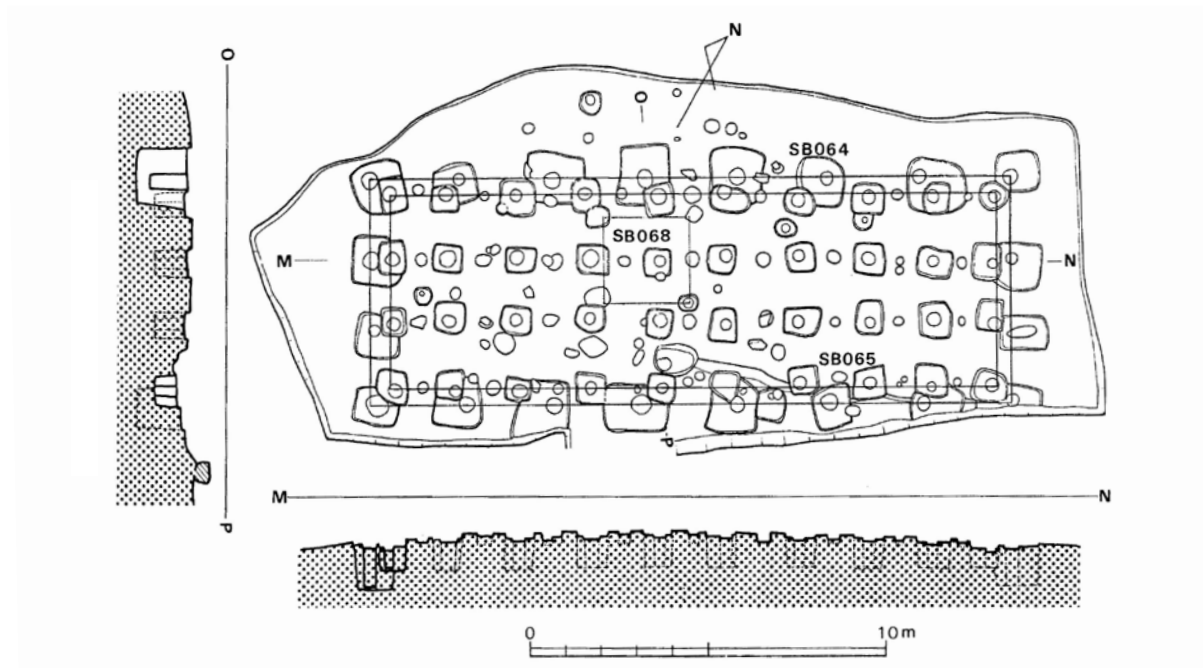


図8 大野城跡主城原地区Ⅰ期遺構

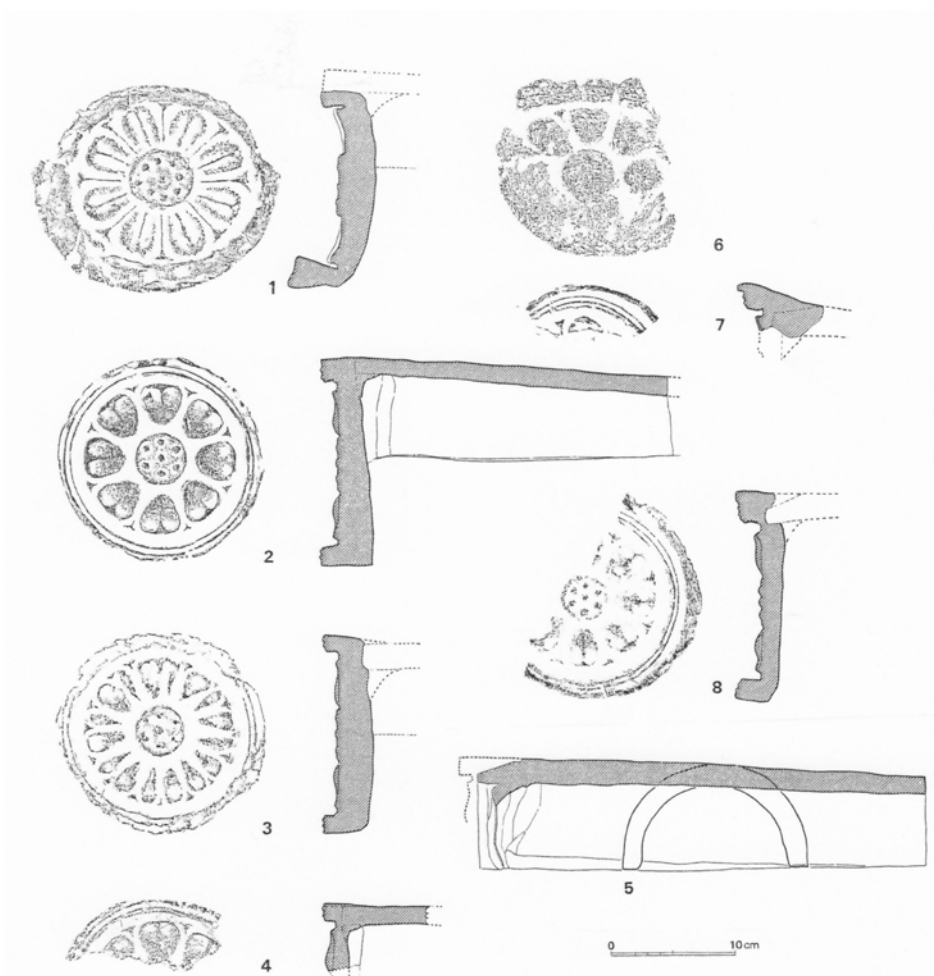


図9 主城原地区出土軒丸瓦

丸瓦を差し込むか押し当て接合している。これらは山城に葺かれた軒丸瓦としては古期の7世紀後半に位置づけられるが、官衙風の掘立柱建物で施設の機能や性格にも関わるものであろう。この他、直接年代を推定できるものとして太宰府口城門Ⅰ期の柱穴から最古級の刻書文字「孚石部」(「孚石都」)のあるコウヤマキ材の柱根が出土している(杉原2006)。かつてCタイプとして最外輪年代648年で伐木年代推定は困難とされたが(田中編1991)、近年の再調査では樹皮を残すAタイプとされ、年輪

年代による伐木年代は648年頃とされる（赤司・光谷2011）。そのため『日本書紀』の記事、天智天皇4年（665）よりも遡る時期に築城が開始されたとみる意見もある。

3. 大宰府造営の年代論をめぐって

これまでの調査成果からみれば、大宰府では、遅くとも7世紀末頃、四王寺山南麓に後のⅡ期政庁に繋がるⅠ期政庁を中心とする主要官衙が成立したことは確かである。政庁正殿地区では、下位のⅠ期新段階とⅡ期の関係からみると中枢施設は連続している。また、蔵司西地区官衙における「久須評」銘木簡等の出土からⅡ期以前の大宰府を構成する主要官衙が付近に存在した可能性は高い。その後、令制大宰府発足によって成立するⅡ期政庁の造営と共に官衙域を政庁前面域へ拡大したのであろう。特に政庁東西の丘陵状地形はⅠ期の景観を概ね踏襲して、Ⅱ期以降も大きな改変を受けていないことも、この地域における官衙の継続性を含めて注意する必要がある。ただし、初期大宰府の姿については不明な点が多い。特に水城や大野城などの重要施設の築造とどう関わるのかが重要になる。

水城跡では、西門地区のⅠ期城門SB120Aや東門地区木樋掘方SX051出土土器が手掛かりとなるが、これまでの本地方の土器編年観から見れば総体的に古い。近年の土器編年の再整理を含めた議論が必要なのは確かだが（山村1998）、出土状況から見る限りこれらが築造年代に直接結びつくとは即断できない。

一方、大野城跡では、7世紀第3四半期から第4四半期の土器類がかなり採集されている。これは、不丁地区SX2480出土土器群に相当し、政庁Ⅰ期新段階頃に対比できるものである。いずれも原位置を留めるものではなく、厳密な議論はできないが、この時期の城内における諸活動と関わっている可能性もある。また、山城の軒先瓦としても重要な単弁軒丸瓦については大宰府内の状況が整理されつつあるが（下原2014）、福岡平野における動向をみると7世紀第3四半期から4四半期前後の土器群と関わるものが多い。この地域における、官衙施設の造営時期に関わるものであろう。

このほか大野城跡ではⅠ期城門より出土したコウヤマキ材の刻書木柱がある。近年の再調査による年輪年代による伐木年代はAD648年頃とされ、『日本書紀』の天智天皇4年（665）の記述からも大きく遡る。築造年代とその背景をどのように理解するかは慎重にならざるを得ないが、コウヤマキ材自体が7世紀から8世紀の掘立柱式を中心とする建物柱材に使用されている事例が多いことや、畿内との関わりが深い点も注意する必要がある。

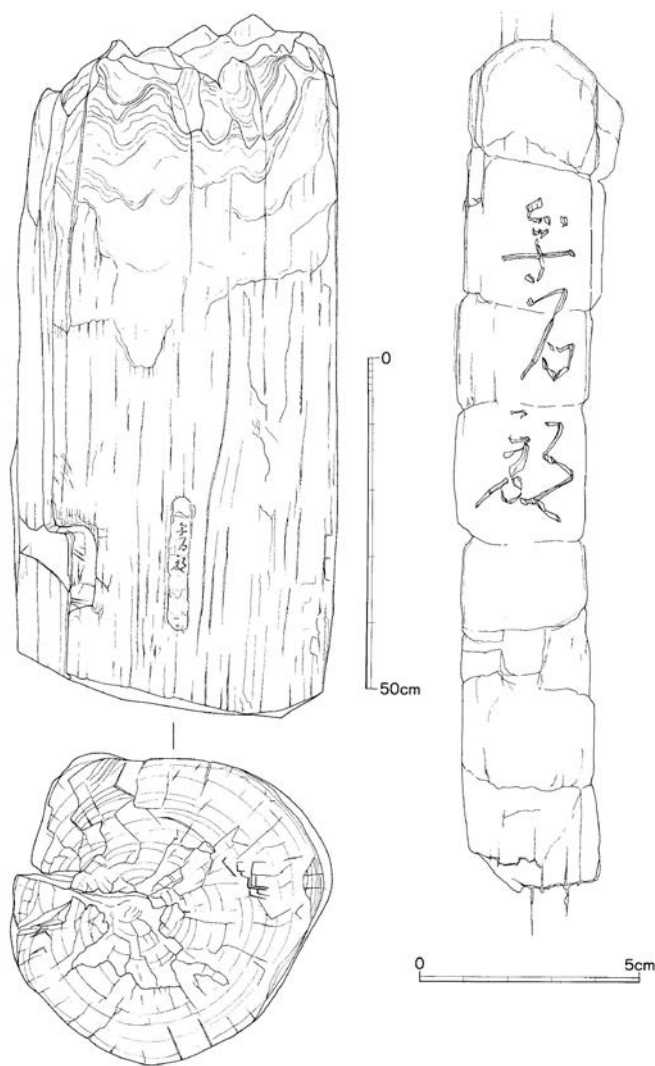


図10 大宰府口城門出土柱根

以上、本論では考古学的手法から大宰府諸施設の造営時期を整理してきた。このようにみると、大宰府政庁と連動するように、7世紀第4四半期頃には官衙や条坊、山城などの諸施設においても整備の痕跡が認められる。これは、後の西海道諸国島を統括した大宰府の機構整備に関わるものと考えられる。争点となる、7世紀後半の白村江敗戦直後の天智朝期における大宰府の造営状況はやはり不明と言わざるを得ない。これまでの調査状況をみる限り、大宰府の外郭を構成する水城や大野城が築造されていたことは確かだが、政庁との関係を含めて初期大宰府に関する結論は出ていない。既に指摘されてきたことだが、土器編年の整理と共にまず遺構の出土状況の再検討が必要になる。それでも断片的な情報しか得られないのは、遺構の重層性と共に、現在地における大宰府が、機能特化や機構再編などにより、施設の造営過程も多様であったことも要因としてあろう。

参考文献 ※一部省略

- 赤司善彦・光谷拓実「大野城の築城年代再考—大宰府口城門出土木柱の年輪年代の測定から—」『東風西声』第7号 九州国立博物館
小田富士雄 2013「大宰府都城制研究の現在」『古文化談叢』70 九州古文化研究会
小田富士雄 2015「大宰府都城の形成と律令体制」『古文化談叢』74 九州古文化研究会
下原幸裕 2014「大野城跡クロガネ岩城門出土の軒丸瓦」『都府楼』46号（公財）古都大宰府保存協会
杉原敏之 2007「大宰府政庁のⅠ期について」『九州歴史資料館研究論集』32号
杉原敏之 2016「大宰府の造営と西海道諸国」『日本古代考古学論集』同成社
山村信榮 1998「7世紀後半の諸問題」『古文化談叢』41 九州古文化研究会

第3章

日韓古代山城の年代論

向井 一雄

はじめに

西日本の古代山城研究は、90年代に入って各地で発掘調査が行われ、新遺跡・新遺構の発見と相まって古代山城研究は新たな段階を迎えつつある。韓国や中国東北地方の城郭についても以前に比べて格段にその詳細が判明してきた。

本稿では、朝鮮半島の調査事例をご紹介しますとともに、日本古代山城の年代論について従来の問題点を整理し、新年代のフレームワークを提起したいと思う。

1. 朝鮮半島の古代山城

朝鮮半島城郭のルーツ

朝鮮半島では三国時代（3世紀頃から7世紀頃）、高句麗、百濟、新羅の三国が鼎立していた。朝鮮半島の城郭の特色は山に築かれた山城にある。平時には平地で生活し有事には山城に籠城して戦うという防衛システムを構築している。その数およそ数千を超える山城が残っており、各々の地方の交通要衝を眼下にする要害の高地や地方の主要な街の背後にそびえる山々に城壁が築かれている。

朝鮮半島の古代山城は高句麗と大陸勢力との戦闘の中で生み出された山城であり、侵略軍を撃退するための弱者の戦略的な城郭といえる。高句麗の防衛システムは、国境防衛線である「前縁防御体系」、国境から王都までの敵の侵攻ルートに沿った「縦深防御体系」、王都を守る「衛星防御体系」の三つが組み合わさって構成されているといわれている。侵略軍を撃退するためには、長く籠城できることが非常に重要になってくる。そのため縦深防御体系を構成する山城群は守りの堅いことが要求された。

高句麗山城のルーツは、現在の中国東北地方、特に遼西の夏家店下層文化（紀元前2000年～前1500年頃）の囲郭集落に求める説がある（西川1993）。囲郭集落には様々な形態があるが、石城が多数みつまっている。崖や急斜面のそばにつくられた集落は周囲を石壁で守られている。規模は1～2万㎡のものが多く数万㎡に達するものもある。

秦が遼東に築いた長城に影響を受けたとする説もある（門田1986）。秦は天下統一後の紀元前221年、將軍蒙恬を河南（河套、オルドス）に派遣して、西は臨挑から東は遼東まで一万余里（約5千km）の長城を築かせたと『史記』に記されるが、実際、内蒙古や寧夏には石築の長城の遺跡が残っている。遼寧では赤峰・敖漢旗などで秦長城の遺跡が報告されている。

紀元前108年には、朝鮮半島北部に前漢によって楽浪郡が設置された。楽浪郡治（北朝鮮平壤市）は大同江南岸の丘陵上にあり、東西700×南北600mほどの不整な方形で土塁がめぐり、楽浪富貴などの瓦当や封泥も多数出土している。また、北朝鮮黄海北道鳳山郡の智塔里土城は帯方郡の郡治遺跡と考えられている。これら漢代の土城が朝鮮半島の平地城のルーツに当たる。

高句麗の興起は紀元前1世紀初めとされる。燕や秦の長城や漢の県城を高句麗人たちは見聞し、城壁構築方法の知識を得たとする考えが妥当性は高い。高句麗山城の起源として、『魏志倭人伝』にみえる「円形の柵」や吉林北部から内蒙古に分布する環濠・柵列を持つ囲郭集落などの遺跡とどう繋がるのか、今後の課題である。

高句麗の山城

高句麗最初の王都・卒本は五女山城（中国遼寧省桓仁県）と考えられている。最古の高句麗山城である五女山城は峻険な断崖の山上に立地し、城下には高句麗初期の積石墓が濃密に分布している。山頂部は南北1500m×東西2～300mの台形状で断崖に囲まれ天然の要害をなし、山腹部にも断崖を利用しながら南面と東面の一部に石塁が築かれている。五女山城西南方には渾河に面した下古城子土城があり、五女山城と対になる平地城の可能性がある。

高句麗は3世紀初頭に首都を鴨緑江中流の集安（中国吉林省集安市）に移転させた。国内城は鴨緑江の支流通溝の北岸にあり、発掘調査によって漢代の玄菟郡高句麗県城の土城を石築に改築・再利用したものであることが判明した。丸都山城は国内城の北西2.5kmにあり、周長7kmにおよぶ大型の包谷式山城である。高句麗は314年に楽浪郡を滅ぼし、南進して427年に集安から平壤（北朝鮮平壤直轄市）に遷都した。遷都時の王宮と山城は清岩里土城と大城山城に比定されている。

集安で、漢代の県城を平地城（王宮）として転用し、近傍に山城を築くという平地城+山城のセットが完成する。このパターンは高句麗が中国の郡県が置かれた地域に進出した際にも取られた方法であり、新賓県永陵鎮の旧老城、丹東の泊沟城、撫順の新城などの類例が挙げられる。この平地の居住拠点と背後の逃げ城というセット関係が、この後の朝鮮半島城郭の基層となっていく。

中国東北地方には高句麗城郭が200ヶ所、北朝鮮地域に1000ヶ所、韓国内には2300ヶ所の山城が知られている（北朝鮮と韓国は三国～朝鮮王朝まで含む）。北朝鮮を除く中国東北の高句麗山城については、近年の踏査によって、遺構の実態が明らかになってきたが、現在残る城壁遺構が築造当初からのものかどうかはわからない。これまでの調査は地表調査が中心で発掘調査は一部で実施され始めた段階である。五女山城、丸都山城、石台子山城の報告書が刊行され、最近、燕州城（遼寧省沈陽市）が調査されている。

踏査の知見によれば、中国東北の高句麗山城の城壁は類似した様相を見せ、7世紀代の隋唐戦の最中に修改築が行われた可能性が高い。石台子山城（遼寧省沈陽市）は周長1.38kmの包谷式山城で馬面10、城門4など、95年から山城全体が発掘された。7世紀代に築城後、戦闘で落城焼失したと考えられ、隋唐戦当時の高句麗山城の様相を示す遺跡といえる。石台子山城城門の門礎石と丸都山城2号門址の門礎石は酷似し、このことから丸都山城城門が7世紀代の修築後の遺構であることとわかる。多くの高句麗山城が7世紀後半の高句麗滅亡まで使用されており、現在地表に見る遺構は7世紀代のものである可能性が高い。

韓国における発掘調査の進展

朝鮮半島の山城は三国時代から朝鮮王朝（李氏朝鮮）時代まで長い間一継続的あるいは断続的に同じ城が利用されてきたため、現在見ることでできる城郭の遺構がいつの時代に造られたものなのか、はっきりとわからない。しかし、地表調査や発掘調査によって各時代の城郭について、知見が集積されつつある。

韓国ではこの30年、城郭の調査が目覚ましく進展してきたが、地表調査や発掘調査を行ってみると、大半の城が新羅の山城であることがわかってきた。新羅は6世紀代に伽耶諸国を併呑、北は尚州から忠州と清州地域に進出して、556年には念願の漢江流域（現在のソウル地域）を押さえる。新羅は新たに進出した地域（上州・下州）に拠点となる山城を築き、支配拠点とすると共に、次なる進出拠点としても活用した。

早くから山城を発達させた高句麗に対して、新羅・百済の4～5世紀代の山城については、共によくわかっていない。漢城期の百済の城は風納土城や夢村土城といった前代の楽浪郡治の系譜を引く平地に土築城壁をめぐる城だった。新羅も王宮は平地にあって、南山の北麓に都堂山土城や南山土城など小型の丘城を設けていたらしい。有名な月城も5世紀後半の築造であり、当初は月城（王宮）と明活山城（逃げ城）がセットをなしていた。明活山城は6世紀代に土城から石城に改築されている。

漢城百済期の山城遺跡の発見

韓国の京畿道地域では、最近、曾坪・杻城山城（二城山城）や華城・吉城里土城など、漢城百済期の山城が確認され注目されている。杻城山城は4～5世紀の百済の山城で標高259mの山地に北城（周長429m）と南城（周長1.4km）の二つの城が築かれているのが特徴で、百済初期の土築技術で築かれている。吉城里土城は3～4世紀に築かれた土城で、丘陵上に立地し周長2.3kmの包谷式のプランを取り、百済漢城期の盛土技法と木柵列が確認されている。今後も4～5世紀代の百済山城が見つかる可能性は高いが、朝鮮半島の南部で本格的な石築の山城が登場するのは意外と新しい時代のことらしい。

百済は475年に漢城が高句麗によって陥落し、熊津に遷都する。最近、公山城（忠南公州市）の城壁崩壊に伴う発掘調査で、城壁内から築城当初―熊津百済期の版築城壁が検出された。版築土塁の外側に石築を付加する城壁が熊津期から始まるとみられる。

高句麗の堡塁群

さらに、京畿道地域を中心に5世紀後半頃、漢城期の百済（475年滅亡）を滅ぼした高句麗の南進拠点も見つかっている。ソウルの漢城期百済の中心である風納土城を見下ろす漢江北岸の峨嵋山の稜線上に並ぶ峨嵋山堡塁群（30箇所）、臨津江流域の堡塁群（20箇所）、滅ぼされた百済が第二の都とした熊津（公州）の東方30kmに迫った忠北清原郡の南城谷遺跡や中原高句麗碑近くの塔坪里遺跡などが続々と発見され、京畿漣川と江原春川では高句麗古墳も確認されている。

峨嵋山堡塁群は一つの堡塁が径50m（九宣洞堡塁）ぐらいのものから、最大のものでも周長210m（峨嵋山第4堡塁）である。しかし規模こそ小さいが横矢掛かりとなる「雉城」を何箇所も設けるなど戦闘的な施設であることがうかがえる。また南城谷遺跡や大田・月坪洞遺跡は、プランは包谷式をとっているが、城壁は土塁でも石塁でもなく木柵の城である。臨津江沿いでは瓠蘆古壘（周長401m）や堂浦城のように河川を防御線とする特異な丘城も造られている。

新羅の山城

新羅山城の研究によれば、外郭線は石築城壁が多く、城壁基底部に「基壇補築」と呼ばれる三角形の外壁補強を設けるのを特徴とする。また城門入口には階段などなく地面から1.5～3m近い高さの垂直の壁となっている場合がある―これは「懸門（凹形立面城門）」と呼ばれ、新羅山城の特徴とされてきた。防御するのに優れた戦闘的な城門構造で平時には木製の階段や梯子を使って出入りしていたと考えられている。懸門の淵源は高句麗にあるらしいが、まだよくわからない。三年山城の西門の門礎石は門道両サイドに「扞叉柱」と呼ばれる柱穴が並ぶ中国式の城門型式で、韓国内では唯一例、近似する事例は高句麗の平壤城内城の平壤神社北門遺構が挙げられ、高句麗からの影響を窺わせる。「確金（ファクセ）」と呼ばれる特異な門の軸摺金具も新羅山城を中心に見つかっている。

このように新羅山城の特徴が明らかになりつつあるが、慶尚北道地域を支配下においた新羅によって、5世紀後半～6世紀前半に築かれた報恩・三年山城や聞慶・姑母山城、寧越・正陽山城などが、この時期の新羅山城の一つの基準となっている。最近調査された慶州・明活山城では北門で曲城（円形の雉城）が検出された。曲城は三年山城や姑母山城で見つかっているだけで、三城の関係が注目されている。

半島南部―洛東江の流域に、百済と新羅とは別に伽耶諸国と呼ばれる地域があった。この諸国の王墓と推定される古墳群の背後にも古代山城があり、これまでは伽耶諸国の山城と考えられてきた。しかし韓国における城郭調査が進展してくると、これら伽耶地域の山城も実は新羅が6世紀代に伽耶地域に進出、併吞していく過程で、占領地域を支配する拠点として築城されたものだったことが明らかになってきた。

慶南咸安の城山山城などは当初は安羅国の王宮とそれを守る城だと思われていたが、1991年からの発掘調査の結果、大量の木簡が出土し、6世紀代に新羅がこの地域に進出した時、支配拠点として築

いた城とわかった好例である。城山山城では新羅の城壁工法である基壇補築も見つかっている。また2004年から調査された巨済島の屯徳岐城（虜王城）は7世紀に築城された新羅の山城で、巨済島では最古の城郭であることがわかった。巨済島は『魏志韓伝』に「倭と界を接す」と記された弁辰の瀆盧国の有力な比定地だが、瀆盧国が新羅に併合された後、巨済郡という名前に変更されたとされ、屯徳岐城もその頃築かれたと考えられている。

全南順天の馬老山城などでは百済山城から統一新羅期に石敷き門に改築されている。石敷き門道は朝鮮半島北方に系譜を辿ることができる。高句麗の平壤城内城の平壤神社門址や渤海上京龍泉府宮殿の午門などでは、中国式の城門の直写様式の遺構をみることができる。韓半島中部以南の地域では新羅山城に石敷き門道の事例が多い。

百済の山城

日本の古代山城は、百済から亡命貴族らが築城を指導したことから「百済式山城」だとよくいわれる。百済人が指導したから百済式だというのはあまりにも文献に引っ張られた解釈であり、そもそもどのような特徴をもって百済式というのか—それほど「百済山城」の実態はまだよくわかっていない。

2008年、韓国の忠南錦山郡で百済泗沘後期の遺物しか出土しない栢嶺山城が見つかった¹⁾。一時期の遺物しか出土しないということは、現在残っている遺構—石塁や城門など—がその一時期の遺構の状態を示していると考えられる。その遺構の特徴を、他の時期が不明な山城と比較することで百済の泗沘時代後期（7世紀前半頃）の城郭を見分けることが可能となってくる。

栢嶺山城は百済と新羅の国境線地帯に築かれた山城の一つで、周囲207mの小規模な山頂式山城である。注目されるのは、城門の平面プランで、城門左右の石垣が門の袖部分で角張らず円弧状にカーブしている。実はこの様式の城門は、百済の最後の都となった泗沘（扶余）の南方—林川の聖興山城と論山の魯城山城の城門にあった。両城は城門の型式だけでなく、石塁が切石積みである点、懸門である点なども共通しており、部分的に見ると見分けがつかないほど似ている。両城が何らかの関係を持っていることは窺えたが、城の年代はわかっていなかった。

聖興山城²⁾では史跡整備のため、1996年に東門の発掘調査が行われた。この時城門の石塁直下から百済泗沘時代の土器が出土したため、現在見る遺構が百済泗沘後期の築造ではないかと報告されていたのだが、泗沘後期のプレーンな遺構を残す栢嶺山城の発見によってそれが裏付けられることとなった。聖興山城—魯城山城—栢嶺山城は百済が泗沘（扶余）に都を置いた泗沘時代の後半—7世紀前半に築かれた兄弟城ともいえ、今後扶余周辺の城郭調査の一つの指標となる。

最近調査された古阜・古沙夫里城（古阜旧邑城）や扶余東羅城でも袖部が円弧状にカーブした門遺構が見つかっており³⁾、百済山城と考えられる事例が増加している。扶余・石城山城の調査では、百済時代—統一新羅時代—朝鮮時代の城壁変遷が明らかになった。ようやく百済山城の実態や変遷過程が明らかになりつつあり、新羅の城との比較など様々な課題に答えることができるようになるだろう。

伽耶の城郭

『魏志倭人伝』にも登場する狗耶韓国（弁辰狗耶国）—三国期には金官伽羅国と呼ばれる有力な国だが、この金官国の王宮があったとみられる遺跡が2003年、金海の市街地で発掘調査された。その遺跡が鳳凰土城で、鳳凰台と呼ばれる低丘陵（標高45m）の周囲2kmに幅約20mの土塁がめぐらされていることがわかった。またこれも伽耶の有力国である多羅羅国の王墓のある陝川でも、玉田古墳群の南に接する城山里土城が2009年に発掘され、黄江に面した標高53mの丘陵上に築かれた伽耶時代の土築の城がその後、新羅によって石築に改築されたと推定されている。

このような低丘陵上の土築の城が、伽耶時代の城の姿であることがようやくわかってきている状況で、山城については、周囲200～400mの非常に小規模な山頂式山城が伽耶時代にも築かれていたらしい

が、百済や新羅の山城とはプランや城壁構造が異なっている。2008年、金海の良洞山城が発掘調査され、三角形の水口（石塁の排水口）の独特な形態から伽耶の山城ではないかと報道された。しかし発掘された城門は袖部が円弧状となる百済型である点、城壁基底部には新羅山城の特徴である基壇補築があるなど伽耶の山城とは断定できない。2012年には大伽耶国の王都である高霊の主山城の発掘調査が開始され、城壁基底部に基壇補築のあることがわかった。この城壁が大伽耶時代の遺構なのか新羅時代に修築されたものかは意見がわかれているが、発掘調査では城壁の内部からもう一つ小規模な城壁が発見されており、こちらが大伽耶が築いた城壁であった可能性が高い。伽耶地域は百済と新羅の係争地域でもあり、城郭も様々な影響を受けていることが予想される。

2. 従来の日本古代山城の年代論

朝鮮式山城と神籠石

日本の古代山城はこれまで朝鮮式山城と神籠石の二つに分類されてきたが、近年の調査成果を受けて「古代山城」として一括して論じられるようになりつつある。とはいえ1960年代の発掘調査によって神籠石論争に終止符が打たれた後も、文献未記載の山城に対して「神籠石系（式・型）山城」の呼称が引き続き使用され、学術用語としてもほぼ定着した感否めない。しかし「神籠石」とは本来列石のことではなく「磐座・石神（神体石）の一種」を指した名称であり、現在では学史的に使われているに過ぎない。

1898年（明治31）、小林庄次郎が高良山の遺跡を学会に報告した際、誤って列石線が「神籠石」という名称で紹介された。『高良記』によると、参道沿いの現在「馬蹄石」と呼ばれている磐座の名称こそ本来の「神籠石」であり、列石は「八葉の石畳」と呼ばれていたことがわかる。「神籠石」と呼ばれる神体石や地名は管見でも全国で140例以上一北は宮城県南部から南は鹿児島県まで分布しており、皮籠石、革籠石、交合石、皇后石、香合石、神護石、皇護石、川子石、こうごう石、向後石、高後岩など、様々な用字みられ、「カウゴ（こうご）」という呼称の本来の意味は分からなくなっている。

神籠石が磐座の名称であることは、既に1910年（明治43）一神籠石論争の時期に、柳田國男が『歴史地理』誌上や『石神問答』で指摘し「（神籠石は）孤立する奇石の名なり」と喜田貞吉氏の磐境説に疑問を呈していたが、その後も喜田は「神籠石」と呼ぶことを止めなかった。1932年（昭和7）一雷山が史跡指定される際に、「神籠石」が史跡名称となり、文献に記載のない山城の呼称として定着してしまった。古賀寿らも、神籠石が磐座の名称であることを文献や実例を上げて指摘しているが、一地方研究者の著作であったため民俗学者も含め学会ではほとんど知られていない。

遺跡名称としては、2004年度に国史跡となった、大廻小廻山城跡、永納山城跡については当初から神籠石の呼称は用いられていない。また新聞発表から発掘調査段階まで、神籠石の呼称を付けていた唐原神籠石も2005年度の史跡指定時には「唐原山城跡」に名称変更された。山城遺跡を表す名称として神籠石が不適切なものであることは明らかであり、「〇〇神籠石」という表記は、今後少なくとも研究論文などでは使用を控えるべきだろう。文献に記載のあるなしによる分類も考古学的分類としては実態にそぐわないし、神籠石系山城といってもいくつかの類型に分けられる。この点は朝鮮式山城も同様である。

先行説と後出説

文献に記載のない山城の歴史的 성격、特にその築造年代については7世紀代に収斂しつつあるが、7世紀代といってもその築城を大野城（665年）以前とするか以後とするかによって、「先行説（7世紀前半）」と「後出説（7世紀後半～8世紀初頭）」に分かれている。

戦前の神籠石論争以来、60年代の発掘調査まで、北部九州の神籠石遺跡はその分布から邪馬台国や

磐井といった九州の在地勢力に関係するもの、年代も文献史料になく伝承も残されていないことからかなり古い時代に造られ忘却された遺跡とする考えが支配的だった—当然、神籠石遺跡は朝鮮式山城よりも古い遺跡であるということになる。現在でも先行説をとる研究者は多いが、明確な根拠があるわけではなく、文献記録のないことが大野城以前とする最大の理由となっている。先行説も後出説も類型化に関しては大差なく、①大野城などの朝鮮式山城、②瀬戸内の神籠石系山城、③北部九州の神籠石系山城の三つの類型を想定する研究者は多い。編年序列の問題は北部九州の神籠石系諸城の編年的位置付けが論点となっている。

齐明天皇築城説

1988年、渡辺正気による「齐明天皇西下時築城説」の発表以降、6世紀後半～7世紀初めの推古朝頃とされていた先行説の年代は660年頃まで引き下げられ、九州の研究者を中心に渡辺説が引用、支持されるようになった。当初、渡辺説は九州に限定したものだったが、その後、先行説論者らによって瀬戸内の古代山城も齐明朝に造られたと拡大解釈されるようになった。調査成果との整合性を取るために、白村江戦後の神籠石系諸城の未完成・放棄、一部修築後の朝鮮式山城との併存を認めようとする折衷説が最近の論調としてみられるが、占地、外郭構造の異なる山城が同時、同契機に造られたとは考えにくい。

2008年、八木充が文献史学の立場から渡辺の齐明四年は歳条の解釈が誤読であると反論している。四年は歳条の「国家」が倭国ではなく百済を指すと解釈するもので、既に牛島康允や白石成二も同様な指摘をしていたが、八木は四年は歳条の「「国家」以下は百済領内部の状況説明と断じてよい」とする。渡辺説の発表以降、先行説論者は渡辺説を援用して全ての神籠石系山城が齐明期に築かれたとしてきたが、それらは齐明四年は歳条の渡辺解釈に無批判に依拠しており、新解釈によれば齐明朝築城説そのものがその立脚点を失いかねない。

翌2009年開催された「神籠石サミット久留米大会」では八木論文の影響からか、齐明天皇一色だった論調がトーンダウンし、これ以降、考古学者が齐明朝築城説を表立って主張することはなくなった。八木説への反論は渡辺からは出されなかったが、2016年、堀江潔が反論を発表した。堀江は齐明四年は歳条の「由是」以下の文は倭国を主語として読むべきで、倭国の西と北の国境地域（九州・北陸地方）で兵士配置と防塁・木柵などを備えた何らかの施設の修繕が行われたことが読み取れるという。北部九州各地では神籠石・山城の築造・修築など防衛体制整備が進められたというが、考古学的根拠はほとんど提示されていない。

そもそもこの齐明四年は歳条の記事は、658年（齐明4）の出雲における雀魚大量漂着から始まる予兆記事であり、『書紀』編者は、不吉な雀魚の話から二年後の海の向こうの百済滅亡を予言し、その後の百済救援軍の派遣や敗戦後の防衛体制（防人や烽の設置、水城や大野城の築城）について、この或本記事に語らせたかったという解釈でも何ら問題はない。渡辺自身も論文中で「A「以兵士甲卒陣西北畔」は…防人、B「繕修城柵断塞山川」は大野城以下をさすとも考えられる」と述べている。Aを齐明の西征、Bは神籠石をさすとする根拠として、「記事の文脈、神籠石の構造や、使用尺度等から、またその立地や分布、わが国古墳時代以降の築城事情から考えて、大局的には、（齐明朝築城）の考えが妥当ではないか」としているが、構造や立地の詳細は全く論じられていない。

このように八木説も渡辺説も文献解釈上決定打とはいえず、それは四年は歳条の史料的限界を如実に示している。四年は歳条に「繕修城柵」とあることからそれ以前に城があった証拠だと先行説論者は主張するが、神籠石系山城には修築の痕跡すらない。堀江説のような文献的な解釈だけでは、古代山城問題は解決しないことを認識すべきだろう。

占地による編年

原田大六による「愚城説」（神籠石は大陸の城を模倣した日本人による実戦には使えない城）はよく

知られているが、原田は神籠石遺跡の立地の高低によって編年（高い→低い）を試みており、戦前の研究には見られない新機軸であり、神籠石編年論の嚆矢といえる。

80年代には葛原克人や出宮徳尚が古代山城の占地に注目してその比高と全周規模から山城を分類し編年を試みている。占地＝編年論のアイデアは既に原田が発表しており、坪井が九州型、瀬戸内型の分類を提唱していたが、細かく占地を分析した両説はその後の分類編年案のモデルとなった。

山城を考える上で占地—どのような地形を選んで築城するかは非常に重要である。古代山城は山地の低いところ（谷部）から高いところ（山頂）までうねうねと城壁が取り巻いて造られているから高さを比較するには山頂よりも谷部の高さに注目した方がよい。比高の低い谷部分はその城の弱点にもなるから軍事的な守りの強さも比較できる。

山城の周長（全周規模）をX軸、城壁の最低点（水門部）までの比高（平地からの高さ）をY軸にとった相関グラフを作ってみると、日本の古代山城の選地には、峻しい独立峰に占地する峻山城類（城内最低点比高差50m以上）と低丘陵や背後に主山塊を持つ支峰に占地する緩山城類（50m以下）の大きく二つのタイプがあることがわかる。北部九州に濃密に分布する神籠石系10城のうち7城が緩山城である。

峻山城類が北部九州～瀬戸内沿岸に広く展開するのに対し、緩山城類は北部九州—中でも有明海沿岸を中心に集中分布しており、緩山城類が峻山城類とは異なる目的を持って築造されていることが分布からも想像される。

年代の決め手—土器・切り合い関係・尺度

従来、古代山城では土器の表採例もほとんどなく、発掘調査でも出土遺物は極めて少なかった。出土状態も版築土壘中や建物基壇・柱穴からではないため、城に伴うものとしても存続期間の1時点を示しているにすぎないとされ、考古学が最も得意とする出土土器からの年代推定が困難とされてきた。遺構の切り合い関係から推定される年代は、帯隈山城での陶棺破壊、女山城・唐原城郭内の群集墳、唐原城水門下層遺物などの事例から、6世紀末以前には遡れない。

帯隈山城の土師質の陶棺は列石線のすぐ外側だが列石側は破損が酷く、列石線工事による破壊であることは確実である。残念ながら陶棺内には遺物はなく、時期が絞り込めない（佐賀市1969）。九州で陶棺は珍しいが、近辺では須恵質の陶棺出土例があり、大野城市でも陶棺が出土している⁴⁾。女山城の列石に接して山内2号墳があり、切り合い関係の確認が期待されたが、明確な切り合いは判断できない位置関係であった（瀬高市1982）。

坏蓋・坏身、長頸壺、平瓶などこれまでの出土・表採須恵器の年代観は7世紀中葉～8世紀前半に比定されるものが多い（飛鳥Ⅲ～平城宮Ⅱ期）。比較的出土点数が多いのは甕破片だが、細かな年代推定は難しい。

列石前面の柱列に関しては、おつば山城の調査時に「逆茂木説」が出されたが、その後「版築工事の堰板支柱説」が支持されるようになった。最近の調査では土壘内部からも柱列が検出される事例（おつば山城、鹿毛馬城、御所ヶ谷城、鬼ノ城、大野城、鞠智城）も増加しており、土壘構築前に立てられ埋め殺しにされている。また版築技法で構築されていても列石前面柱を持たない土壘（大廻小廻山城・永納山城）もあり、雷山城や杷木城、唐原山城のように列石のみ配し上部の土壘を築いていない山城でも前面柱は検出されていない。土壘内外の柱は対となり柱列間隔は1.6～1.8m（大野城・鞠智城）、1.8m（御所ヶ谷城）、2.19m（石城山城）など短いものもあるが3m間隔の事例が多い。前後の柱を横木や縄などで接続して版築が行われたと考えられるが、前面柱のない事例は版築工事の多様性（堰板保持の方法）を示している。版築は7世紀代の寺院の基礎や基壇、終末期古墳などにも用いられているが、大規模な使用は地方では古代山城が初めてといえる当時最新の土木技術である。6世紀頃までの古墳の盛土は土嚢積みと呼ばれる工法でつくられていて、版築ではない。

列石前面柱については、その柱間距離が約3m間隔であることから、おつぼ山城の調査後、鏡山猛により「唐尺使用説」が提唱されている。おつぼ山城で検出された柱間距離＝3mについては、偏差の大きいデータの平均値に過ぎず、ここから使用尺度は求められないとする批判もあるが、3mは城壁各部分（土塁・石塁幅＝9m、城門幅＝3mなど）の基準単位となっており、モジュールとしては認めてもよいと思う。唐尺使用以前の高麗尺については諸説あるが、最近の平城京跡の発掘調査成果によると「度地尺（土地計測）」としての高麗尺使用（正確には高麗法）は藤原京から平城京段階まで認められる。7世紀代の古代寺院調査によっても、寺院全体のプラン（土地計測）には高麗尺が、各建物の設計には唐尺が使用されているという状況が指摘されており、基準尺が高麗尺→唐尺へ切り替わるという想定は否定されつつある。令大尺＝高麗尺、令小尺＝唐尺（唐大尺）であるとしても、唐尺（もしくはその原型となる尺度）の使用がいつ頃まで遡るかは不明といわざるを得ない。

礎石建物などの設計に使用された尺度は、大野城では天平尺の29.6cmよりも若干長く国分寺建設期の一尺（29.9cm）と合致する。鬼ノ城では前期難波宮使用尺の29.2cmと合致する柱間が指摘されており、鬼ノ城が7世紀後半とすると、大野城倉庫の年代は8世紀代に下る可能性が尺度面からも窺える。

土塁構造と類型化

土塁構造については、北部九州の神籠石系山城の土塁断面調査が先行し、天智紀山城（朝鮮式山城）や瀬戸内の山城では最近まで調査事例に恵まれなかった。そのため神籠石系山城＝列石あり、朝鮮式山城＝列石なし、といったイメージが定着してしまった。外部観察によるかぎり朝鮮式山城では列石は確認されていなかった。しかし大野城や鞠智城、讃岐城山城でも土塁基底部の列石が確認されるに及んで、上記のイメージは見直しを迫られている。そして調査所見で重要な事実、列石の「非露出（いわゆる埋め殺し）」である。非露出の場合、本来土塁完成時には列石は見えていなかったのであり、断ち割り調査の行われていない基肄城などでも列石がないとは断言できない。列石の有無が分類指標として絶対のものでないとすると、列石の非露出・露出こそ指標として注目せねばならない。そして列石の非露出・露出は列石の切石使用とも関係している点は見逃せない。

外郭線が直線を一単位として走行し接続部に「折れ構造」を持つ山城が瀬戸内の諸城と北部九州の一部の山城（御所ヶ谷城、阿志岐山城、雷山城）にみられる。おつぼ山城など有明海沿岸部の山城は曲線走行を基本としており、外郭線走行に大きく東西2つのタイプが存在している。曲線走行の山城の外郭線にも時折、折れ構造に近い配石区間が見受けられ、折れ構造→曲線への推移が想定される。大野城など文献に記載のある山城についても、最近の調査により、「折れ」の存在が確認されつつある（屋嶋城南西斜面外郭線城壁背面、大野城北石垣城門）。

この他、土塁構造としては、城壁の形態－「夾築法」「内托法」「土段式⁵⁾」が指標としてあげられるし、列石など石材の調達方法にも顕著な相違（現地調達、外部からの搬入）があることが判明しつつある。

編年序列の問題

斉明朝築城説を支持し660年頃の築造年代を想定する先行説論者の間でも、神籠石系山城の編年観－九州が古いか瀬戸内が古いか－については大きく意見の相違がある。これは、考古学的な研究において、研究者同士の編年基準にコンセンサスが取れていないためで、研究者の考えは各々異なっている。

例えば、列石に関して、装飾過多なものから機能本来の形態へと移行すると考えるか、原初的なものから徐々に発展して最終的に形式的となり、形骸化するかという二つの編年観がある。占地についても同様で、高地から低地へ、低地から高地へとここにも対立がある。このような違いを単に地域差とみて、城郭の年代差や築造目的とは関係がないと捉える研究者さえいる。考古学的にはいずれの編年観も“論理的”には間違っていない。

先行説論者は、年代観として神籠石系山城の斉明期築城が大前提になっているため、切石加工の問題、

交通路や官衙との関係、占地（縄張）からみた軍事性の評価、朝鮮城郭史の編年観などについて、議論の俎上にも乗らない。後出説では時期差や機能差（対外防衛→律令制化・地域支配）として段階的な築造過程を推定しており、編年序列は軍事性の低下していく方向で想定している。同じものを見ながらも、斉明期築城に辻褄が合うように解釈されていたといえよう。

3. 韓国城郭からみた編年

テメ式と包谷式

朝鮮半島の山城では占地形態からみた「包谷式」と「テメ式（山頂式・鉢巻式）」の分類が広く使われているが、両者の中間的な山城も多く、実際に分類するとなると単純ではない。高句麗地域には大型の包谷式が多いが、百済・伽耶など半島南部では大部分が周長1 km以下の中小規模のテメ式山城である。日本の山城の規模や形態は大型の包谷式ばかりで、むしろ高句麗山城を指向している。

百済・新羅地域の山城では三国統一後、より高い山岳へ立地するものと城壁が山の斜面から平地へ降りてくる二つの類型が成立する。高い山岳へ立地する山城は純軍事的城郭で三国時代よりさらに大型化していく。また平地へ降りてくる平山城（土城）は高麗時代の古邑城につながる城郭で、行政的機能を担当したとみられている。

新羅の富山城や百済の青馬山城のように、山城の大型化は三国統一直前には始まっており、クライアント（倭王権）からのリクエストが高句麗山城であったと考えれば、日本の山城の多くが周長2 km以上で6 kmを超える大型山城もあることは肯ける。また統一新羅以降の土城と北部九州の神籠石系山城の立地上の類似も注意される。

版築土塁

版築土塁は元々中国黄河流域で発達した土壁の構築技法で黄土を叩き締めて硬化させるものだ。朝鮮半島を経て日本へ伝わった版築技法はオリジナルの中国のものとは若干異なり、粘度の異なる土や砂、粘土を交互に積み重ね、一層一層叩き締めながら構築していく。

韓国で最も古い版築土塁は漢城期百済の風納土城などにみられるが、その版築の工法は後のものと若干異なっている。基底部幅約30m、高さ約10mの土塁の断面図をみると、中心部の1次版築層、その外側に2次版築、3次版築というように何層もの版築が外側に貼付けられながら構築されている。また列石（韓国では基壇石という）を持たないのも特徴である。先に紹介した曾坪・杻城山城などでも風納土城タイプの版築工法がとられており、遺構の時期や系譜を考える基準となっている。その後、6世紀頃から前後の柱を横木や縄などで接続して行う通常の版築工法が出現してくるとみられている。

列石と永定柱

1983年、独立記念館の建設時に調査された木川土城（忠南天安）で基底部に列石を持つ版築土塁が見つかった。日本では神籠石系山城の列石のルーツとして、この木川土城がいまだによく紹介される。そして木川土城が百済地域に含まれることから、列石は百済山城の特徴であり、それが日本へ伝わり神籠石系山城が造られたという。しかし、木川土城からは百済の遺物は全く出ておらず、出土したのは統一新羅から高麗時代の土器や瓦片ばかりであった。その後、各地で木川土城と類似した列石を持つ城郭の調査事例が増加し、現在では韓国における列石の出現は早くても三国末、一般化するのには統一新羅以降とみられている。

神衿城（忠南洪城郡）、蛇山城（忠南天安）、扶蘇山城（忠南扶余）、華山里城（慶南蔚山）、堂甘洞城（釜山）などで列石が検出されているが、中でも木川土城によく似ているのは神衿城で9世紀代の築城とされている。列石の配列の方法からも新旧が想定されていて、蛇山城のように傾斜地でも一定の勾配で直

線状に配石されるものが古く、木川土城のように階段式に傾斜地を登っていくタイプは新しいと考えられている。

また韓国では土塁に伴う柱列も検出されているが、石列間に立てられ土塁に半ばめり込んだ状態で設けられている。柱間間隔については、三国時代には1.2～1.8mと短かったものが、統一新羅時代以降に3m以上となり、高麗時代には3.5～4mと次第に長くなっていくこともわかっている。

韓国で列石が登場した頃—7世紀中葉に日本に古代山城が導入され、その後独自の発展をしていったとみられ、柱間間隔からみると、日本には1.6～2.0m程度の短いグループ3m間隔の長いグループがあり、ちょうど韓国での柱間間隔の伸長化する時期に当ると考えられる。

切石積み

石塁の使用石材には、自然石・割石や切石がある。いずれも外壁面に横方向の目地が通る布積みだが、内部構造には差異が存在する。高句麗地域でみられる石塁には「打塁法」という呼称が付けられている。外壁以外は加工石材を使用していないが、層状の石積みで外壁とは鋸歯状に組み合った強固な石積みとなっている。新羅山城の石塁も高句麗山城に類似するが、三年山城や忠州山城など一部の山城では一層ごと井桁のように品字型に組んだより強固な構造の石塁もみられる。これに対し、百済地域では伝統的に版築土塁が多いが、石塁の場合、全て石材を使用する他に、内部が版築で外壁だけ石築にする技法（月坪洞式）もみられる。

半島南部における切石積み石塁の出現は、百済地域では扶余周辺で7世紀前半頃～、新羅地域では関門城、南山新城など7世紀末～8世紀初め頃に認められる。高句麗地域での切石使用の初現は不明だが、三国統一後、半島南部でも切石使用が普及期に入ると推定される。

日本の古代山城については、野面積み→割石積み→切石積みとする編年観があり、編年指標として一定の蓋然性は認められる。ただし石塁の積み方と使用石材については単純に考えられない部分もあり、韓国でも時代が下る高麗城郭や朝鮮時代の邑城の石塁が全て切石積みに変化するわけではない。時代毎、地域別の石積み技術や使用できる石材に制約があって、石塁が構築されているとみるべきだろう。内部構造に着目すると、日本の古代山城の内、天智紀に築かれた山城は石塁内部に外壁と同大の石材を使用しているが、北九州の神籠石系の山城では、外壁は切石、内部はグリ石と大きな差異が認められる。

4. 日本古代山城の新年代

土器

考古学では遺跡から出る土器がその遺跡の年代を決める重要な手掛かりとなる。これまで古代山城からはこの土器の出土が非常に少なく僅かであったため、出土土器から古代山城の年代を論じることができなかった。大野城や基肆城、鞠智城などは9世紀半ば頃まで維持されていることが文献史料にも残っており、存続期間が長いことから城内に建物も数多く建てられ、土器や瓦などもそれに伴って出土している。しかしむしろこの三城は日本の古代山城の中ではレアケースであり、多くの山城は7世紀後半から8世紀初頭の短い存続期間で廃城となっている。

大野城では8世紀後半～9世紀代にかけての瓦の割合が多く、増改築を繰り返しながら、修理・維持されていたと考えられる。基肆城でも表採されるのは縄目叩きの瓦が多く、少なくとも8世紀代までは建物群が維持メンテナンスされていたらしい。中心部が発掘された金田城や鞠智城では土器の出土量から城内活動の盛衰を窺うことができる。金田城では出土土器に7世紀中葉と7世紀末のものがあり、各々創築期と修築期が想定され、8世紀以降の出土遺物がないことから廃城となったと考えられる。鞠智城の場合、Ⅴ期にわたる変遷過程が復元され、Ⅱ期が繕治期に、Ⅲ期が停滞期（廃城？）、Ⅳ期が復興期とされている。Ⅰ～Ⅱ期は須恵器が多く、Ⅳ期以降は土師器が中心となる（郡衙的）など、土器の構成

から築城主体や施設の性格の変化まで論じられている。

鬼ノ城の発掘調査が進むと、遺物からみた創築年代が白村江の戦いの後の築城記事－665年～667年の天智紀六城と微妙にズレがあることがわかってきた。500余点の出土遺物は飛鳥Ⅳ～Ⅴ期（7世紀末～8世紀初頭）のもので、大野城などの築城記事より明らかに新しい年代を示している。出土する土器は鬼ノ城が築城され使われていた期間の「ある時点」を示しており、創築年代を示すものではないとする意見も以前からよく聞く。また土器による年代観はあくまでも相対的なもので実年代を示さないということもわかる。しかし「坏」のような年代の変化をよく反映する器種から見た場合、鬼ノ城からは宝珠つまみを持った「坏G」は出土するが、古墳時代的な古い器形である「坏H」がこれまで出土したことはない（村上2010）。坏Gと坏Hは須恵器編年でいうTK217（飛鳥Ⅱ期を中心とする。7世紀第2四半期に比定）の中で交替して、その後は坏Gのみとなっていく。TK217期は、最新の須恵器の実年代観でいうと7世紀中葉から670年頃で、鬼ノ城が最初に築城された年代はぎりぎり660年代に入る可能性は残されているものの、出土遺物からみた創築期は飛鳥Ⅳ期（680年以降）であり、少なくとも坏Hが出土しない鬼ノ城がTK217期を飛び越えて7世紀前半にまで遡る可能性はなくなったといえる。

ここで問題となってくるのは二つあり、①礎石建物に下層遺構（掘立柱）がないことも鬼ノ城の創築年代が遡らないことを示し、②コの字形門礎石のある瀬戸内の神籠石系山城が鬼ノ城との密接な関係を持っていたとすれば、その築城時期や整備時期も鬼ノ城と同時期であるとみられること、である。屋嶋城中心部と目される屋島寺からは坏Hや坏G蓋が出土しており、屋嶋城創築時の遺物と評価できる。TK217併行期の須恵器坏はこれまでも少量であるが、基肄城や金田城、鞠智城でも出土しており、天智紀山城と瀬戸内の古代山城間にも微妙な時期差があると考えた方が、その他の遺構（石塁・列石・門礎）についても理解しやすいかもしれない。

最近の調査で、神籠石系の山城からも年代を示す資料が増加してきている。御所ヶ谷城－7世紀第4四半期の須恵器長頸壺と8世紀前半の土師器、鹿毛馬城－8世紀初めの須恵器水瓶、永納山城－8世紀前半の畿内系土師器と7世紀末～8世紀初頭の須恵器坏蓋など、いずれもこれまでの年代観－7世紀前半とは大きく違っている。鹿毛馬城では水門背後で出土した須恵器甕破片がよく知られているが、水瓶頸部は列石前面の柱穴からの出土であり注目される事例といえる（未報告）。

唐原山城の須恵器甕は細かい年代比定の難しい甕破片資料であり、唐原城内の後期古墳群の存在も勘案しないとならない資料だと考えられる。おつぼ山城の小田編年Ⅳ～Ⅴ期という須恵器坏破片は実測図も示されておらず判断できない。7世紀前半という従来の年代観に一致する資料ばかり着目して、一致しない資料や矛盾する資料からは目をつむるという研究姿勢は古代山城研究の混乱を招いてしまいかねない。

炭素C－14年代

対馬金田城のビングシ山土塁中の炭化材の炭素年代測定値から「（最初の金田城は）6世紀末から7世紀初めごろにかけて築造された」とする著作や新聞報道を見ることがある。ビングシ山土塁が新旧二時期あることは事実としても、それを土塁中の炭化物で年代推定することは問題がある。土中には様々な時代の炭化物が混入しており、考古学的イベント（この場合は土塁の構築）に伴わない炭化物を年代測定しても意味がない年代しか得られない。

金田城では、ビングシ山の掘立柱建物内部の炉跡炭化物や南門から出土した加工材（板材）など、考古学的イベントに伴う試料（確実に遺構に伴う炭化物－火焚き痕跡、土器付着の煤、人工的な加工材など）の測定値はAD670年前後やAD650年前後とほぼ築城年代と整合している。鬼ノ城でも、第0水門外側の排水溝付近から出土した加工木材2点のAmS年代測定が行われているが、加工材の年代はAD670±10年の年代と推定され、出土土器と年代的に整合している。

鹿毛馬城の調査報告には、水門前面と背面から出土した柱根と板材について、AD560年やAD480年と

いった炭素年代測定結果が掲載されている。従来の年代観と合わないコメントが付されているが、これらは較正前の年代であり、暦年較正すると7世紀代の年代を示している⁶⁾。1962年のおつぼ山城調査でも第1水門前面で柱根、東門付近で倒壊した柱と門扉らしい炭化材が出土している。これらはまさしく考古学的イベントに伴う試料であり、最新のAmS年代測定することによって北部九州の神籠石系山城の築造年代が明確になると思われる。第1水門前面の柱根は保存されていたと側聞するので、将来の調査に期待したい。

占地論

嶮山城類と緩山城類について、単に立地する山地の高低と捉えては「城郭」の縄張りを読み解いたとはいえない。嶮山城類といっても全て独立した高山に占地しているわけではなく、縄張りという点では特色がみられる。

金田城も鞠智城も城壁最低点が平地近くまで下るという点では緩山城類に一見似ているが、周辺地形まで含めると緩山城類とは全く異なった占地を取っていることが判明する。金田城は城山北端と対岸の鋸割岩間の細り口を塞げば黒瀬湾への侵入はできない。黒瀬湾を外城として取り込んだ複郭の構想が窺える。鞠智城も米原台地北側に谷盆地を挟んで丘陵が取り巻き、南側は迫地が幾重にも入り込んで台地への侵入を阻む地形となっている。

瀬戸内の諸城では、永納山城と大廻小廻山城が標高は緩山城類に近いが、周囲を丘陵が取り巻き、城内最低点を背後の谷盆地側に開く状況は鞠智城にも通じ、防御ラインとして縦深性を持たせた縄張りとして評価できる。

緩山城類がおおよそ戦國的でないことは、城内最低点である水門部が平地に接しなおかつ平野側に向けて縄張りされていること、独立峰でなく背後に主山塊を持った支峰に占地していることから、それは窺える。このタイプは欠石区間があり⁷⁾、軍事施設として大きな疑念点となっている。また山頂から扇形に稜線を下り2箇所以上の谷を取り囲むという共通したプランをとることが多い。いわゆる傾斜圍繞型の占地である。谷を多く取り込んでいる割に城内は傾斜地ばかりで平坦地に乏しい。北部九州に集中する緩山城類については、このような軍事施設として劣る点をどのように理解するか、少なくとも編年観的には、古代山城として形骸化が進んだ型式と考えられる。

構造論

城壁の形態や折構造の有無、列石と土塁、内部施設の有無などが基本的な検討指標となるが、城壁のめぐらせ方―城壁の屈曲の度合い、敵折れ・味方折れによる横矢がかり、雉城・角楼の有無、城門の位置、尾根のどの部位に城壁を設けているか、城壁の高さや外壁面角度（遮断性）など戦術的な分析視角も重要である。古代山城は山地に占地している城郭だが、漫然と城壁を構築しているわけではない。城壁は山地の地形を利用しつつ立体的に構築されている。少なくとも現地を歩いて体感せねばそれは理解不能であり、報告書や地図を机上で眺めていても古代山城を理解したとは言えない。

城門については、最近調査事例が増加し実態が判明しつつあるが、城門の存在自体明らかでない城跡も依然多い。特に北部九州の神籠石系山城では門跡はあっても門柱さえ検出されない事例があり、普請（土木）のみ完了して作事（建築）に取りかかっていない状況が推測される。門礎石については、九州＝円柱、瀬戸内＝方形柱という2グループに大別できるが、瀬戸内のコの字型門礎石は原位置をとどめていないものが多く、鬼ノ城を除いて軸摺穴もないため、未完成と考えられる⁸⁾。

構造論は、例えば「石塁構築技法」単体で成り立つものではなく、山城構造の各パーツ編年論とも相互に一致する必要があるし、占地論（縄張り論）と双方向的に関係し合いながら初めて意味を持つ。いわば車の両輪といえる。先にも述べたように、編年序列は北部九州の神籠石系諸城の編年の位置づけが論点となっており、時期の差は「対外防衛」から「律令制化・地域支配」へという機能差として段階的

な築造課程が捉えられ、新しい時代になるにつれ軍事性は低下していくと考えられる。

列石

日本への山城導入期に、列石を使用する工法も入ってきていることは間違いなさそうだが、朝鮮半島でもまだ普及していない状況で、自然石・割石使用の段階であり、切石の大きな列石が古い段階に日本で先に登場するとは考え難い。神籠石系山城の中でも北部九州の切石列石を持つグループを古く考える説は韓国における城郭調査の成果とも矛盾している。

北部九州の神籠石系山城の列石には、列石前面上部の縁をL字に「切り欠き加工（段差調整面）」を施している事例が多い。この加工は列石の上縁線を揃えるために為されたもので、列石線の見え方という装飾的な意味と版築土塁の削土範囲を示すという実利的な機能が考えられる。実利的な機能を考えれば、土塁を築かない場合、この加工は不要であるが、杷木城や唐原城でも切り欠き加工は施されている。列石にはL字加工を施すという石材加工作業のルーチンが残存しているとすれば、「痕跡器官」的な加工と考えられ、編年序列としては最後に位置付けられる。

石塁構築技法

古代山城だけでなく石塁（石垣）を理解するためには、内部構造が重要である。近世城郭の石垣と朝鮮半島の古代山城では、外面が似ていたとしても、内部構造は全く異なっている。石垣というと内部はグリ石が入っているというのは日本人研究者の先入観であることをまず認識しなければならない。

石塁構築は地域の伝統的な工法の背景と使用できる石材、加工技術等々、諸々の条件があって成り立っている。近世城郭石垣も小牧山城や安土城以降の試行錯誤、地方石積み工人の吸収など様々な経験と試行錯誤の結果、完成を見るのであって、大野城など天智紀山城を築城時の石塁構築は困難を極めたと思われる。

瀬戸内の古代山城の石塁は様々な様相が見られるが、その中では鬼ノ城－石城山城（東水門）－阿志岐山城（第3水門）に一定の発展系列が見いだせる。いずれも加工を施した長方形石材を使用しているが、鬼ノ城ではなかった鍵型石加工が石城山城や阿志岐山城で登場し、石城山城からは徐々に後ろへ下げて積む技法（控え積み）が現われ、阿志岐山城では顎止め加工（挟り込み加工）も施される。大野城などの天智紀山城から瀬戸内の山城までは内部は、ほぼ同大の石材を層状に積む－半島系の石塁に連なる工法で築かれている。

北部九州の神籠石系山城の石塁は、いずれも切石積み石塁である点が特徴であるが、阿志岐山城の特異な列石構築技法を応用した感がある。外壁面石材の加工がさらに進む。積むというより組み立てる形に近くになり、内部もグリ石が使用されるように変わる。この後は石材の小型化や石塁高の低下となり、鹿毛馬や帯隈山のような石塁を用いない土塁式の谷間城壁も登場する。

小澤佳憲は石塁を外壁面で分析されているが、内部構造を加味しない議論は不十分の誹りは免れない。石塁を立体的な構築物と捉えるならこの点は重要である。横目地が通ることは石材を層状に積む工法から当然ともいえる石積みのあり方で、縦目地（重箱積み）は近世城郭のような構造では禁忌だが、古代山城の構造ではあまり問題とならない。

さらに石塁や列石については、石材供給の問題もある。天智紀や瀬戸内の山城では基本占地する山体から石材を採取していたのに対して、北部九州の神籠石系山城では外部から石材を搬入している。年代観としては、割普請の工区毎に個別に石材調達していた段階から、次第に石材供給と工事の分業化が図られる管理された築城工事へ移行していく様相が窺えるのである。

門礎石（唐居敷）

門礎石について、最近、小澤や赤司善彦より編年論が発表されているが、いずれも日本国内の古代山

城の門礎石の型式分類に基づいて編年されているが、唐居敷の構成要素である軸摺穴、方立、柱のバリエーションを型式として認定している。ほぼ同時期の城門の格付けによる門礎石の変化を時期差と評価するのは誤りである。

鞠智城の門礎石は軸摺穴しかないが、基肄城東北門や金田城も方立がないタイプで、大野城などと比べて簡略化したものと捉えて問題はない。コの字型門礎石についても、鬼ノ城、石城山、播磨城山城は酷似するが、讃岐城山城例は全体的に小型化している。

軸摺穴の形状（方形・円形）で大野城の門礎石を分類し、これを築造の時期差とするのも、軸摺金具に確金系（新羅・百済系）と皿系（中国・高句麗系）の2タイプあることを前提とし、日本への導入時に2系列あったと考えれば、全く問題なく理解できる。

唐居敷は7世紀代に寺院建築と共に導入された新しい建築技術であって、川原寺下層（推定川原宮）出土の石製唐居敷を最古例とする。特に山城における唐居敷は掘立柱→礎石建ての変化はあるが、ほとんどの山城で掘立柱式の時期に廃絶してしまう。大野城や水城では礎石建ての時期まで二段階程度変化し、傾向として簡略化に向かう。最近、兵庫県の駅館遺跡（落地（八反坪）遺跡、古大内遺跡）でも石製の唐居敷が見つかり、若干資料は増えたものの、円形軸摺穴＋長方形方立の通常の唐居敷であり、大勢に影響はない。

おわりに

年代論や築城主体論から次フェーズの研究段階へステップアップしていくためには、律令国家形成史の中での位置付け、地域史の中での位置付けなど一考古学だけでなく広い視野が必要である。そのためには文献史学や歴史地理学の研究成果から学ばねばならないことも多い。出土土器の実年代観をめぐって「650年まで遡る」とか「660年代になんとか収まる」といった年代論をいまだに聞く。天智紀など文献記載の山城とともに、文献未記載の山城の築造場所も当初から決められていたと推定し、築城の取り掛かりに大きな時期差はなかったとする意見をいまだに聞く。鬼ノ城のように出土土器による年代が明らかになっても、築城契機について白村江敗戦に求めようとする見方は根強い。

このような考えを見聞きするたびに占地論や構造論への理解と深化が必要だと痛感する。古代山城築造の意義が軍国体制建設のための地域編成と密接に関わっているとすれば、些末な議論に陥っている感も拭えない。7世紀の地域支配体制の確立過程の研究こそ重要な議論であって、山城の築造年代がその「鍵」を握っているかもしれない。

註

- 1) 栢嶺山城では若干新羅の遺物も出土しているとの情報もあるが、門構造、木柵庫など百済山城と考えられる。
- 2) 拙著（向井2016）では、聖興山城の西側の石築城が「新城」、東側の城を「古城」と考え、古城を501年に築かれた加林城に比定したが、最近の調査で東側の城は高麗時代に付加された外城と判明した。高麗時代に増築された外城は寧越・正陽山城でも確認されている。外城は本城（内城）に比べて簡単な構造であることが多い。
- 3) 城門開口部曲線構造は、次第に守りの堅い「食違い門」に発達していくと考えられる。
- 4) 帯限山周辺に須恵器窯跡が分布することも陶棺出土の背景と思われる。
- 5) 土段式の土塁形態は韓国にはなく日本独自のもので、内托土塁の簡略化した形態と考えられる。
- 6) 鹿毛馬城の炭素年代はβ線法による古い調査結果であるため、誤差が大きく、一部のデータは大きく汚染の影響を受けているとみられる（紀元前になっているものあり）。
- 7) 北部九州の神籠石系山城にみられる欠石区間（周長の1/3～1/2近くの列石や土塁が築かれていない）について、亀田修一は「未完成説」を提唱しているが、未完成という言葉だけが一人歩きし始めていることを懸念している。筆者はある一定の方向（駅路や官衙など）から見える範囲だけ構築している状況「見せる山城」と評価する（向井2016）。
- 8) 最近、讃岐城山城の外郭（第2車道）では、列石だけ並べた遺構が確認されている。讃岐城山城には、ホロソ石と呼ばれる門礎石のコの字型の挟り加工が途中で中断している事例もある（サルブチ滝のホロソ石）。

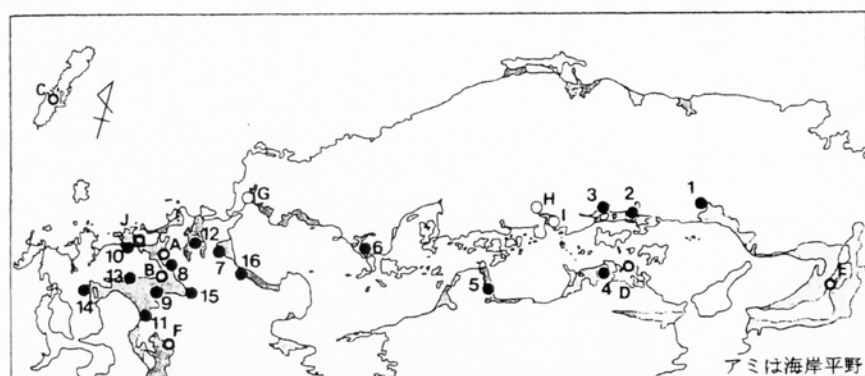
参考文献

- 東潮・田中俊明1988『韓国の古代遺跡1 新羅篇（慶州）』中央公論社
- 東潮・田中俊明1995『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社
- 今井和彦・工藤茂博・向井一雄1996「讃岐城山城跡の研究」『溝婁』第6号,古代山城研究会
- 今村峯雄・小林謙一・新免歳靖・坂本稔・谷山雅彦2007「炭素14測定からみた鬼城山遺構の築造年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集
- 岡山県教育委員会2013『史跡 鬼城山2「甕る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」城内確認調査』
- 岡山県古代吉備文化財センター 2013『鬼ノ城発掘調査報告会 ここまで分かった鬼ノ城』
- 小澤佳憲2014「古代山城出土唐居敷から見た鞠智城跡の位置づけ」『鞠智城と古代社会』第2号,熊本県教育委員会
- 小澤佳憲2018「石垣構築技術からみた鞠智城跡石垣の位置づけ」『鞠智城と古代社会』第6号,熊本県教育委員会
- 穎田町教育委員会1998『国指定史跡鹿毛馬神籠石』
- 亀田修一2015「古代山城を考えるー遺構と遺物ー」『古代山城と城柵調査の現状』平成27年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第28回研修会発表要旨集
- 韓国城郭学会・古代山城研究会2009「特集 日韓古代山城研究セミナー」『溝婁』第14号,古代山城研究会
- 熊本県教育委員会2012『鞠智城跡Ⅱー鞠智城跡第8～32次調査報告ー』
- 佐賀市教育委員会1969『帯隈山神籠石東北部調査概要』
- 瀬高町教育委員会1982『女山・山内古墳群』
- 大平村教育委員会2003『唐原神籠石Ⅰ』
- 高松市教育委員会2007『屋島寺』
- 高松市教育委員会2016『屋嶋城跡ー城門調査整備事業報告書』
- 筑紫野市教育委員会2008『阿志岐城跡ー阿志岐城跡確認調査報告書』
- 対馬市教育委員会2008『古代山城 特別史跡金田城跡Ⅲ』
- 西川宏1993「朝鮮式山城の源流についての初歩的探求」『古文化談叢』30中,九州古文化研究会
- 堀江潔「百済滅亡後における倭国の防衛体制ー斉明紀「繕修城柵」再考」『日本歴史』第818号,吉川弘文館
- 美津島町教育委員会2000『金田城跡』
- 向井一雄1991「西日本の古代山城遺跡ー類型化と編年についての試論ー」『古代学研究』第125号,古代学研究会
- 向井一雄1999「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』第27号,地域相研究会
- 向井一雄2001「古代山城研究の動向と課題」『溝婁』第9・10合併号,古代山城研究会
- 向井一雄2014「韓日古代山城の城門に関する一考察（予察）」『百済文化』第50輯,韓国公州大学校・百済文化研究所
- 向井一雄2016『よみがえる古代山城ー国際戦争と防衛ラインー（歴史文化ライブラリー）』吉川弘文館
- 村上幸雄・乗岡実1999『鬼ノ城と大廻り小廻り（吉備考古学ライブラリー2）』吉備人出版
- 村上幸雄2010「鬼ノ城ー城門遺構の調査と出土土器による年代ー」『古代文化』61-4,古代学協会
- 門田誠一1986「東アジアにおける神籠石系山城の位置」『古代学研究』第112号,古代学研究会
- 八木充2008「百済滅亡前後の戦乱と古代山城」『日本歴史』第722号,吉川弘文館
- 行橋市教育委員会2006『史跡 御所ヶ谷神籠石Ⅰ』
- 渡辺正気1988「神籠石の築造年代」『考古学叢考』中、吉川弘文館

図版出典

- 図1～2、表1～2：向井作成
- 表3：岡山県古代吉備文化財センター 2013
- 表4：熊本県教育委員会2012
- 表5：大野城心のふるさと館2018『再々発見！古代山城と水城・大野城』特別展図録
- 図3：大平村教育委員会2003
- 図4：佐賀市教育委員会1969
- 図5：瀬高町教育委員会1982
- 図6：穎田町教育委員会1984『鹿毛馬神籠石』
- 写真1：須原緑2008「鹿毛馬神籠石」『季刊韓国の考古学』7号
- 図7：行橋市教育委員会2006、岡山県教育委員会2013、福岡県教育委員会2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』高松市教育委員会 2016、佐賀県教育委員会1967『帯隈山神籠石とその周辺』、西条市教員会委員会2012『史跡永納山城跡Ⅱ』、村上幸雄・乗岡実 1999
- 図8：村上幸雄・乗岡実1999、佐賀県1967、神埼町1969『帯隈山神籠石天童山東部調査概報』
- 図9：村上幸雄・乗岡実1999、古代山城研究会『溝婁』、穎田町教育委員会1998
- 図10：福岡県2010、鬼ノ城学術調査委員会1980『鬼ノ城』、筑紫野市教育委員会2008、武雄市1965『おつば山神籠石』、みやま市教

育委員会2013『女山神籠石』、行橋市教育委員会2006、大平村教育委員会2003
図11：基山町教育委員会1977『特別史跡基肆城跡』、瀬高町教育委員会1982、新宮町教育委員会1988『城山城』、美津島町教育委員会2000、行橋市教育委員会2006、筑紫野市教育委員会2008
図12：小澤佳憲2014
図13：東潮・田中俊明1995
図14～15：古代山城研究会2007『溝婁』13号
図16：東潮・田中俊明1988
図17：向井2016
図18：高正龍1995「韓国古代山城」『古代文化』47-12（443号）
図19：古代山城研究会1999『溝婁』8号
写真2：向井撮影
写真3：（財）忠清文化財研究院2003『大田月坪洞山城』
図20：沈相六2014「2013年扶余羅城発掘調査成果報告」『季刊韓国の考古学』25号
図21～24：向井2014
図25～27：向井1999



- | | | | | |
|----------|---------|----------|-------|---------|
| 1 播磨城山城 | 7 御所ヶ谷城 | 13 帯隈山城 | A 大野城 | G 長門国の城 |
| 2 大廻小廻山城 | 8 阿志岐山城 | 14 おつば山城 | B 基肆城 | H 常城 |
| 3 鬼ノ城 | 9 高良山城 | 15 杷木城 | C 金田城 | I 茨城 |
| 4 讃岐城山城 | 10 雷山城 | 16 唐原山城 | D 屋嶋城 | J 怡土城 |
| 5 永納山城 | 11 女山城 | | E 高安城 | |
| 6 石城山城 | 12 鹿毛馬城 | | F 鞠智城 | |

図1 古代山城分布図

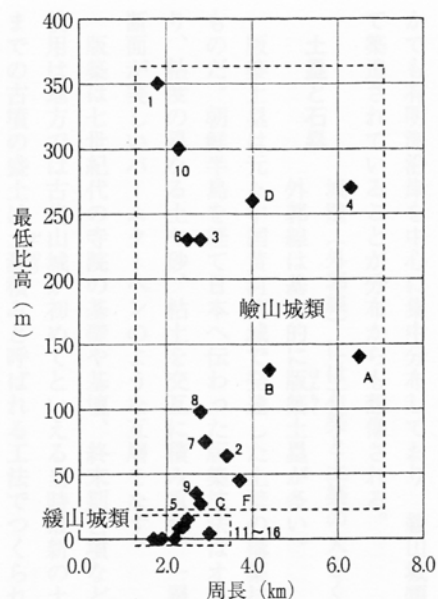


図2 古代山城周長比高グラフ

表1 古代山城構造比較一覧

山城名	所在地	周長(km)	標高(m)	最低比高(m)	占地	外郭線構造					列石・石材							城門	
						土築・石築	土形	折・曲	版築	水門	列石	石材加工	石材供給	被覆・露出	置き方	段差調整面	列石前柱(有無・間隔m)	城門	門礎
1 播磨城山城	兵庫県たつの市	1.8	458	350	峻	土・石?	土段	折?	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	×	○?	凹型
2 大廻小廻山城	岡山県岡山市	3.4	198	64	峻	土・石	土段	折	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	×	○?	凹型
3 鬼ノ城	岡山県総社市	2.8	403	230	峻	土・石	土段	折	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎3.0	◎	凹型
4 讃岐城山城	香川県坂出市・丸亀市	6.3	462	270	峻	土・石	土段	折	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎	◎	凹型
5 永納山城	愛媛県西条市	2.5	128	15	緩	土	土段	折	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎3.0	◎	凹型
6 石城山城	山口県光市・田布施町	2.5	350	230	峻	土	土段	折	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎219	◎	凹型
7 御所ヶ谷城	福岡県行橋市・みやこ町	2.9	247	75	峻	土	土段	折	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎1.8	◎	凹型
8 阿志岐山城	福岡県筑紫野市	2.8	339	98	峻	土	土段	折	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎	◎	凹型
9 高良山城	福岡県久留米市	2.7	252	35	緩	土	土段	折	◎	石塁?	◎	野面	現地?	被覆	寝	×	◎	◎	凹型
10 雷山城	福岡県糸島市	2.3	483	300	峻	土	土段	折	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎	◎	凹型
11 女山城	福岡県みやま市	3	202	4	緩	土	土段	曲	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎3.0	◎	凹型
12 鹿毛馬城	福岡県飯塚市	2.2	70	0	緩	土	土段	曲	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎3.0	◎	凹型
13 帯隈山城	佐賀県佐賀市	2.4	174	9	緩	土	土段	曲	◎	石塁?	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎3.0	◎	凹型
14 おつば山城	佐賀県武雄市	1.9	66	0	緩	土	土段	曲	◎	石塁?	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎3.0	◎	凹型
15 杷木城	福岡県朝倉市	2.3	130	8	緩	土	土段	曲	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎	◎	凹型
16 唐原山城	福岡県上毛町	1.7	73	0	緩	土	土段	曲	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎	◎	凹型
A 大野城	福岡県太宰府市・宇美町	6.5	410	140	峻	土・石	土段	折	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎1.6	◎	凹型
B 基肆城	佐賀県基山町	4.4	416	130	峻	土	土段	折	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎	◎	凹型
C 金田城	長崎県対馬市	2.8	276	27	緩	土	土段	折	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎	◎	凹型
D 屋嶋城	香川県高松市	4	292	260	峻	土	土段	折	◎	石塁	◎	野面	現地	被覆	寝	×	◎	◎	凹型
E 高安城	大阪府八尾市・奈良県平群町		488		峻	土?	土段?				◎?	野面	現地	被覆?	寝	×	◎1.8	◎	凹型
F 鞠智城	熊本県山鹿市・菊池市	3.7	169	45	緩	土	土段				◎	野面	現地	被覆?	寝	×	◎	◎	凹型

表2 古代山城編年指標(上段:朝鮮半島、下段:日本)

指標	3C	6C	7C	8C	9C
柱間間隔	←-----	1.2~1.8m	-----→	←-----	3.0m→ 3.5~4.0m →
列石有無	列石なし	-----→		列石あり→	
版築	版塊連接	-----→	通常版築	-----→	
石築		石築出現→	切石使用→		
大型化				大型化→	
折れ			折れ→	曲線→	
切石			←野面・割石→	切石→	
占地			峻山城→	緩山城→	

表3 鬼ノ城城内各地区の変遷(青の部分は各地区の消長を示す。出土遺物の量をもとに作成)

		I 区	II 区	III 区	IV 区	V 区
	縄文・弥生					
I 期	7世紀後半 ～8世紀初頭	基礎状遺構 土器溜まり1	礎石建物群	鍛冶工房	土手状遺構	
II 期	8世紀初頭 ～8世紀前半					
	8世紀後半					
III 期	9世紀	?	掘立柱建物1	?		
	10世紀		礎石建物5 (再利用)			集石遺構 掘立柱建物2
	11世紀					
IV 期	12世紀					
	13世紀					

表4 鞠智城跡出土土器の時期別数量比較

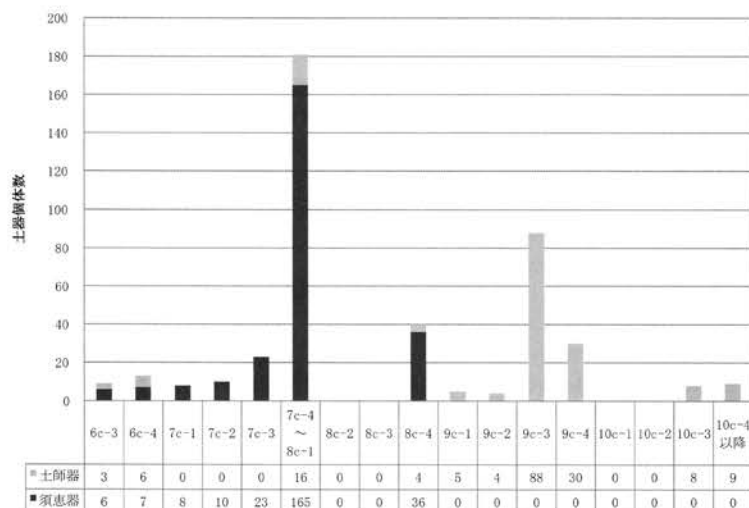


表5 古代山城出土土器の時期(赤司善彦作成)

学史的な分類	山 城 名	時 期			
		7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
朝鮮式山城	大野城	■	■	■	■
	基肄城	■	■	■	■
	金田城	■	■	■	■
	鞠智城	■	■	■	■
	厚嶋城	■	■	■	■
	高安城	■	■	■	■
石瀬系山城	播磨城山城	■	■	■	■
	大連小蓮山城	■	■	■	■
	鬼ノ城	■	■	■	■
	讃岐城山城	■	■	■	■
	永納山城	■	■	■	■
	石城山神籠石	■	■	■	■
九州の神籠石系山城	御所ヶ谷神籠石	■	■	■	■
	阿志岐山城	■	■	■	■
	高良山神籠石	■	■	■	■
	雷山神籠石	■	■	■	■
	女山神籠石	■	■	■	■
	鹿毛馬神籠石	■	■	■	■
	帯張山神籠石	■	■	■	■
	おつぼ山神籠石	■	■	■	■
	杷木神籠石	■	■	■	■
所在が不明な山城	唐原山城	■	■	■	■
	長門城	■	■	■	■
	三野城	■	■	■	■
	稲積城	■	■	■	■
	常城	■	■	■	■
	茨城	■	■	■	■
	三宅城	■	■	■	■
	大津城	■	■	■	■

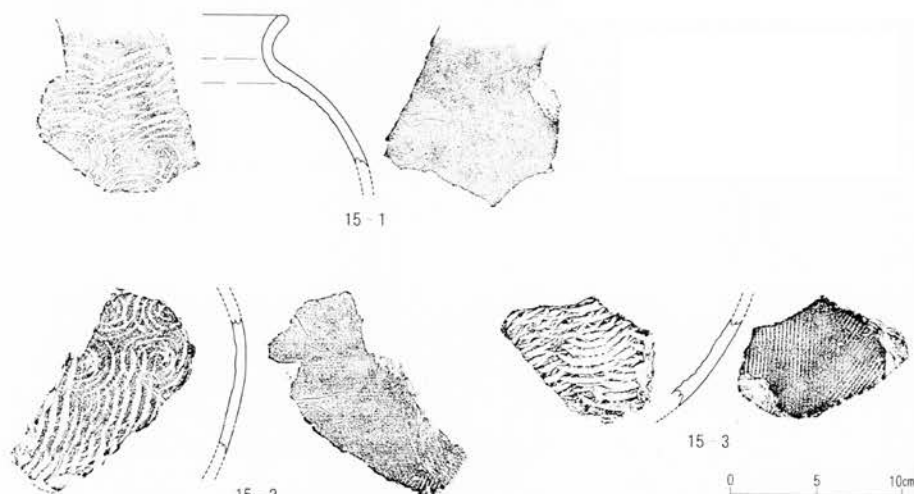


図3 唐原山城 第2水門出土須恵器甕

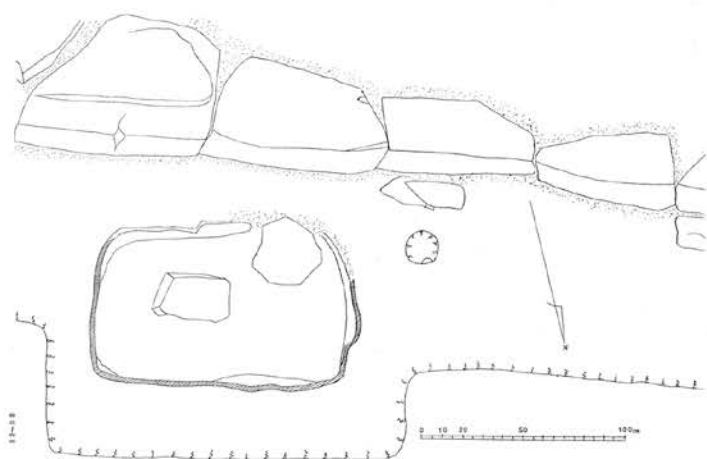


図4 帯隈山城の陶棺との切り合い関係

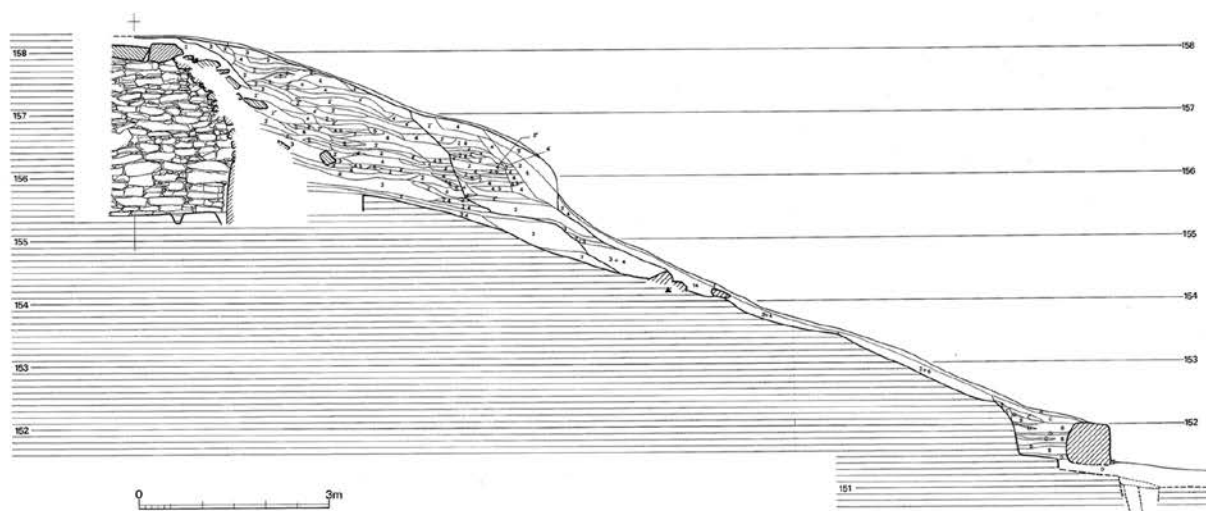


図5 女山城列石線と山内2号墳との位置関係

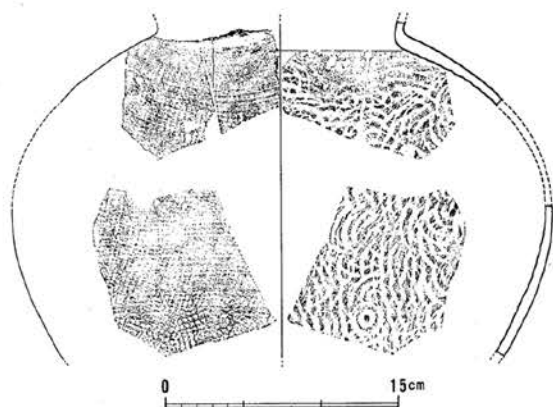


図6 鹿毛馬城 水門背後出土須恵器壺



写真1 鹿毛馬城 列石前面柱穴から須恵器水瓶出土状況

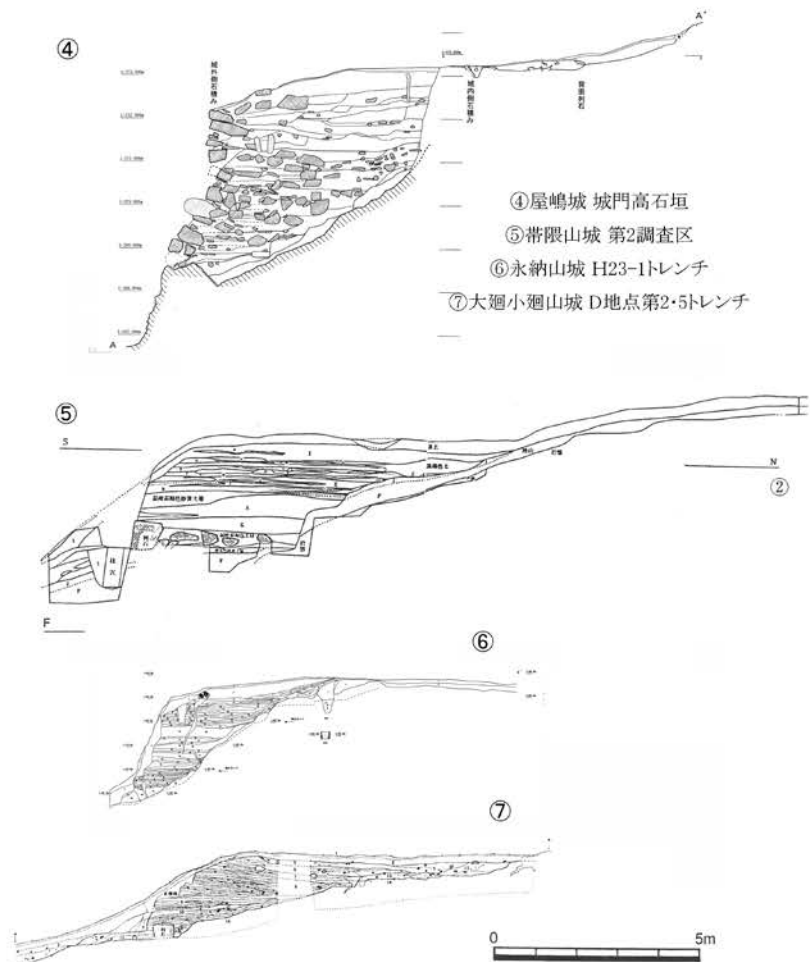
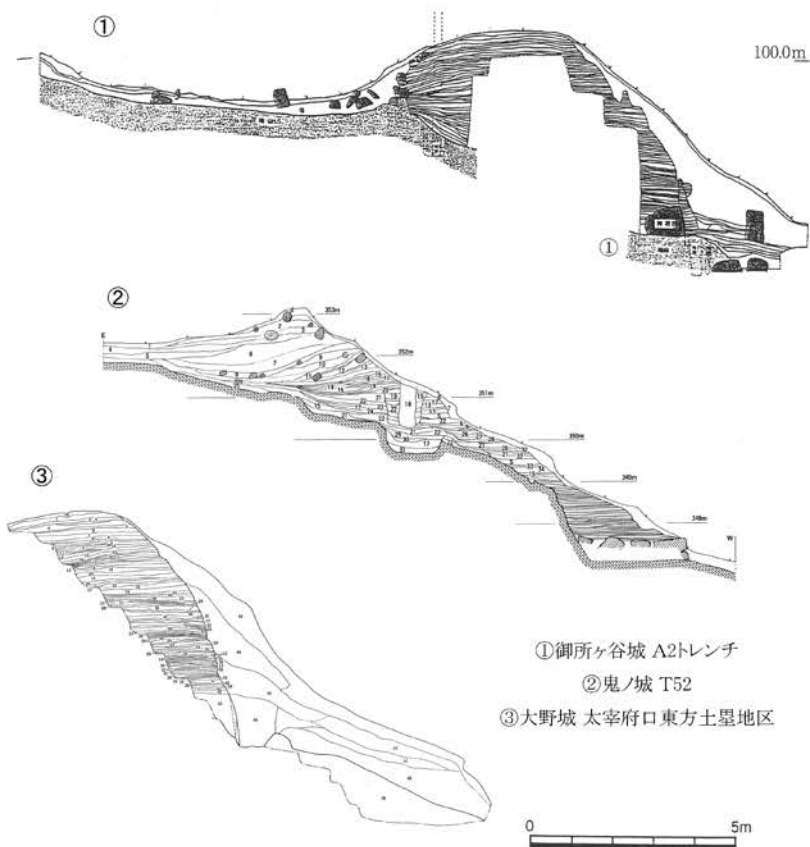


図7 土塁断面図

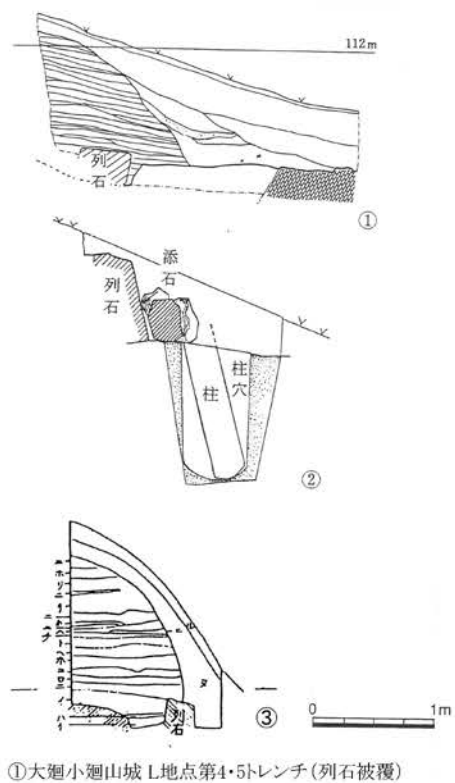


図8 列石前面部の状況

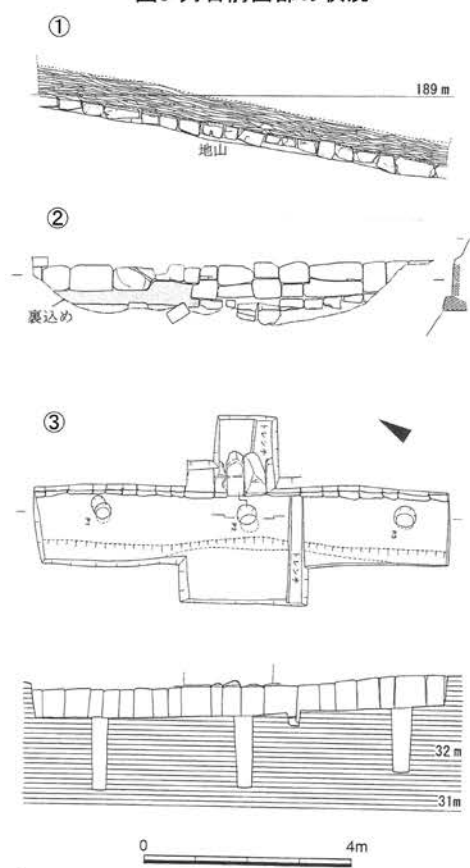


図9 列石立面図

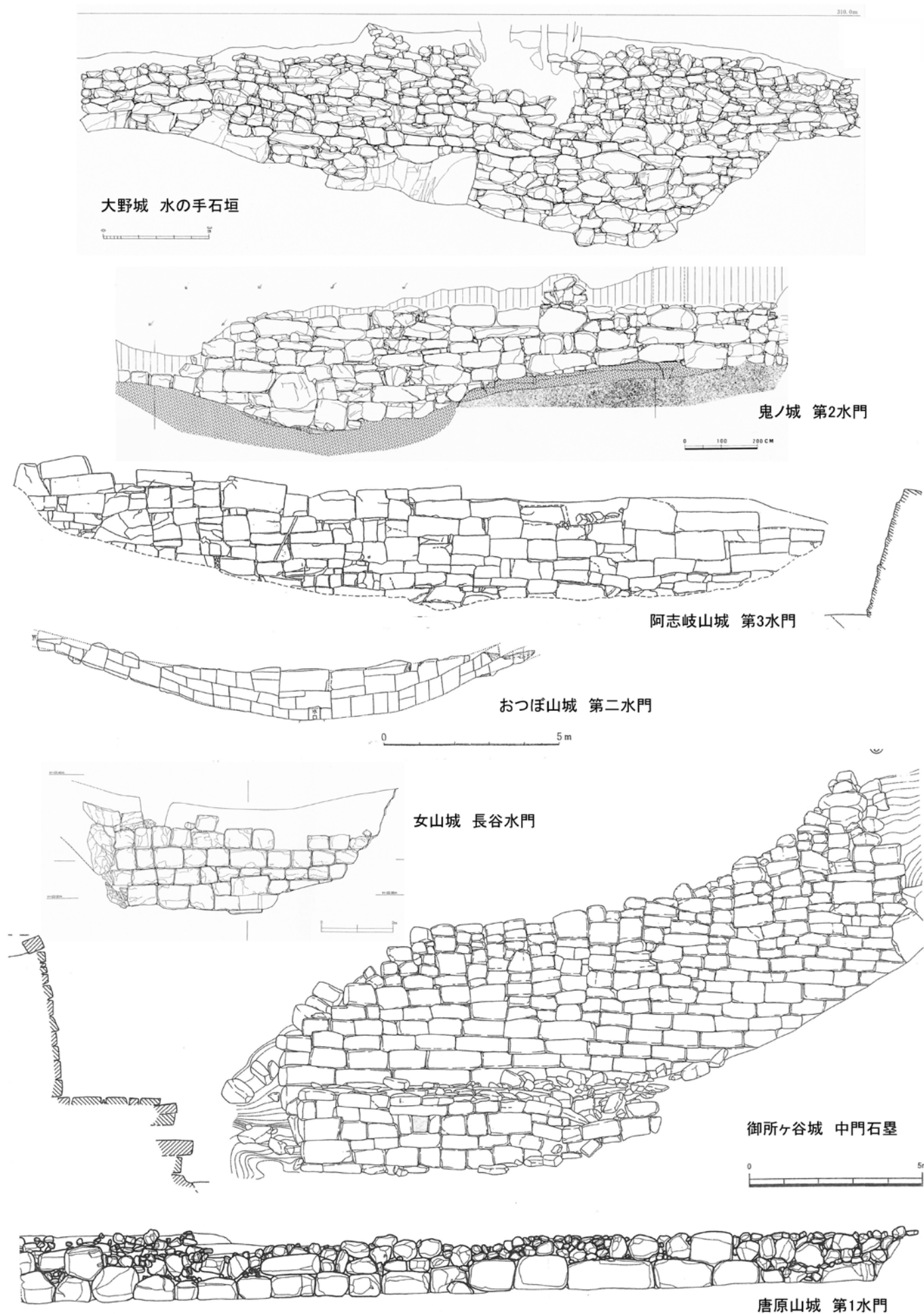


図10 石塁

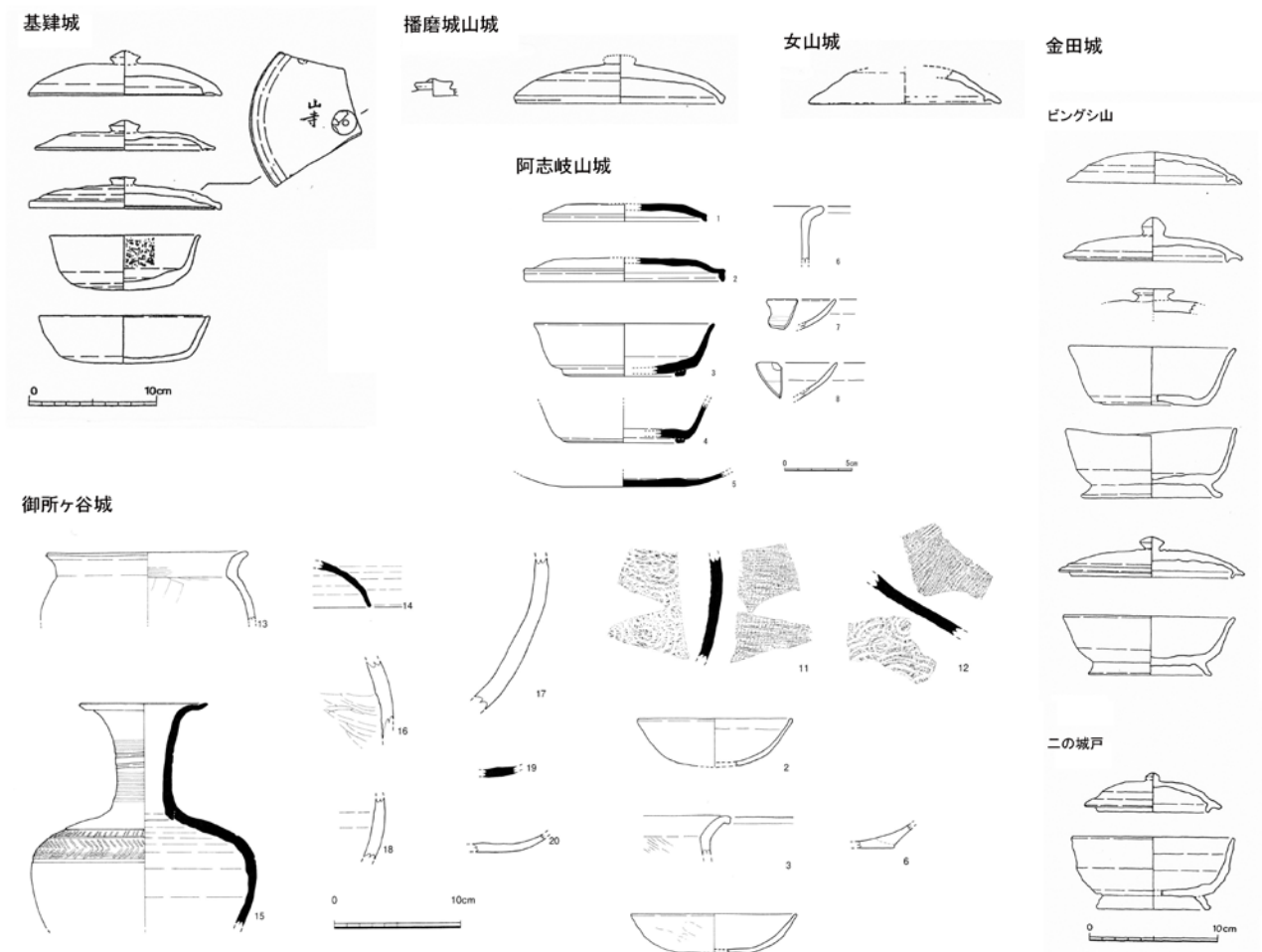


図11 各地の山城の出土遺物（須恵器・土師器）

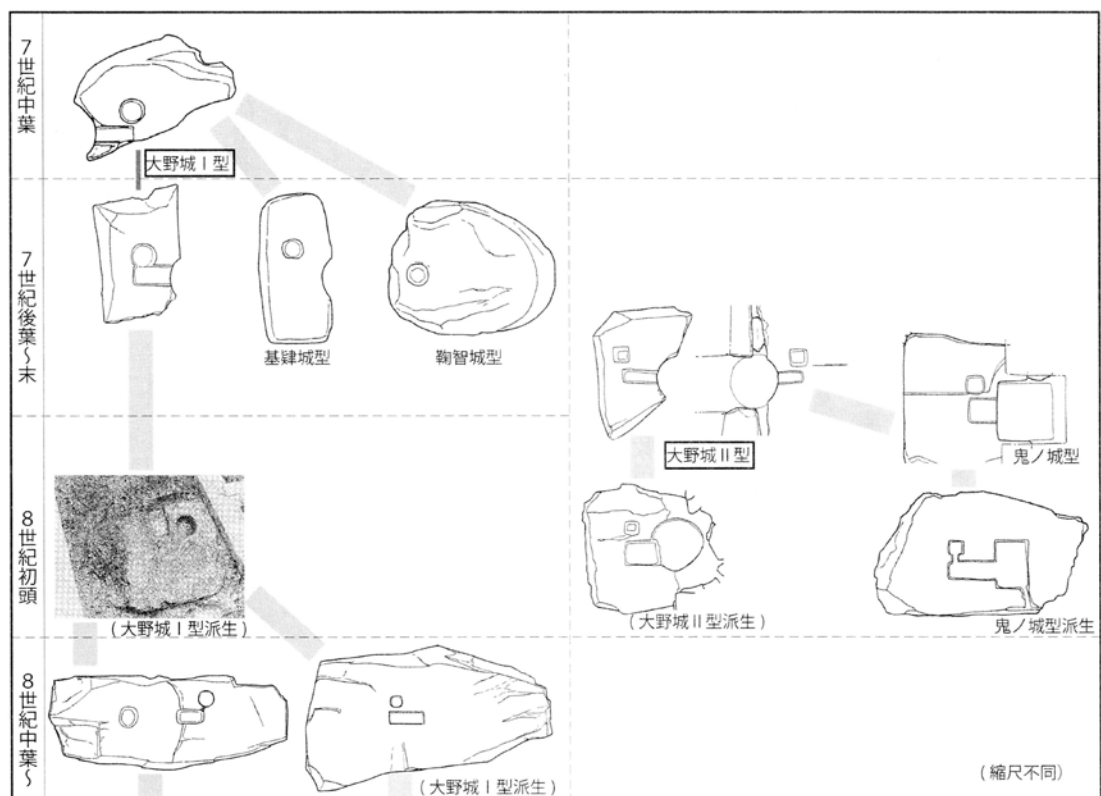
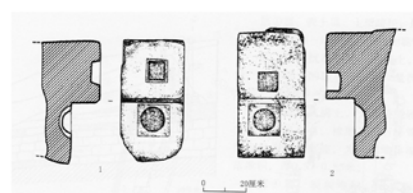
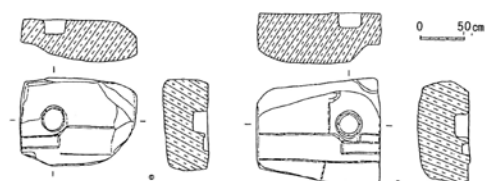
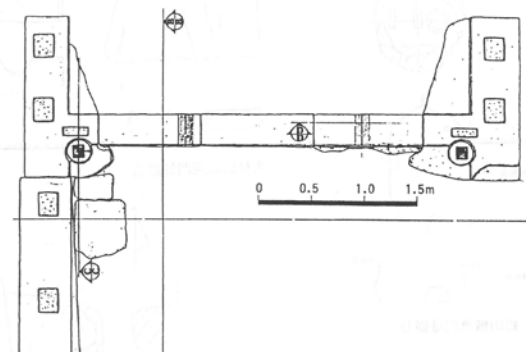
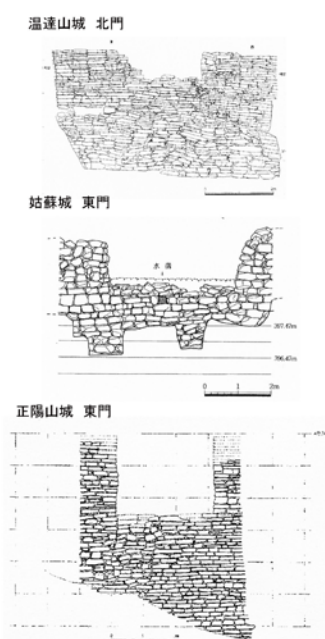
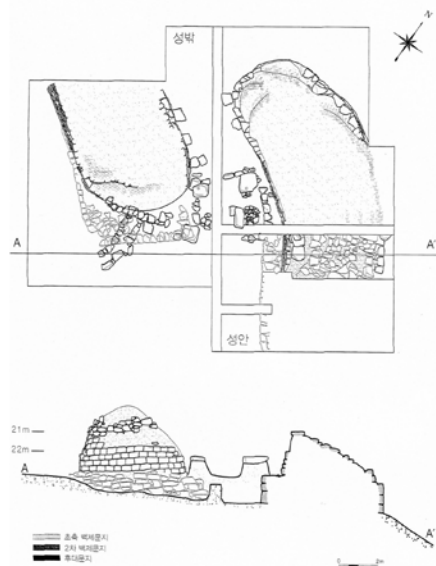
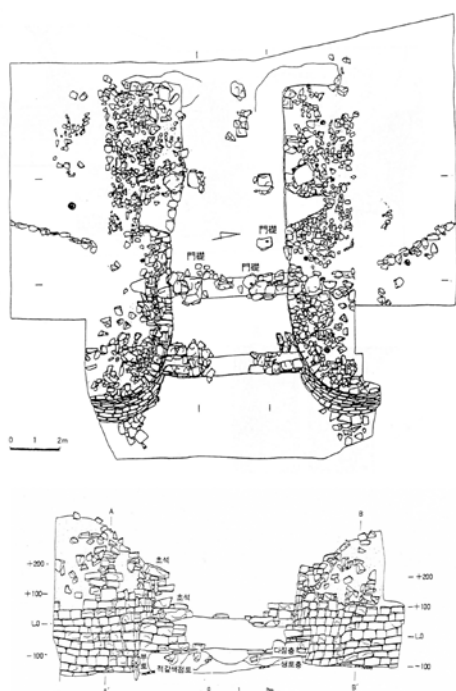
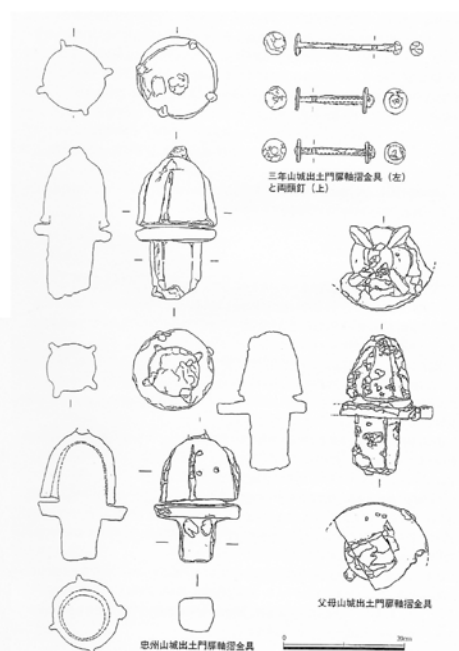
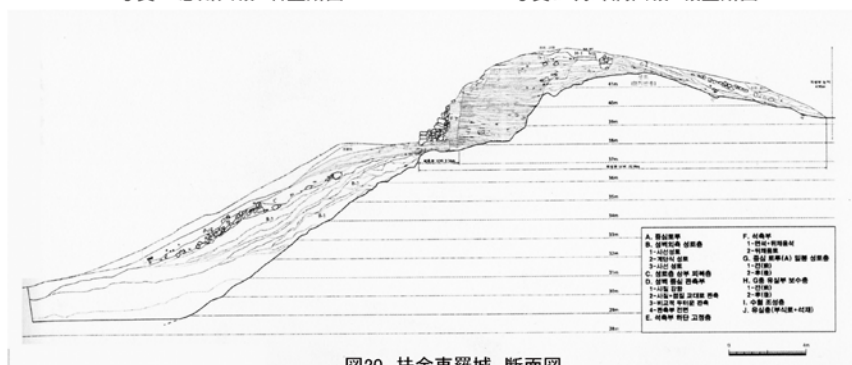


図12 石製唐居敷の分類と編年（小澤佳憲作成）



第4章

有明海沿岸における古代山城の年代論

矢野 裕介

はじめに

我が国における古代山城の築城年代については、朝鮮半島における白村江の敗戦（663）を境として、それ以前か、以後かで議論の分かれるところであるが、7世紀中頃～後半にかけて築城されたとする見解は衆目の一致するところであろう。また、廃城年代についても、ほとんどの城が8世紀前半までにはその役割を終えたものとして大過ないものといえる。

そうしたなか、熊本県の北部に位置する鞠智城跡は、遺構の変遷、出土遺物等の検討から、7世紀後半から10世紀中頃まで存続したことが推定されており、大宰府都城の一角をなす大野城（福岡県太宰府市・大野城市・宇美町）、基肄城（佐賀県基山町・福岡県筑紫野市）とともに、8世紀以降も存続した城であることが明らかとなっている。大宰府から直線距離で約62km離れた鞠智城がかくも長きにわたって存続した要因として、城の役割・性格の究明が待たれるところであるが、坂本経堯が想定した「有明海侵入敵の確認・伝達」「大宰府非常に備えるための物資・兵器の蓄え」「九州南部の熊襲族に対する重鎮」がその議論の礎となっている。

本稿では、その一つに挙げられる「有明海の侵入敵の確認・伝達」について、有明海沿岸部に所在する古代山城を取り上げながら考えてみたい。

1. 鞠智城について

まず、最初に鞠智城について述べておく。

鞠智城は、『続日本紀』文武天皇2年（698）5月条「大宰府をして、大野、基肄、鞠智の三城を繕治せしむ。」の修繕記事を初見とし、『日本文徳天皇実録』天安2年（858）2・6月条、『日本三大実録』元慶3年（879）3月条に「菊池城院」「菊池郡城院」の名で、兵庫鳴動、不動倉焼失記事が散見する国史記載の城である。その城跡となる鞠智城跡は、阿蘇北外輪山から有明海へと西流する菊池川の中流域、山鹿市と菊池市の市境に位置する。

筑肥山地の主峰、八方ヶ岳（標高1,052m）の南西麓に発達した複雑な丘陵地帯の南端近く、標高145m前後の台地状丘陵、通称「米原台地」に鞠智城跡は立地する。南に望む平野部（菊鹿盆地）との比高差100m程の低丘陵でありながら、四周は急峻な斜面や崖線で囲繞されており、その城域については、古くより広域説、狭域説が議論されてきたが、狭域説のうち土塁線と崖線で囲繞され

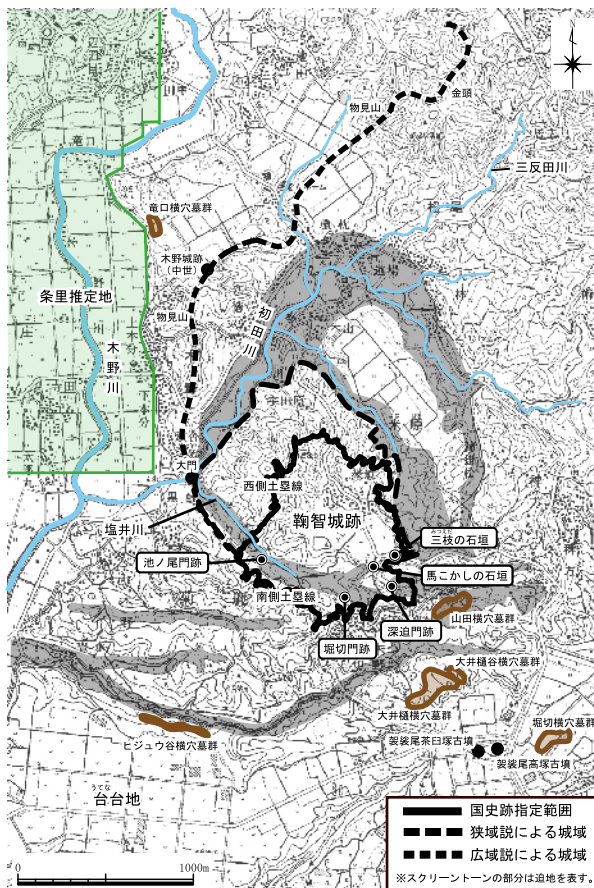


図1 鞠智城跡城域図

た周長3.5km、面積55haの範囲を内城地区とし、それを含む約64.8haが国の史跡に指定されている（図1）。

昭和42年（1967）に始まる発掘調査により、周長3.5km、標高90～171mの外郭線上に城門3箇所（深迫・堀切・池ノ尾）と土塁、石塁が検出されており、城内には、城の中核域となる長者原地区を中心に72棟の建物跡、その北側谷部に5,300㎡の貯水池跡が検出するなど、城の構造解明が進んでいる（図2）。また、須恵器、土師器などの日常雑器のほか、単弁八葉蓮華文軒丸瓦をはじめとする瓦類、建築用材、農工具などの木製品、『秦人忍口五斗』銘の付札木簡（荷札）、銅造菩薩立像など、他の古代山城に比べて多くの遺物が出土しており、城の造営年代の検証を可能なものとしている（図3、4）。

鞠智城の変遷については、7世紀後半から10世紀中頃まで、5期に及ぶ時期区分と変遷（鞠智城Ⅰ期～Ⅴ期）が明らかとなっている。

その変遷を概観すると、鞠智城の創建期となる鞠智城Ⅰ期（7世紀第3四半期～第4四半期）に、城門、土塁、貯水池など、城としての施設が急速に整備され、次の鞠智城Ⅱ期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）に、行政的機能を併せ持つ城の中核施設が出現するなど、城内の施設が再編されるとともに、多数の人員を配置するなど、城の隆盛期を迎える。鞠智城Ⅲ期（8世紀第1四半期後半～第3四半期）で掘立柱建物から礎石建物に建て替えられるなど、施設の長期的な存続が図られる一方、配置人員は皆無に等しく、城の運営に変化が生じ、鞠智城Ⅳ期（8世紀第4四半期～9世紀第3四半期）以降は、中核施設の消失、貯水池機能縮小の一方、礎石建物の大型化が図られ、食糧の備蓄的機能が主体となる。鞠智城Ⅴ期（9世紀第4四半期～10世紀第3四半期）には、大型礎石建物が再建されるなど食糧の備蓄機能が存続し、そして廃城を迎える。

このうち鞠智城Ⅲ期前半までの変遷は、大宰府政庁の変遷との比較のなかで、鞠智城Ⅰ期前半が大宰府政庁Ⅰ期古段階、鞠智城Ⅰ期後半が大宰府政庁Ⅰ期新段階、鞠智城Ⅲ期前半が大宰府政庁Ⅱ期にそれぞれ対比でき、ほぼ連動した動向であることが指摘できる。こうした連動は、少なくとも鞠智城Ⅲ期前半までは、鞠智城が大宰府との密接な関係のもと機能していたことを示すもので、大宰府防衛の一翼を担う軍事的役割とともに、その維持管理の面でも大宰府が大きく関与していたことがうかがえる。

六国史にみる鞠智城 *『国史大系』吉川弘文館

甲申。令_下大宰府一繕中_上治大野。基肄。鞠智三城_上。

（書き下し文）

「甲申、大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕い治めしむ。」

『続日本紀』文武天皇二（698）年五月二十五日条

丙辰。肥後国言。菊池城院兵庫鼓自鳴。丁巳。又鳴。

（書き下し文）

「丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」

「丁巳、又鳴る」

『日本文徳天皇実録』天安二（858）年二月二十四・二十五日条

肥後国菊池城院の兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一字火。

（書き下し文）

「肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」

「同城不動倉十一字火く」

『日本文徳天皇実録』天安二（858）年六月二十日条

肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。

（書き下し文）

「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る」

『日本三代実録』元慶三（879）年三月十六日条

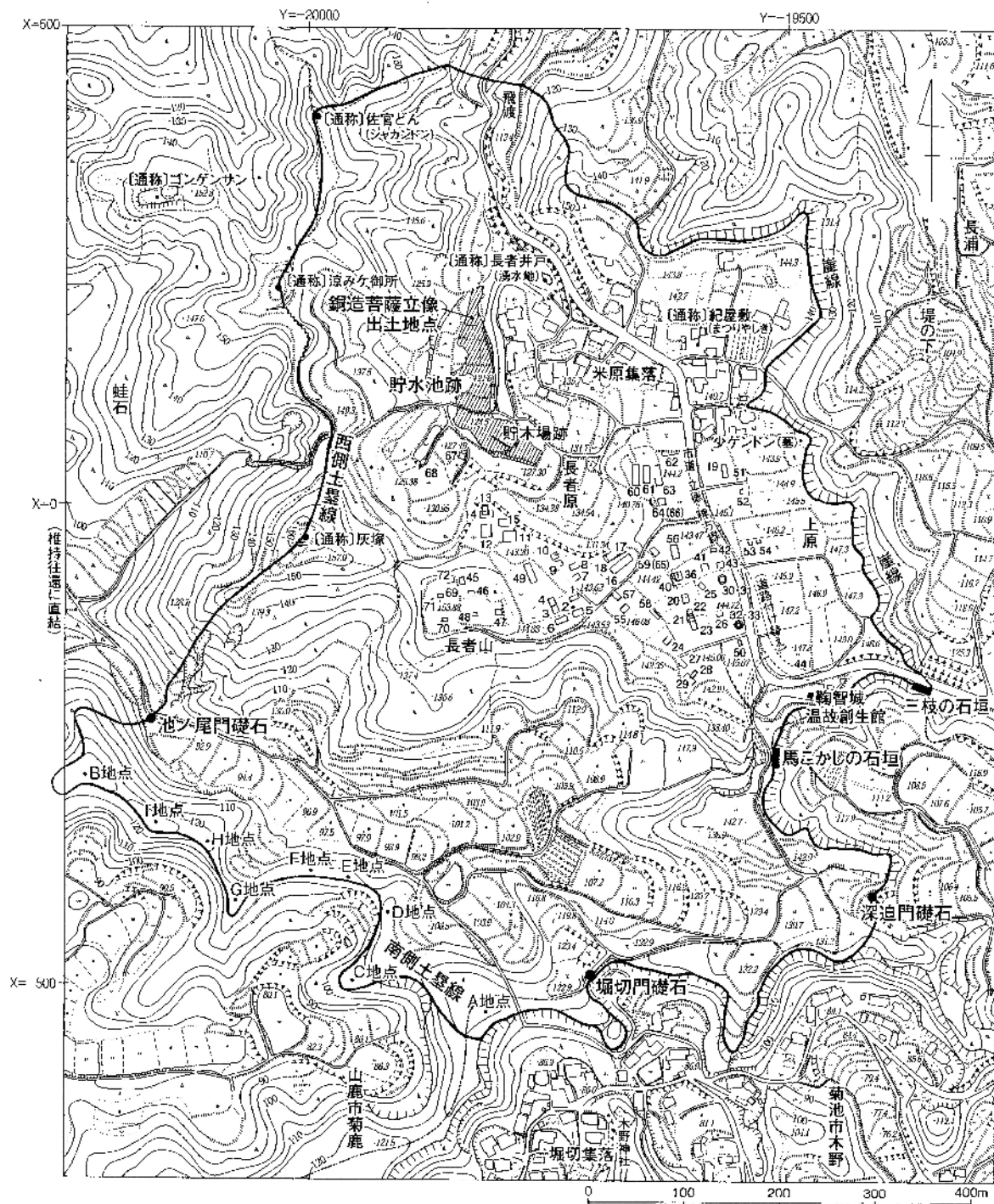


図2 鞠智城跡全体図

2. 有明海沿岸部における古代山城

有明海沿岸部に位置する古代山城として、ここで取り上げるのは、有明海までさほど距離がない武雄盆地南端のおつぼ山城（佐賀県武雄市）、佐賀平野北端の帯隈山城（佐賀県佐賀市）、筑後平野東の高良山城（福岡県久留米市）、同じく南端の女山城（福岡県みやま市）の4城である（図5）。いずれも、いわゆる神籠石系（型・式）山城に分類され、土塁基底部に土塁基底部前面に切石加工の列石を巡らす山城で、ほぼ同時期に築造されたものと考えられるものである。以下に、各城の概要とその特徴を述べる（図6）。

建物跡等遺構関連遺物

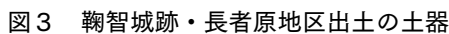




図4 鞆智城跡出土遺物

（1）各城の概要

①おつぼ山城（史跡「おつぼ山神籠石」）

佐賀県の南西部、武雄盆地の南端近く、杵島山塊の西麓に位置する最高所66.1mのおつぼ山の東側を中心に立地する古代山城である。総延長約1.9kmの外郭線は、おつぼ山周辺の地形に応じて、丘陵や峰を取り込みながら廻る。その外郭線上に、2箇所の水門（第1水門、第2水門）と2箇所の城門（東門、南門）、列石、土塁が確認されている。列石は曲線を基調とすることを特徴とする。列石は安山岩で、平均幅76cmを図り、上縁加工を施す。土塁は調査箇所で幅9.0mを図り、土塁前面に柱間約3.0m間隔の柱穴列が確認されている。

②帯隈山城（史跡「帯隈山神籠石」）

佐賀県の中央部、背振山系の南端に位置する標高174.6mの帯隈山の南斜面を中心に立地する古代山城である。南に佐賀平野を見わたすことができる。総延長約2.4kmの外郭線は、帯隈山を取り込み、北側標高175mのから下って南側山裾を廻り、2～3の低丘陵を取り囲んだ馬蹄形状を為す。その外郭線上に、城門1箇所（北門）と列石、土塁が確認されている。列石は花崗岩で、上縁加工を施したものである。土塁は調査箇所で残存高2.6m、幅9.0～10.0mを図る。このほか南側谷口3箇所に水門も推定されている。

③高良山城（史跡高良山神籠石）

福岡県の南部、耳納連山の西端、標高312mの高良山の北西斜面を中心に立地する古代山城である。筑後平野を西に見下ろす位置にある。総延長約2.7kmの外郭線は、南北2つの谷と5つの峰をつなぐように巡る。その外郭線上に、水門1箇所（南谷水門）、列石が確認されている。列石の大部分は秩父古生岩で、ほか滑石、安山岩がある。幅は小さいもので18～20cmのものがあるが、大部分は80cm以上となる。大きいもので、3.2mがある。上縁加工は施されていない。

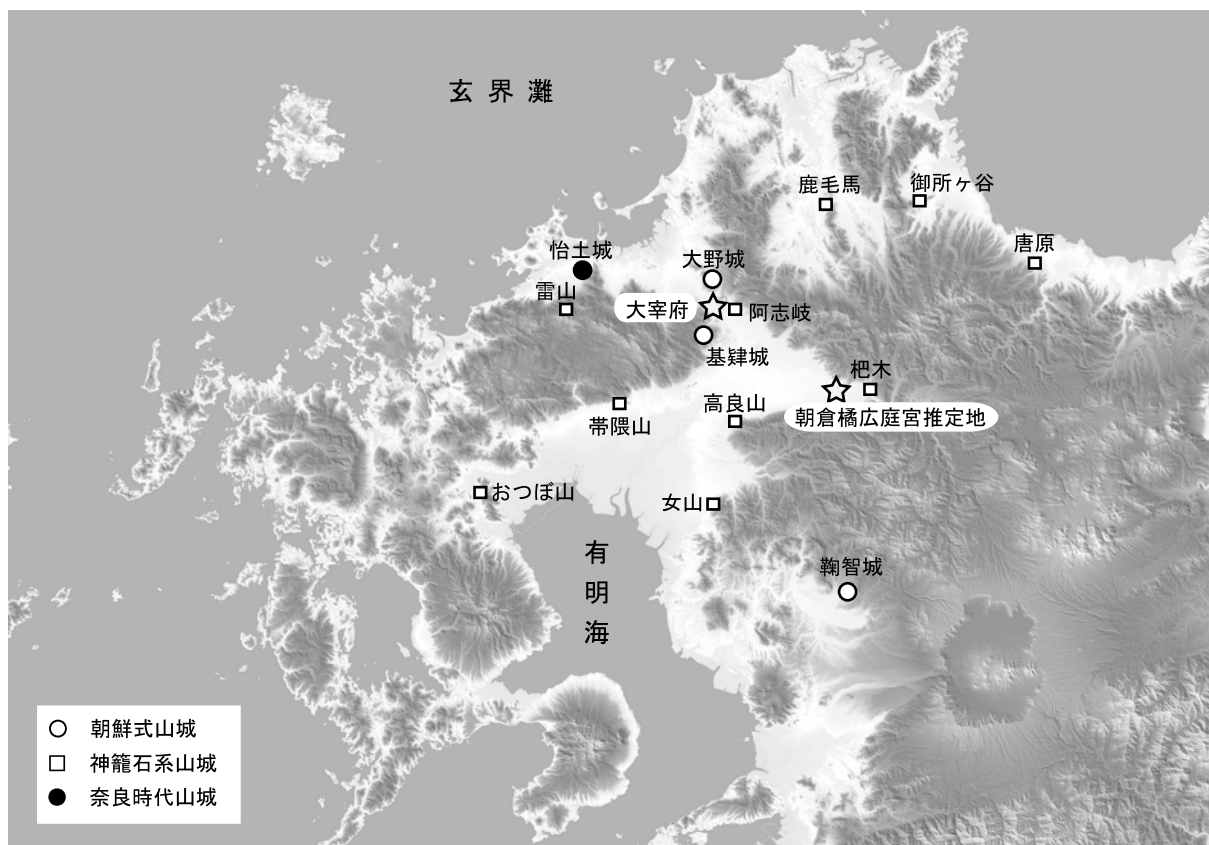


図5 北部九州における古代山城の分布（金田城を除く）

④女山城（史跡女山神籠石）

福岡県の南部、筑後平野の南端、標高286mの古僧都山の西斜面を中心に立地する古代山城である。総延長約3.0kmの外郭線は、標高203.6mの古塚山山頂を取り込み、西に向かって扇状に広がり、西側山裾を廻る。その外郭線上に、水門4箇所（粥餅谷、長谷、源吾谷、産女谷）、列石、土塁が確認されている。列石は火成岩で、平均幅70cmで最大のは1.65mを図る。上縁加工は施されている。6世紀後半の古墳を破壊して、外郭線が構築されており、それ以降の築城が明らかとなっている。

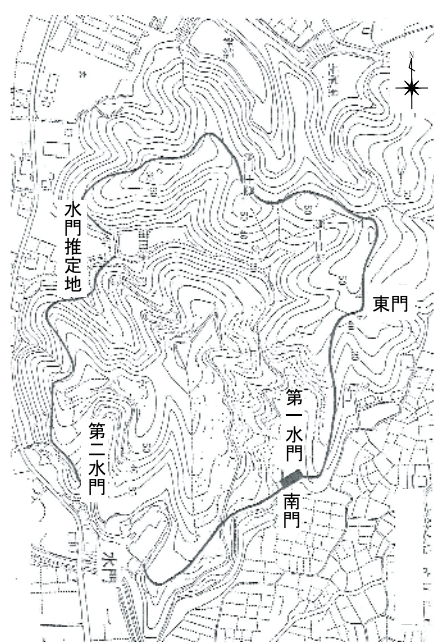
（2）各城の築造年代について

これら4城の築造年代を考えるにあたって、ある程度の比較検討が可能なものに、土塁がある。

土塁裾部に設置された列石については、いずれも切石加工を施している点で共通するが、おつぼ山城、帯隈山城、女山城の列石には列石前面上縁に段加工を施す点で相違する。特に、おつぼ山城が顕著である。この上縁加工は、切石上縁高を揃える意図が働いたものであり、手間をかける分、丁寧な造りといえる。高良山城はそれを省略した形といえよう。その石材の採取については、おつぼ山城で西方の杵島山から搬入された可能性が指摘されているものの、各城ともそれが立地する基盤層など、比較的採取の容易な石を使用する。

次に、土塁前面の柱穴列であるが、おつぼ山城、帯隈山城、女山城で確認されており、いずれも約3.0m幅を図る点で共通する。土塁幅についても、おつぼ山、帯隈山城で9.0mを基準としていたことが明らかとなっている。

以上の点から、少なくとも土塁については、各城共通する工法、考え方のもと構築されたものであり、同時期に築かれたものであることは明らかである。ただし、列石前面上縁の段加工の有無については、それが僅かな時期差なのか、地域差なのか検討を要する。出土遺物が皆無に等しく明確な年代はいえな



おつぼ山神籠石



高良山神籠石



帯隈山神籠石



女山神籠石

図6 有明海沿岸の古代山城（縮尺：約1/10,000）

いが、女山城で6世紀後半の古墳を壊して土塁が構築されているという遺構の先後関係と、おつぼ山城など土塁構築の基準尺に唐尺が採用されているとの指摘は注視すべきであろう。

3. 有明海における防衛網

有明海の防衛を考えるうえで、参考になる資料に『肥前国風土記』がある。『肥前国風土記』の成立は、郷里制下の行政区画に従っている点から、養老4年(720)から天平12年(740)と考えられており、城や烽など、成立当時の軍事面での記述があることから、有明海の防衛を考えるうえで、一つの手がかりとなる。

まず、城に関しては、冒頭に城1所の記述があるのみで、その1城は基肄城とされている。肥前国に位置するおつぼ山城、帯隈山城がそれぞれ所在するのは、肥前国11郡のうち杵島郡と佐嘉郡であるが、そのような記述は認められず、風土記の成立当時、既に廃絶されていたことを示すものといえよう。次に、烽であるが、肥前国11郡のうち有明海に面する郡は、佐嘉郡、杵島郡、藤津郡、高来郡の4郡であり、うち烽の記述が認められるのは、藤津郡に烽1、高来郡に烽5となり、肥前国の烽20のうち6が配備された形となる。特に高来郡は島原半島に位置し、四方が海に面する郡であることから、多くの烽を配備したものと思われる。

また、10世紀に成立した『延喜式』の駅路の記述などから、古代官道の復元が試みられているが、おつぼ山城、帯隈山城、高良山城、女山城の近くを官道が通ることが想定されている。大宰府からみていくと、肥前国については、帯隈山城は三根郡の切山駅から佐嘉郡の佐嘉駅へ向かう北側、おつぼ山城は杵島郡の杵島駅から藤津郡の塩田駅へ向かう東側に位置する。『肥前国風土記』成立当時においても、三根郡に駅1、佐嘉郡に駅1、杵島郡に駅1、藤津郡に駅1の記載があり、ほぼ踏襲しているものと思われる。筑後国においても、御井郡に所在する高良山城は御井駅の東側、山門郡に所在する女山城は葛野郡の葛野駅から山門郡の狩道駅へ向かう西側に位置する。いずれも官道を見通せる隣接した位置にあり、古代官道との密接な関連性がうかがえる。

以上のことから、7世紀代の有明海の防衛についても、古代官道に隣接した位置に城を配備し、烽、官道で情報伝達を可能なものにするなど、ネットワークを構築しながら防衛網を築いていた様相を垣間見ることができる。このほか、上津土塁跡(福岡県久留米市)の存在も注目される。7世紀代の官道と目される藤山道を遮断する位置に構築された土塁であり、主要幹線沿いにこうした遮断施設を設けていたことも想定される。

おわりに

鞠智城の役割の一つとして挙げられる「有明海の侵入敵の確認と伝達」については、鞠智城が有明海を見通することができず、最も近い女山城も見通せない位置にあることから、現時点で、鞠智城がそうした役割を担ったとは考えにくいものである。

それよりもむしろ、熊本県南部あるいは中央部の有明海あるいは八代海から上陸し陸路で北上してくる敵を迎え撃つには格好の位置にあり、防衛面でそうした役割が主にあったことが指摘できる。現に、鞠智城の南には、熊本県南関町から菊池郡家に比定される西寺遺跡を經由し、その南で阿蘇方面、熊本市方面に分岐する、『延喜式』以前の「車路」地名から復元した初期官道が通ることが想定されている。

有明海の防衛網からみて、鞠智城は有明海沿岸部の各城とは少し異質な存在といえ、期を同じくした防衛構想のもと構築されたものとはいえないのではなかろうか。有明海沿岸部の各城の防衛主体、築造年代をどこに求めるのか、それを究明していくことは鞠智城の役割・性格を考えるうえでも大きな課題である。

参考・引用文献

- 小澤太郎2002「北部九州における神籠石型山城の配置」『究班』Ⅱ
- 小澤太郎2014「古代山城・高良山神籠石を考える」『鞠智城とその時代2－平成14～21年度「館長講座」の記録－』熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館
- 小田富士雄編1983『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書第10巻 名著出版
- 小田富士雄2016「大宰府都城の形成と東アジア」『季刊考古学』第136号 雄山閣
- 小野正敏、佐藤信、館野和己、田辺征夫編2007『歴史考古学大辞典』吉川弘文館
- 亀田修一2016「神籠石系山城と朝鮮半島の山城」『季刊考古学』第136号 雄山閣
- 鑑山 猛ほか1965『おつば山神籠石』佐賀県武雄市史跡調査報告
- 木村龍生2016「土器の様相からみた古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城－発表資料集－』古代山城に関する研究会資料集
- 熊本県教育委員会2012『鞠智城跡Ⅱ～鞠智城跡第8～32次調査報告～』熊本県文化財調査報告 第276集
- 熊本県教育委員会2015『史跡鞠智城跡保存管理計画（増補版）』
- 久留米市教育委員会1989『筑後国府跡・国分寺跡～昭和63年度発掘調査概報～』久留米市文化財調査報告書第59集
- 高瀬哲郎2007「帯隈山神籠石」温故創生館館長講座資料
- 長 洋一1998「防人をめぐる問題」『都府楼』25号 財団法人古都大宰府保存会
- 鶴嶋俊彦1997「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』7 古代交通研究会
- 日野尚志2011「古代の官道」『鞠智城とその時代－平成14～21年度「館長講座」の記録－』熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館
- 吉野 裕訳1969『風土記』東洋文庫145 平凡社

挿図出典

- 図1 熊本県教育委員会2015より作成
- 図2 熊本県教育委員会2012より転載
- 図3 木村龍生2016より転載
- 図4 熊本県教育委員会2015より作成
- 図5 熊本県教育委員会2012より作成
- 図6 高瀬哲郎2007、小澤太郎2014、小田富士雄編1983より作成

「古代山城からの眺め」と「古代山城跡からの眺め」は異なる。

現在、古代山城跡の大部分は山林に没し、わずかに開けた整備後の土塁、あるいは木々の隙間から城外を望むしかない。古代山城が築かれた7世紀には、視界を遮る樹木は刈り払われ、地形的制約を受けつつも、大半の地点で眺望がきいたに違いない。そして、当然ながら眼下の平野や湾の形、田畑や村々、人々が行き交う道、停泊する船の姿も、古代と現代では大きくことなる。

古代山城の役割についての議論はつきないが、「古代山城からの眺め」への理解を深めることが研究の着実な歩みとなるだろう。

(小嶋 篤)



鬼ノ城跡からの南方の眺め



金田城跡からの東方の眺め



屋島城跡からの西方の眺め

第5章

瀬戸内海沿岸における古代山城の築城年代

南 健太郎

はじめに

東アジア規模の戦乱である白村江の戦いにおける敗戦（663年）後の状況について、『日本書紀』・『続日本紀』には日本列島西半の慌ただしい動向が記載されている。664年の水城の構築と対馬・壱岐・筑紫国などへの防・烽の設置、665年の長門城・大野城・基肄城の築城、667年の高安城・屋嶋城・金田城の築城、というように矢継ぎ早に大掛かりな土木工事や構築物の建造に踏み切っている。665年以降に築城されたと考えられる城は古代山城と呼ばれており、このような7世紀以降の国家的な動態を探る上で重要な位置を占めている。

古代山城は28ヶ所にその存在が知られている。これらは『日本書紀』『続日本紀』に記載のある「朝鮮式山城」と、記載のない「神籠石系山城」に分けられている。古代山城の分布は主に北部九州と瀬戸内海沿岸に分けられる。瀬戸内海は関門海峡と都を結ぶ大動脈で、物流や交通、軍事などを含めた対外関係上、重要なルートであったことは疑いない。このような地理的な背景を一つの条件として、上記の長門城や屋嶋城のような古代山城が築かれている。瀬戸内海沿岸で所在が明らかなのは朝鮮式山城1ヶ所（屋嶋城）、神籠石系山城6ヶ所（播磨城山城、鬼城山城、大廻小廻山城、石城山城、讃岐城山城、永納山城）で、この他に文献に名前があるが所在不明の長門城、茨城、常城がある（図1）。朝鮮式山城である屋嶋城は667年に築くという記載があるが、それ以外については築城に関する情報を文献から得ることができない。築城年代を明らかにすることは、古代山城築城の契機、背景、そして歴史的な意義を考える上で欠かすことができない。このような視点から本論では瀬戸内海沿岸に所在する古代山城の築城年代を検討し、当地域における古代山城築城が歴史的にどのように評価できるかについて考えていきたい。



図1 瀬戸内海沿岸の古代山城

1. 瀬戸内海沿岸の古代山城

築城年代の検討にはいる前に、瀬戸内海沿岸の古代山城の概要をまとめておく（第4回古代山城サミット高松大会実行委員会編2013を参照）。

播磨城山城 兵庫県たつの市に位置する。最高所標高は458m、城郭線標高は不明。城門1ヶ所、石塁、礎石建物が確認されており、門礎石（唐居敷）もみられる。

大廻小廻山城 岡山県岡山市に位置する。最高標高は198m、城郭線標高は85～190m。城門3ヶ所、水門3ヶ所、土塁が確認されている。

鬼城山城 岡山県総社市に位置する。最高標高403m、城郭線標高290～385m。城門4ヶ所、水門6ヶ所、角楼、土塁、石塁、礎石建物などが確認されている。門礎石（唐居敷）もみられる。

屋嶋城 香川県高松市に位置する。『日本書紀』に667年の築城とある。最高標高292m、城郭線標高260～280m。城門1ヶ所、水門2ヶ所、角楼状施設、堀切、土塁、石塁が確認されている。

讃岐城山城 香川県坂出市に位置する。最高標高462m、城郭線標高260～370m。城門1ヶ所、水門1ヶ所、土塁、石塁が確認されている。門礎石（唐居敷）もみられる。

永納山城 愛媛県西条市に位置する。最高標高132.4m、城郭線標高35～110m。城門1ヶ所以上、水門1ヶ所以上、土塁、石塁、鍛冶路が確認されている。

石城山城 山口県光市に位置する。最高標高359.7m、城郭線標高268～342m。城門2ヶ所、水門4ヶ所、土塁、石塁が確認されている。

これらの他にも文献に長門城、常城、茨城が登場するが、所在地ははっきりわかっていない。**長門城**は『日本書紀』に665年築城とあり、大野城、基肄城とともに最古段階の古代山城として重要である。山口県下関市周辺が候補地として挙げられている。**常城・茨城**は『続日本紀』でそれぞれ備後国安那郡、葦田郡とされており、719年に廃城したと記されている。常城は広島県府中市、茨城は広島県福山市に所在するという指摘がある（広島県立府中高等学校地歴部編1968）。長門城、常城、茨城は古代山城の存在を示す明確な遺構・遺物がみつかっておらず、今後の調査の進展が期待される。

2. これまでの築城年代研究

（1）築城年代に関する議論

朝鮮式山城の築城年代については『日本書紀』の記載に定点が求められるが、問題は神籠石系山城である。1970年代までの議論は出宮徳尚や葛原克人の論考にまとめられている（出宮1978、葛原1981）。ここでは5世紀代（坪井1961）、6世紀（李1977）、6世紀末～7世紀前半（西川1977）、天武朝期以降（686年～）（高橋1976）、6世紀末以前（出宮1978）、6世紀最末期～7世紀中葉（葛原1981）という諸説が挙げられており、年代の根拠も様々であった。この時期はまだ発掘調査がおこなわれた古代山城が少なく、基礎資料が揃っていない段階であり、遺構・遺物の型式学的な検討などが困難であったことは否めない。その中で古墳時代後期の遺構との比較、朝鮮半島との比較、文献資料、特に大宰や屯倉、記載方法に着目して築城年代に迫る方法論は特筆される。重要なのは神籠石系山城と朝鮮式山城の時間的な前後関係である。それによって古代山城築城の背景は大きく左右される。上記の論考ではそのほとんどが神籠石系山城の築城を朝鮮式山城よりも前、つまり白村江の戦いによる敗戦以前に位置づけられている。葛原は城門の変遷や塁線の巡り方に着目し、さらに7世紀初頭から中葉にかけての緊迫した東アジア情勢をも根拠として神籠石系山城から朝鮮式山城へという過程を描き出している（葛原1981・1994）。

1980年代以降、朝鮮式山城、神籠石系山城の両者で発掘調査が進展すると、遺構・遺物から築城年代にアプローチすることが可能となってきた。出土遺物の面からは、神籠石系山城出土土器はいずれも朝鮮式山城よりも古くなるものが確認されないということが次第に明らかになってきた。古代山城を

構成する各要素の検討をおこなった向井一雄は神籠石系山城を朝鮮式山城よりも新しく位置づけた（向井1991）。このような方向性は1990年前後に発表された各氏の論考でも指摘されている（山上1988、乗岡1992など）。また城門の門礎となる唐居敷の変遷が明らかにされるようになり、古代山城以外の遺跡における年代観を参照できるようになってきたことも築城年代を考える上で重要な転換点となった（向井1999）。

近年は築城年代に関する議論が活発化している。亀田修一は神籠石系山城である岡山県総社市鬼城山城と朝鮮式山城である金田城・屋嶋城の構造的特徴が極めて類似することを指摘し、朝鮮半島の古代山城との比較からも、築城年代が金田城、屋嶋城に近接することを指摘している（亀田2009・2012）。稲田孝司は古代山城を石の加工方法・形態・構築方法から4系統に分け、唐居敷の型式変化や城郭線の幾何学的企画性の変化から編年をおこなっている。稲田の検討でも神籠石系山城は朝鮮式山城よりも後出するという結果が得られている（稲田2012）。また小澤佳憲は石塁や土塁の築造技術や城郭線の形状から朝鮮式山城と瀬戸内海型神籠石式山城が、瀬戸内海型神籠石式山城と九州型神籠石式山城に近い関係にあるとした（小澤2012）。また唐居敷や軸摺金具の検討からは朝鮮式山城を古く置き、神籠石系山城が後出することを指摘している（小澤2014・2016）。

（2）築城年代研究の課題

ここまで築城年代研究の推移をみてきたが、朝鮮式山城が古く、神籠石系山城が新しいという変遷観については、概ね認められるのではないと思われる。出土遺物の検討や、完成・未完成の議論からこのことは肯定的に捉えられている（亀田2014・2016、木村2016）。ただし築城年代についての議論の中で意見が分かれているのは、神籠石系山城の築城がどこまでさかのぼるのかという点である。例えば上述の鬼城山城は神籠石系山城ではあるものの朝鮮式山城である金田城・屋嶋城との共通性が高く、福岡県行橋市御所ヶ谷城も神籠石系山城ではあるが出土遺物には朝鮮式山城の築城時期と大差ないものがみられる。そもそも神籠石系山城の中で前後関係がないのかどうかという検討もまだ十分になされていないように思われる。

また近年は出土遺物に基づいて築城時期を考えようとする試みがなされている。出土遺物から築城年代を考えるのは考古学的な検討の中心をなすものではあるが、この場合どのような遺物が築城年代を示すのかをまず考える必要がある。城門や水門・土塁といった城郭線を構成する遺構群と、城内での活動痕跡を示す遺構群の間に、多少の時期差がある可能性も考えられるであろうし、古代山城が築城以降性格を変えながらいろいろな施設を有するようになることは鞠智城や鬼城山城などでも確認されている。大野城のように城門の改修が確認されることもある。出土遺物からの検討をおこなう際には上記の点を明確にした議論が望まれる。出土遺物からの検討については自然科学的な分析も無視できない。特に近年は古代山城出土木材の年代測定もおこなわれており、築城年代を考える上で参考になる。以上のことを念頭に置き、古代山城の築城年代について考えていく。

3. 瀬戸内海沿岸における古代山城の築城年代

（1）朝鮮式山城

屋嶋城

瀬戸内海沿岸で唯一の位置の明らかな朝鮮式山城である。高安城、金田城と同様に667年に築城されたことが『日本書紀』に記されている。近年の発掘調査で遺構・遺物の様相が明らかになってきている。特に注目されるのは南東に向かって開かれている城門である（図2）。門道が城外の地面よりも高い位置に設けられる懸門構造で、門道は階段式、門道床面には排水施設が作られている。懸門構造の城門は屋嶋城の他に大野城、金田城、鬼城山城で確認されており、構造的な類似性が指摘されている（亀田2009・

2012、南2015・2016)。出土遺物については城門の調査において地山直上から7世紀後半の須恵器が出土しており（高松市教育委員会編2008・2016）、報告書では年代の限定に慎重だが、亀田は7世紀中葉としている（亀田2016）。いずれにしても667年の築城記事との矛盾はない。

城門遺構整備事業では城門床面で柱穴が確認され、門道上部に構造物が作られていたことが明らかとなった（高松市教育委員会編2016）。柱穴は4つ検出されており（6つ検出されているが、2つは除外されている）、掘形はいずれも丸みの強い隅丸方形である。注目すべきは柱の形態であり、N-②柱は40cm×32cmの角柱であったとされている。城門遺構における角柱の使用が確認された古代山城としては鬼城山城が挙げられる。鬼城山城では西門・南門がすべて角柱で、北門は親柱のみ角柱、東門はすべて円柱となる（図4）。角柱を用いることは古代の建築で特異な存在であることが指摘されており（稲田2012）、このことは角柱の使用という面でも屋嶋城と鬼城山城の親縁性が垣間見られるということを示している。

以上のように屋嶋城の築城年代は、発掘調査の成果からも667年とみてよいと考えられる。

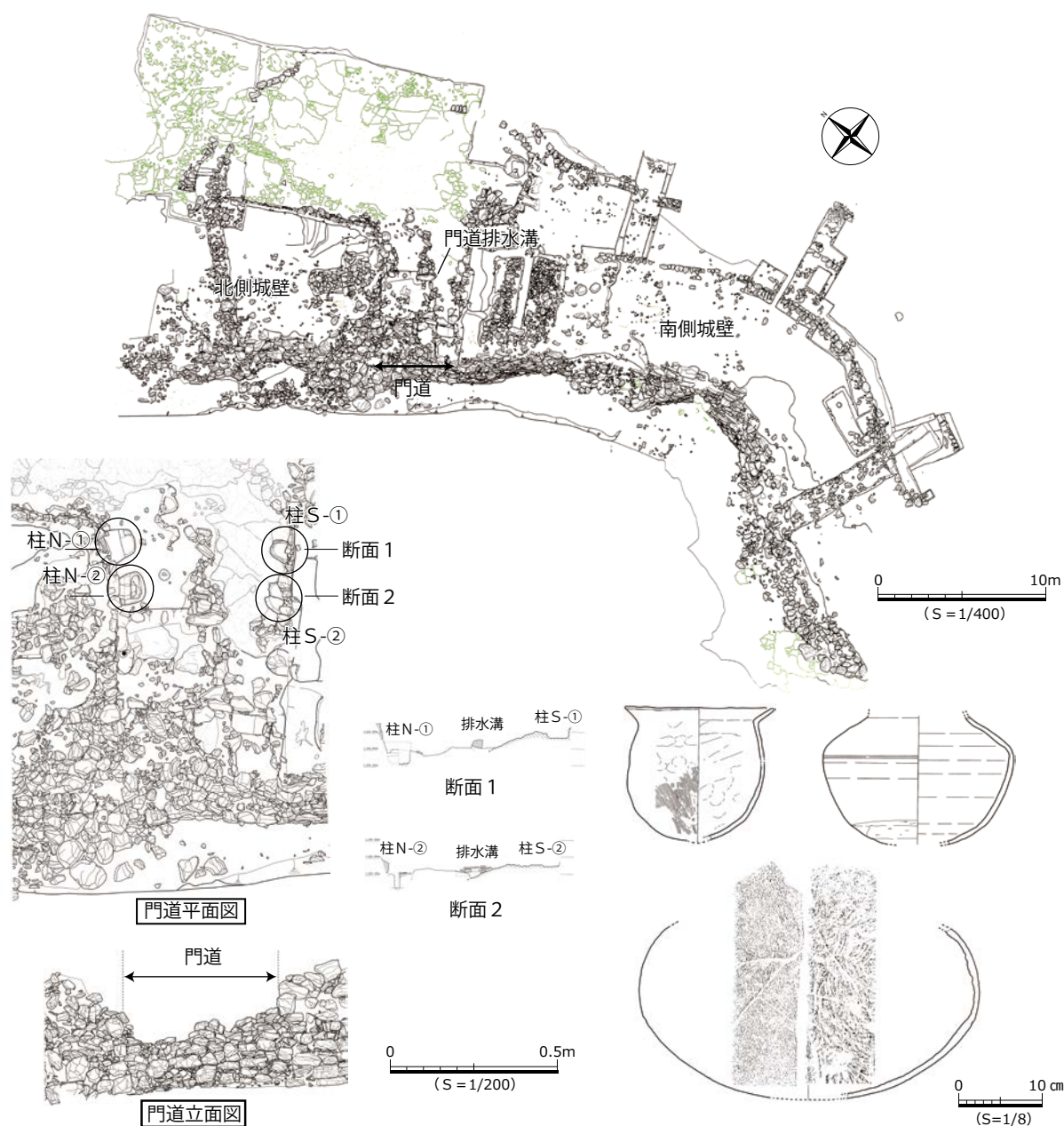


図2 屋嶋城の城門構造と城門出土遺物

(2) 神籠石系山城

①大廻小廻山城

城郭線の発掘調査で土塁の構造が明らかにされており、水門遺構も確認されている。遺物は7世紀後半から8世紀前半のものが出土している(図3)が、築城年代を決定づける状況での出土ではない。少なくとも7世紀代の築城と考えられる(岡山市教育委員会編1989、村上・乗岡1999)が、遺物からこれ以上絞り込むことは難しい。稲田の編年によると、城郭線を構成する列石外側の堰板柱穴の欠如から、鬼城山城などよりも後出する第3段階に置かれている(稲田2012)。筆者は水門の開口部の構造と底石の使用状況が朝鮮式山城との共通性が強い鬼城山城よりも讃岐城山城との共通性が窺われることを指摘した(南2015・2016)。城門が未確認ではあるが、城郭線は全周していることから完成していた可能性が考えられ、朝鮮式山城の多くが完成、神籠石系山城が未完成のことが多いという現状からは、前者との関係が深いように思われる。なお讃岐城山城については列石の欠如や「車道」の構造から朝鮮式山城との近い関係性が指摘されている(村上・乗岡1999：P156)。

大廻小廻山城については築城時期を明確にすることは困難であるが、朝鮮式山城と類似する要素を持ち合わせている点からすると、そう大きな時期差を考慮する必要はないのかもしれない。

②鬼城山城

城郭線と城内の発掘調査がおこなわれており、城門や水門、高石垣の構造、城内施設などが明らかにされている。すでに述べたが、城門の構造は朝鮮式山城との類似性がみられる(図4)。築城年代に関しては朝鮮式山城築城以前(出宮1992・葛原1994・2002・2005など)、朝鮮式山城とほぼ同時期(乗岡1992、亀田2009・2012、平井典2016など)、朝鮮式山城築城以後の諸説があり、朝鮮式山城築城以後は天武朝(672年)以降(稲田2012)と7世紀後葉以降(小澤2014・2016)という考えが提示されている。特徴としては城門などの構造からは朝鮮式山城との類似性が指摘され、唐居敷に着目した場合は新しく位置づけられるという傾向にある。土器については少数の7世紀第3四半期のものと、まとまった量の7世紀第4四半期末前後に位置づけられる資料が確認されている(図5：岡山県教育委員会編2013)。後者の土器をもって築城年代とする立場もある(武田2016)が、7世紀第3四半期の資料(葛原2005、平井泰2010)をどのように評価するかが問題である。7世紀第4四半期末前後の土器溜まり1は上方からまとめて廃棄された状況と報告されており(岡山県教育委員会編2013)、築城年代を示す出土状態とは言い難く、築城年代は少なくともそれ以前と考えられる。稲田の検討では鬼城山城にみられる角柱親柱刳込唐居敷の年代は大野城築城以降、藤原宮西面中門建設以前、つまり665年から694年の間でおさまることが指摘されている(稲田2012：P60)。唐居敷については小澤は大野城よりも新しく位置づけ(小澤2014)、大野城の改築時に用いられた技術(大野城北側城門群：7世紀後葉～末以降)との関係の中で理解している(小澤2016)。向井は出土した土器から7世紀第4四半期としている(向井2017)。

鬼城山城では城門の調査の際に木材が出土しており、これについては炭素14年代測定がおこなわれ

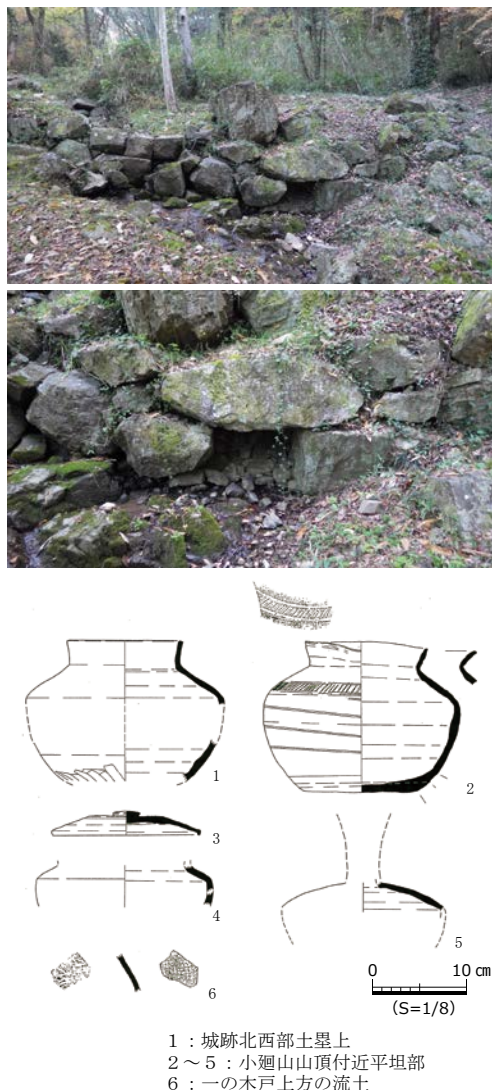


図3 大廻小廻山城一の木戸と出土遺物

ている（今村他2007）。注目すべきは西門から続く高石垣の外面に構築された第0水門出土加工木の年代が619年～668年（95.2%）、617～660年（94.8%）を示している点で、少なくとも伐採年代は680年を下らないとされている。これらは西門に使用された柱などの材料の一部と考えられている。西門では築城に関する明確な遺物は出土しておらず、これまでに確認されている最も古い型式の土器と炭素14年代測定の結果を参考にするならば、鬼城山城の築城時期を7世紀第4四半期以降とするのには躊躇せざ

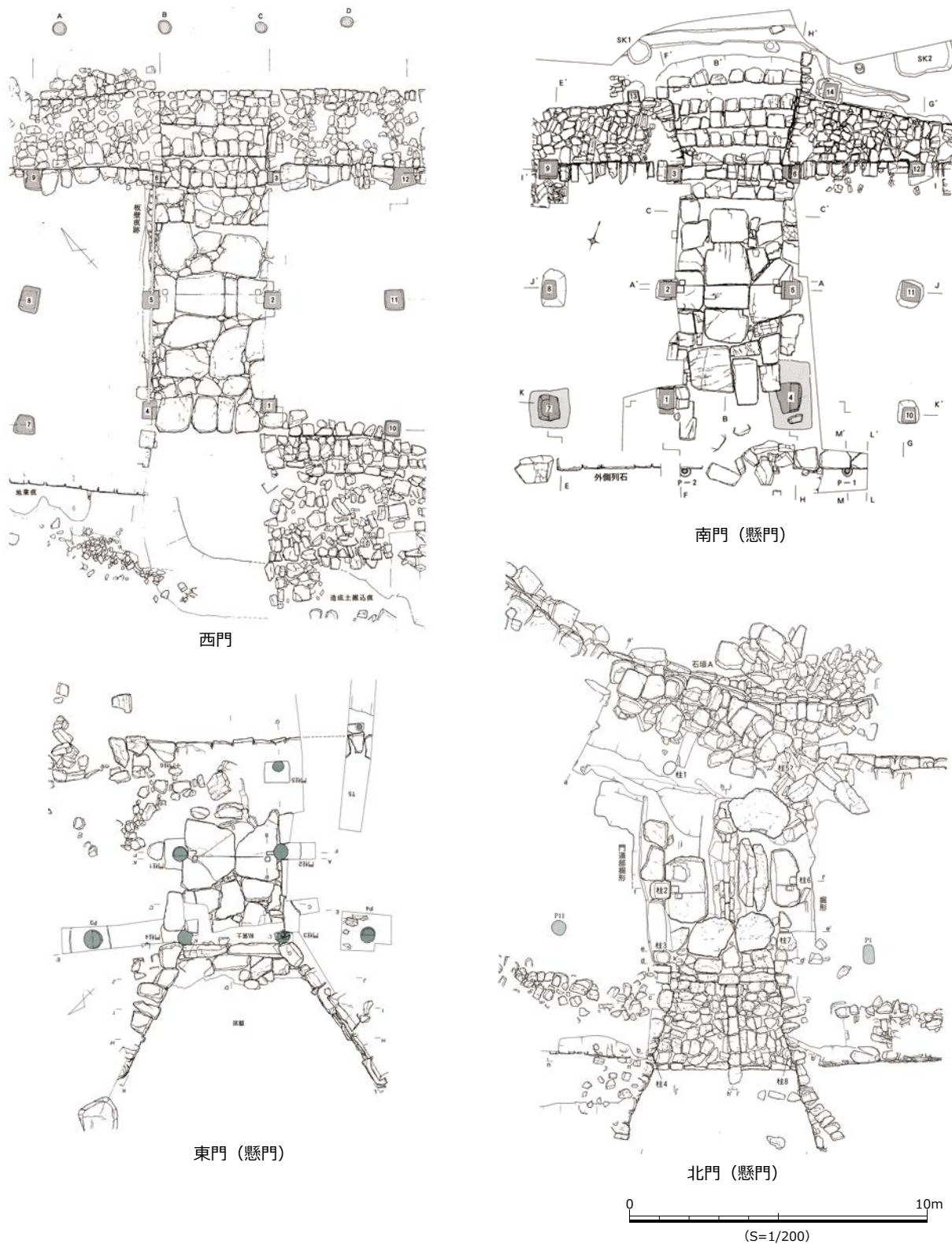


図4 鬼城山城の城門構造（上が城外側、下方向が城内側）

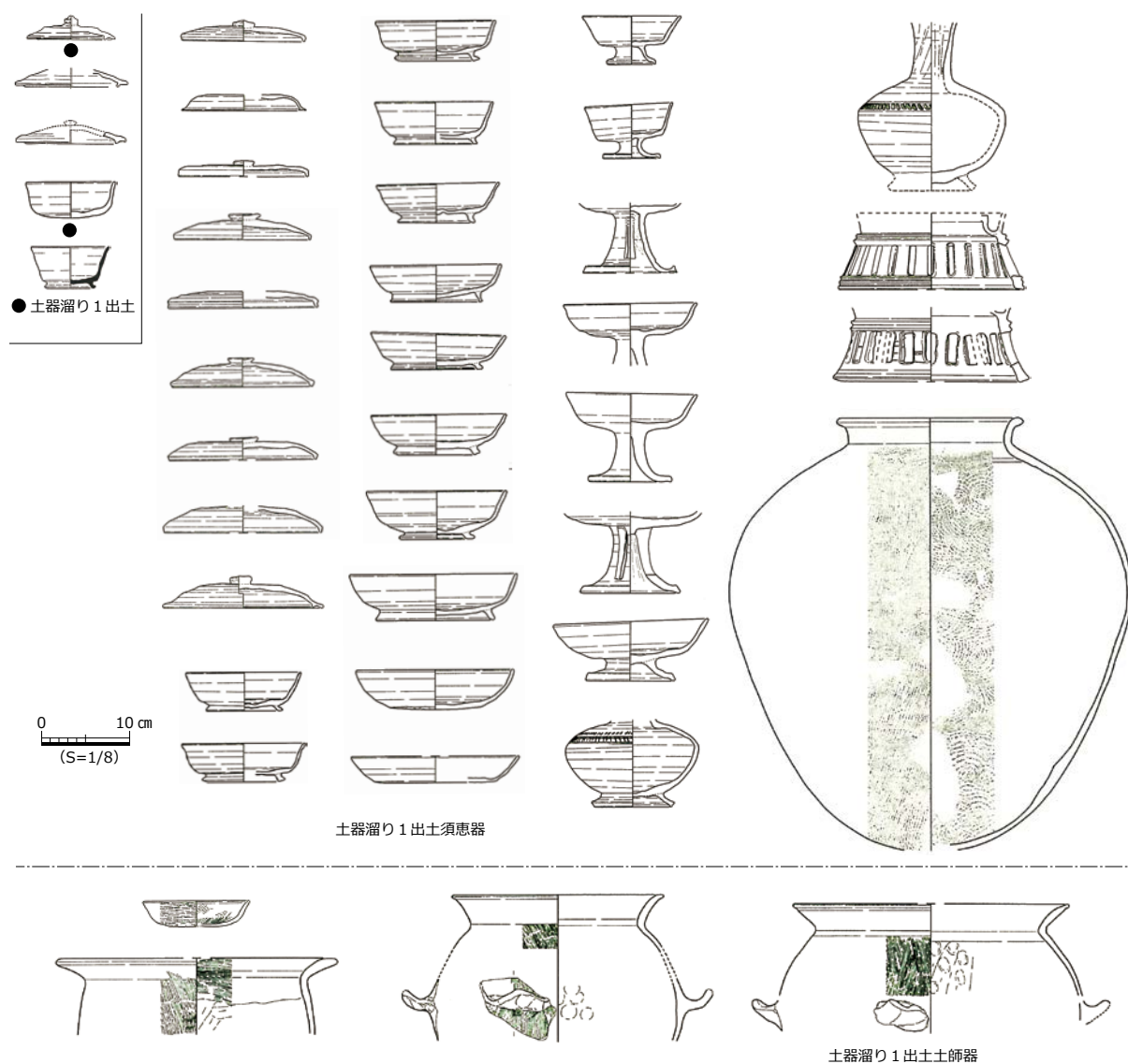


図5 鬼城山城出土土器

るを得ない。

城門構造、出土土器、炭素14年代測定から考えると、鬼城山城の築城年代については7世紀第3四半期とみる見解を支持したい。屋嶋城で確認された角柱の使用は鬼城山城との築城技術の共有をさらに補強するものとする。その背景には両城の築城に高句麗からの技術導入があった可能性がある（葛原2005、亀田2009、稲田2012）。

鬼城山城の築城年代をこのように考えると、唐居敷や軸摺金具の年代観との少なからぬ齟齬が生じる。小澤は鬼城山城の唐居敷を大野城北側城門群の年代観から7世紀後葉～末に位置づけ、両者の軸摺穴の系譜が統一新羅成立（676年）以後に求められることを指摘している（小澤2016）。出土遺物や炭素14年代測定結果からは鬼城山城のほうが先行する可能性を否定することはできず、今後の唐居敷や軸摺金具の資料増加を待ちたい。

③石城山城

これまでの研究では築城年代についての言及は積極的にはおこなわれてこなかったが、その存在は瀬戸内海沿岸の諸城と比べるとやや異質といえる。神籠石系山城は使用石材の加工方法によって細分され



図6 石城山城北水門の構造（上段：A面オルソ画像、下段：通水施設とその内部）

ており、割石を使用する瀬戸内海沿岸型、切石を使用する九州型とされる場合が多かった。石城山城は列石に切石を使用するが、水門には割石が使用されている。このため石材の加工方法からの分類では位置づけが難しく、九州型と瀬戸内海型という分け方で築城年代を議論する場合はなおさら扱いにくい部分が生じる。

出土遺物には須恵器や土師器があるが、築城年代を示すものは抽出できない。北門に唐居敷は存在するが軸摺穴が作られていない。城郭線の土塁・列石などが確認されていない箇所もあり、未完成であったと考えられている（亀田2014）。城郭線の折れと直線が明確であることから、稲田は第2段階（672年ごろ以降）においている。

築城年代について考える材料は乏しいが、ここでは水門の構造に着目したい。水門は4ヶ所で確認されているが、排水口の構造が明瞭なのは北水門と東水門である。北水門は排水口を有する面（ここではA面と呼称する：図6）と、これに対して鈍角に展開する面（B面）がある。B面の石積工法と土塁中の石材使用法からは朝鮮式山城との距離が近いとされる「瀬戸内海型」に分類されている（小澤2012）。A面は排水口を地面に接する位置に設けている。全体的な石積み方法は、排水口付近よりも下方に大型の石材を用い、上方は比較的小型の石材が使用される構造をとる。東水門は排水口の有する面の両側が鈍角に展開する石積となっている。排水口の位置と石積の様相は北水門と共通しており、地面に接する位置に排水口があり、石積のサイズは排水口よりも下方が大きく、上方が小さくなる。このような点を神籠石系山城間で比較すると、排水口の設置個所は大廻小廻山城や後述の讃岐城山城と共通するが、これらの山城は排水口の上方にも大型の石材を用いるという点で違いがみられる。このような違いは排水施設の下部構造にもあらわれている。石城山神籠石では排水施設の底面に板石が敷かれており、これらの底石を挟むように側石が配置され、天井石が設置されている。このような底石を有する構造は鬼城山城の排水施設にもみられるものである。また大野城屯水土塁地区水門や基肄城の大水門も底石を有する構造をなしており、鬼城山城とともに朝鮮式山城との関連性と評価しておきたい。

④ 讃岐城山城

石城山城と同様に築城年代を考える資料が乏しい。唐居敷は方立用の穴と軸摺穴が彫られていないものや、方形削込も途中までしか彫られていないものがあることから、城門は完成していなかったと考えられている。出土遺物は7世紀第4四半期～8世紀第1四半期の土器がまとまってみられる。稲田は石

城山城と併行する第2段階にしている。大廻小廻山城との水門構造の共通性はすでに述べたところである(図7)。

讃岐城山城の周辺では讃岐国府下層遺跡で7世紀中頃に突如集落が現れ、7世紀末まで継続することが指摘されている(渡邊2013)。古代山城の管理監督署的な機能を有した遺跡と評価されており、この期間において築城された可能性が考えられる。

⑤永納山城

城郭線と城内の発掘調査がおこなわれている。城内では鍛冶関連遺構・遺物が確認されている。出土遺物の中には畿内産土師器があり、鍛冶関連遺構・遺物とのセット関係は大野城、鞠智城、鬼城山城でもみられ、これらはいずれも完成した山城としてまとめられる可能性が指摘されている。出土土器には7世紀第2～3四半期のものも含まれており、築城年代が7世紀第3四半期以前まで遡る可能性もある(木村2016:図8)。

このような出土遺物とともに注目されるのが、炭素14年代測定の結果である。測定資料は鍛冶関連遺構の炭置き場で採取された木炭で、637年～666年(68.2%)、607年～675年(95.4%)という結果が得られている(西条市教育委員会編2012)。鍛冶遺構の評価にもよるが、生産された鉄器が築城に関するものであったと考えるならば、築城時期を7世紀第3四半期とすることも可能だろう。今後の測定数の増加が望まれる。

(3) 小結

ここまで検討してきた築城年代を整理してみよう。

- ・『日本書紀』に築城の記載がある屋嶋城は667年の築城。
- ・667年築城と考えられる屋嶋城、金田城と城門構造が共通する鬼城山城は、出土土器や炭素14年代測定の結果から7世紀第3四半期の築城。屋嶋城・金田城と近接した年代。
- ・朝鮮式山城や鬼城山城と同様な排水施設の床面構造、石積の特徴をもつ石城山城は、鬼城山城に近い築城年代を考えることが可能。

・大廻小廻山城と讃岐城山城は石積の特徴が共通。排水施設に底石が用いられておらず、出土土器も7世紀第4四半期以降で、鬼城山城よりも時期が下る可能性が高い。

- ・永納山城は出土土器と炭素14年代測定の結果から7世紀第3四半期の築城の可能性が考えられる。

これまでの研究で提示されてきた編年と大きく異なるのは石城山城と永納山城を7世紀第3四半期に近い時期にしているところである。石城山城は列石に切石を使用している点で時期が下るとも考えられるが、水門などでは割石が使用されており、切石主体である北部九州の神籠石系山城の先駆をなして

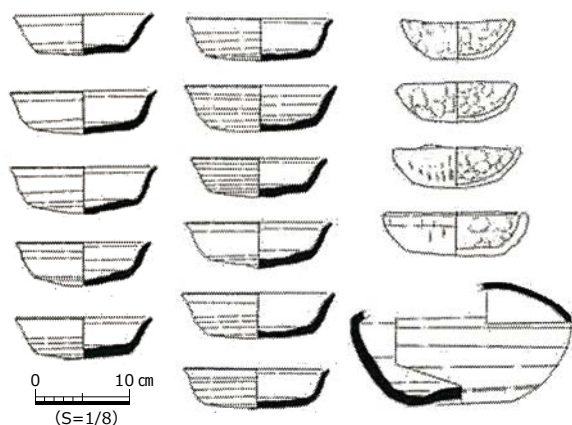


図7 讃岐城山城の水門構造と出土遺物

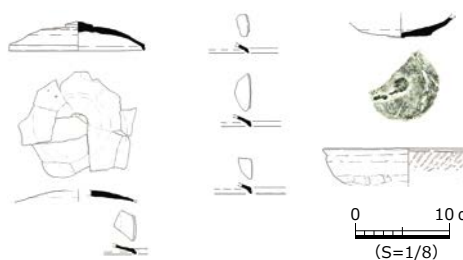


図8 永納山城出土の土器

いるとも考えられる。また稲田は永納山城を古代山城築城の最も新しい段階である第3段階としている。今回は出土遺物と炭素14年代測定の結果から古くおいたが、今後遺構の構造とともにさらに詳細な検討をおこなう必要がある。

このように未確定要素を残すが、瀬戸内海沿岸の神籠石系山城の築城年代は7世紀第4四半期までにおさまる可能性が考えられる。

4. 瀬戸内海沿岸における古代山城築城の意義

古代山城の築城に関しては、これまで白村江での敗戦後の対外的緊張関係に対する軍事的な側面にその要因を求める立場が一般的であった。築城に関しては百済官人の関与が文献から知られ、唐・新羅の軍勢に対処する施設と考えられてきたのである。しかし近年は白村江敗戦前後における東アジア情勢の再検討が活発になされ、上記の古代山城築城の要因も再検討が必要となってきた。鈴木靖民や小田富士夫が指摘しているように、663年の敗戦後、664年にはすでに唐側から使者が送られており、水城や大野城などの築城期にはすでに大陸・朝鮮半島からの襲来危機が回避されていたことがすでに確認されていたと考えられている（鈴木2011、小田2012・2015 a・2015 b）。その上で小田は築城の背景を、律令国家確立を目指した大宰府都城の外郭防衛網の形成（667年以前）と、それ以後の国境最前線から畿内に至る連絡網の形成に求めている（小田2015 a）。また百済滅亡後に唐によって設置された熊津都督府と古代山城の関係性を検討した近藤浩一は、軍事拠点としての性格よりも、倭国と朝鮮半島間の旧来からのネットワークを示すランドマークとしての機能や、対外交渉、交易拠点といった性格があったことを指摘している（近藤2015）。古代山城築城の背景の一つに、「見せること」があったことも指摘されており（向井2010・2017）、未完成の山城（亀田2014）もこのような視点でみると意義深い。

ここで本論で検討してきた古代山城の築城年代から、築城の背景と意義を考えてみたい。まず7世紀第3四半期の築城とした屋嶋城、鬼城山城、石城山城、永納山城について667年を中心とした時期の築城と考えた場合、その位置は非常に興味深い配置となっている（図9）。上記4城は瀬戸内海沿岸に位置してはいるが、実際はその立地がやや異なる。屋嶋城・永納山城は瀬戸内海が眼前に迫る位置にあるが、鬼城山城・石城山城は沿岸部から平野部を挟んだ少し奥まったところに築かれている。瀬戸内海を行き来する船団に対する軍事的な機能を考えた場合、鬼城山城や石城山城はその意にそぐわない面が垣間見られる。瀬戸内海の軍備を固めるという視点でみると、屋嶋城、永納山城も瀬戸内海海峡が最も狭まる重要な位置に近いが、屋嶋城はそれよりもやや東側の屋島にあり、永納山城は高縄半島の東面に築かれている。

このような地勢は関門海峡を通過して都に至るルートを防御するに適した位置とは言い難く、軍事的役割以外の要因を考える必要があるだろう。現段階でその要因を限定するのは難しいが、注目したのは瀬

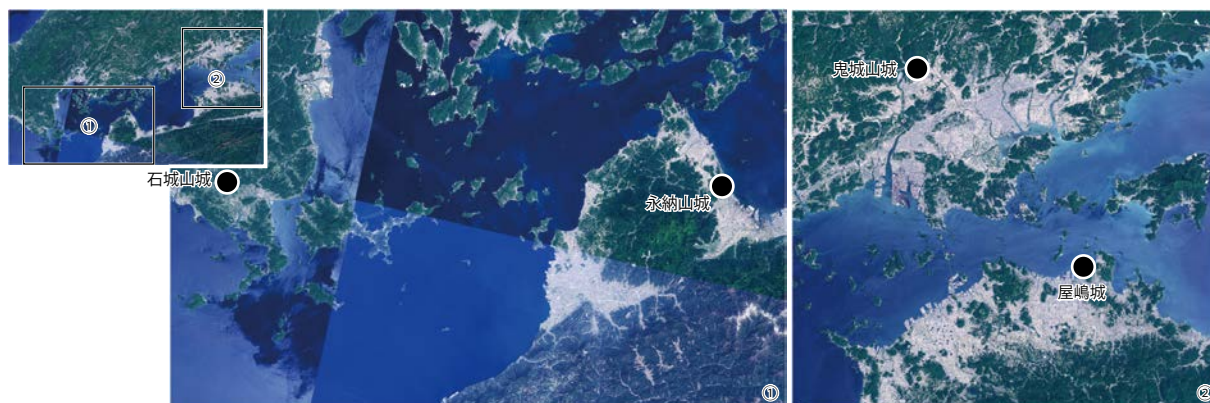


図9 屋嶋城、鬼城山城、石城山城、永納山城の位置

戸内海沿岸の多くの山城が築城から廃城までの期間が非常に短いという点である。鬼城山城では8世紀前半を境に備蓄施設へと様相を変えることが指摘されており、7世紀第4四半期の築城と考えている大廻小廻山城と讃岐城山城を含めて、この時期にほとんどの古代山城はその役割を終えている。存続期間は長くても50年程度だろう。多大な労力や財力を投入して築城されたにも関わらず、極めて短い期間で必要とされなくなったとみられる。これは言い換えると7世紀第3四半期（667年以降）から8世紀前半の短期間において必要とされていたとすることができるだろう。この間の国際情勢は上述したが、国内では667年の近江宮への遷都、671年の天智天皇の崩御、672年の壬申の乱とその後の天武天皇の即位、飛鳥浄御原宮への遷都と、目まぐるしく政局が変化していく。また679年の難波羅城の構築、そして藤原京（694年）を経て、大宝律令の制定（701年）平城京への遷都（710年）に至る。また7世紀末～8世紀初頭には西都大宰府が機能を開始している。古代山城が機能した時期はこの期間にあたっている。屋嶋城、鬼城山城、石城山城、永納山城は天智期の対外・対内に向けたものであり、大廻小廻山城、讃岐城山城は壬申の乱を経た天武期の内政に関連するものであると考えておきたい。その性格は実用的な施設というよりも、山城を築城することに意義を有した、いわゆるモニュメントとしての城ということも考えておきたい。

本論執筆においては久保徹也、大橋雅也、渡邊誠、渡邊芳貴の各氏から多くのご助言をいただきました。また石城山城のオルソ画像作成については山口雄治氏の協力を得た。記して感謝いたします。

参考文献

- 稲田孝司2012「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』第34号 日本考古学協会
 今村峯雄・小林謙一・新免歳靖・坂本稔・谷山雅彦2007「炭素14測定からみた鬼城山遺構の築造年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集 国立歴史民俗博物館
 岡山県教育委員会編2013『史跡 鬼城山2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告236
 岡山市教育委員会編1989『大廻小廻山城跡発掘調査報告』
 小澤佳憲2012「朝鮮式山城と神籠石系山城」『日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』日本考古学協会2012年度福岡大会実行
 小澤佳憲2014「古代山城出土唐居敷から見た鞠智城の位置づけ」『鞠智城と古代社会』第二号 熊本県教育委員会
 小澤佳憲2016「古代山城城門出土の軸摺金具」『築城技術と遺物から見た古代山城』熊本県教育委員会
 小田富士雄2012「対馬・金田城の築城とその背景」『古文化談叢』第67集 九州古文化研究会
 小田富士雄2015a「白村江戦の戦後処理と国際関係」『古文化談叢』第73集 九州古文化研究会
 小田富士雄2015b「大宰府都城の形成と律令体制」『古文化談叢』第74集 九州古文化研究会
 亀田修一2009「鬼ノ城と朝鮮半島」『鬼ノ城と吉備津神社―「桃太郎の舞台」を科学する』シリーズ『岡山学』7 吉備人出版
 亀田修一2012「対馬金田城小考」『百済と周辺世界』成周鐸教授追慕論叢刊行委員会
 亀田修一2014「古代山城は完成していたのか」『鞠智城跡Ⅱ ―論考編1―』熊本県教育委員会
 亀田修一2016「西日本の古代山城」『日本古代考古学論集』同成社
 木村龍生2016「土器の様相からみた古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城』熊本県教育委員会
 金達寿1976「鬼の城をめぐる」『日本のなかの朝鮮文化』朝鮮文化社
 葛原克人1981「古代山城の特色」『日本城郭大系』別館1 創史者
 葛原克人1994「朝鮮式山城」『日本の古代国家と城』新人物往来社
 葛原克人2002「備中鬼ノ城の創築期をめぐる」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会
 葛原克人2005「鬼ノ城と東アジア」『古代を考える 吉備』吉川弘文館
 近藤浩一2015「古代朝鮮半島と肥後地域の交流史からみた鞠智城―築城背景と役割を探る―」『鞠智城と古代社会』第3号 熊本県教育委員会
 西条市教育委員会編2012『史跡 永納山城跡Ⅱ』
 鈴木靖民2011『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館
 総社市教育委員会編1998『総社市埋蔵文化財調査年報』8
 総社市教育委員会編1999『総社市埋蔵文化財調査年報』9
 総社市教育委員会編2005『古代山城 鬼ノ城』総社市埋蔵文化財発掘調査報告18

総社市教育委員会編2006『古代山城 鬼ノ城2』総社市埋蔵文化財発掘調査報告19
 第4回古代山城サミット高松大会実行委員会編2013『日本古代の山城』
 高橋護1976「鬼城山・築地山」『考古学ジャーナル』No.117 ニュー・サイエンス社
 高松市教育委員会編2008『屋嶋城跡Ⅱ』高松市埋蔵文化財調査報告書第113集
 高松市教育委員会編2016『屋嶋城跡－城門遺構整備事業報告書－』高松市埋蔵文化財調査報告第172集
 武田恭彰2016「鬼ノ城出土の土器の年代と歴史的背景」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第8号 岡山市埋蔵文化財センター
 坪井清足1961「城柵の設置」『世界考古学大系』4 平凡社
 出宮徳尚1978「吉備の古代山城試論」『考古学研究』第25巻第2号 考古学研究会
 出宮徳尚1984「古代山城の機能性の検討」『高地性集落と倭国大乱』小野忠熈博士退官記念出版事業会
 出宮徳尚1992「瀬戸内の古代山城」『新版 古代の日本』第4巻 中国・四国 角川書店
 西川宏1977「瀬戸内地方の古代山城」『日本古代文化の探究－城－』社会思想社
 乗岡実1992「古代山城」『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社
 平井典子2016「鬼ノ城（鬼城山）」『季刊考古学』第136号 雄山閣
 平井泰男2010「鬼ノ城～謎の古代山城～」『鬼ノ城～謎の古代山城～』岡山県立博物館
 広島県立府中高等学校地歴部編1968『奈良時代山城の研究』
 向井一雄1991「西日本の古代山城遺跡－類型化と編年についての試論－」『古代学研究』第125号 古代学研究会
 向井一雄1999「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』27 地域相研究会
 向井一雄2010「駅路からみた古代山城－見せる山城論序説－」『地図中心』453号 日本地図センター
 向井一雄2017『よみがえる古代山城 国際戦争と防衛ライン』吉川弘文館
 村上幸雄・乗岡実1999『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備人出版
 南健太郎2015「石積遺構からみた古代山城築造技術に関する試論」『鞠智城と古代社会』第3号 熊本県教育委員会
 南健太郎2016「石積遺構から見た古代山城の築城技術」『築城技術と遺物から見た古代山城』熊本県教育委員会
 山上弘1988「古代山城に関する一考察」『網干善教先生華甲記念 考古学論集』網干善教先生華甲記念刊行会
 李進熙1977「朝鮮と日本の山城」『日本古代文化の探究－城－』社会思想社
 渡邊誠2013「讃岐に築かれた二つの古代山城－「地方」の成立という視点から－」『讃岐国の幕開け』香川県埋蔵文化財センター

図版出典

図1・図6・図9：筆者撮影・作成。図6のオルソ画像作成には山口雄治氏の協力を得た。
 図2：高松市教育委員会編2016を一部改変。
 図3：写真は筆者撮影。図は村上・乗岡1999を一部改変。
 図4：西門：総社市教育委員会編1999、南門：総社市教育委員会編1998、東門：総社市教育委員会編2006、北門：総社市教育委員会編2005
 図5：岡山県教育委員会編2013
 図7：写真は筆者撮影。図は渡邊2013を一部改変。
 図8：西条市教育委員会編2012を一部改変。